

202247-000-5

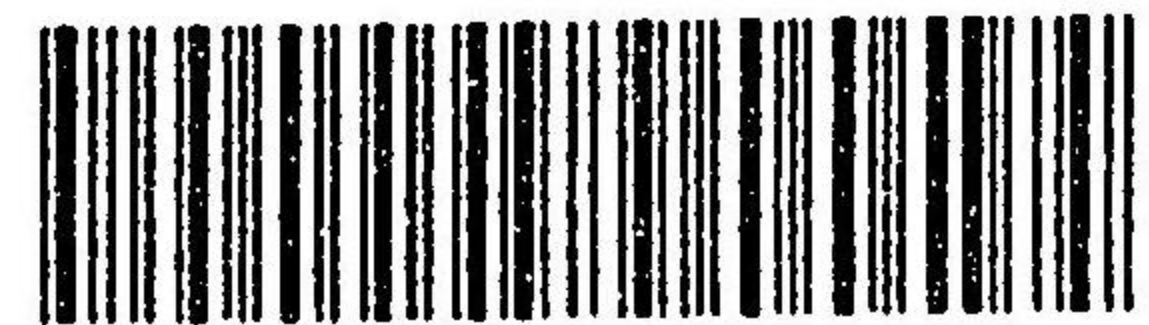
特69-56

西洋史

英語研究社 / 刊

M44.1

EDC-0114



史
洋
西

卷
下
一
力

特69
56

発行の要旨及使用方法

本誌は學生諸氏が繁雜なる復習を容易にし、記憶力を増進せしめんが爲に。従來の類書と異りたる新形式を以て編輯せられたるものなり。蓋カード式の便利は何人も認むる所なれども、未だ各學科に亘れるものなきを遺憾とし、多年教授に經驗ある各専門大家に執筆を請ひ、綴り方に就き幾多の新工風を擬らしたるもの即ち本綴なりとす。

是れが使用法等に就きては、使用者自ら便宜の方法を執るべきも試みに其一二の例を示さん。

一 使用者は、カード表面の略表に依りて、其事

實を答へ、後裏面を見て答の正否を検すべし。

一 右の方法に依り、毎日カードの數を定めて順序に復習し、記憶し終はりたる物は位置を換へ、記憶し難き物は殘し置きて更に復習すべし。

一 又各學科中より、特に復習せんとする部分、又は記憶し難きもの、みを蒐めて練習するも一方法たり。

一 斯くして記憶し得たらば、左欄の參考問題につきて更に練習を試むべし。答案はカード中に

て解するを得ん。

一 學科の全體を通覽せんと欲せば、カードの裏面のみを見るべし。疑問あらば索引に依りて

同じくカードの裏面を見よ、直に氷解すべし。

一 各教科書中の事項は網羅したれども尙數學に於ける問題の如き遺漏は使用者自らカードを製

し、充分に補足して完全のものとせらるべし。

一 右の便利を計らん爲、本社に於て、同形同質の紙に罫を引き、穴を穿ち實費を以て發賣せり。

(實用新案登録「一六五一號」)

發行の要旨及使用方法

本誌は學生諸氏が繁雜なる復習を容易にし、記憶力を増進せしめんが爲に。従來の類書と異りたる新形式を以て編輯せられたるものなり。蓋カ

ード式の便利は何人も認むる所なれども、未だ各學科に亘れるものなきを遺憾とし、多年教授に經驗ある各専門大家に執筆を請ひ、綴り方に就き幾多の新工風を凝らしたるもの即ち本綴なりとす。

是れが使用法等に就きては、使用者自ら便宜の方法を執るべきも試みに其一二の例を示さん。

使用者は、カード表面の略表に依りて、其事實を答へ、後裏面を見て答の正否を檢すべし。

右の方法に依り、毎日カードの數を定めて順序に復習し、記憶し終はりたる物は位置を換へ、記憶し難き物は置き更にて復習すべし。

又各學科中より、特に復習せんとする部分、又は記憶し難きもの一みを蒐めて練習するも、方法たり。

斯くして記憶し得たらば、左欄の參考問題に就きて更に練習を試むべし。答案はカード中に

一學科の全體を通覽せんと欲せば、カードの裏面のみを見るべし。疑問あらば索引に依りて同じくカードの裏面を見よ、直に氷解すべし。

各教科書中の事項に網羅したれども尙數學に於ける問題の如き遺漏は使用者自らカードを製し、充分に補足して完全のものとせらるべし。

右の便利を計らん爲、本社に於て、同形同質の紙に罫を引き、穴を穿ち實費を以て發賣せり。

(實用新案登録一一六五一號)

カード式西洋史目錄

下綴は六十八號より始まる

第三部 近古史

宗教改革時代

宗教改革(一).....六

宗教改革(二).....六

宗教改革(三).....七

宗教改革(四).....七

宗教改革の反動.....七

宗教改革の影響(一)ホーデルランド反亂.....七

宗教改革の影響(二)イギリスの宗教改革(1).....七

宗教改革の影響(三)イギリスの宗教改革(2).....七

宗教改革の影響(四)三十年戦争(7).....七

宗教改革の影響(5).....七

宗教改革の影響(6).....七

宗教改革の影響(7).....七

宗教改革の影響(8).....七

宗教改革の影響(9).....七

宗教改革の影響(10).....七

宗教改革の影響(11).....七

宗教改革の影響(12).....七

宗教改革の影響(13).....七

宗教改革の影響(14).....七

宗教改革の影響(15).....七

宗教改革の影響(16).....七

宗教改革の影響(17).....七

宗教改革の影響(18).....七

宗教改革の影響(19).....七

宗教改革の影響(20).....七

宗教改革の影響(21).....七

宗教改革の影響(22).....七

宗教改革の影響(23).....七

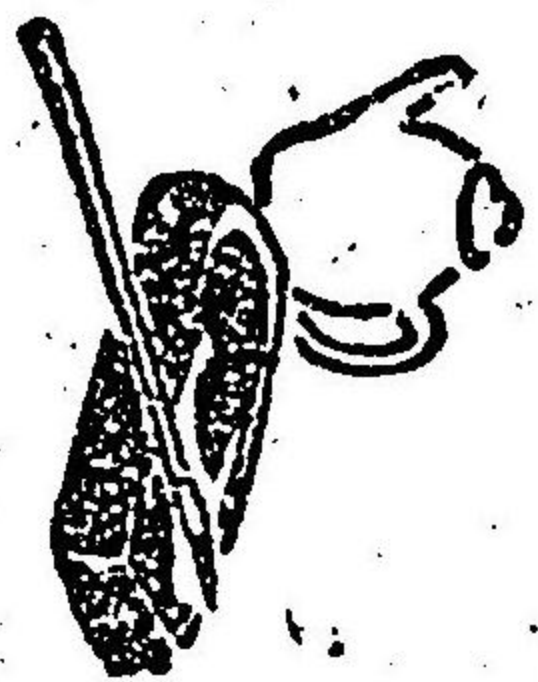


宗教改革の影響(24).....七
宗教改革の影響(25).....七
宗教改革の影響(26).....七
宗教改革の影響(27).....七
宗教改革の影響(28).....七
宗教改革の影響(29).....七
宗教改革の影響(30).....七
宗教改革の影響(31).....七
宗教改革の影響(32).....七
宗教改革の影響(33).....七
宗教改革の影響(34).....七
宗教改革の影響(35).....七
宗教改革の影響(36).....七
宗教改革の影響(37).....七
宗教改革の影響(38).....七
宗教改革の影響(39).....七
宗教改革の影響(40).....七
宗教改革の影響(41).....七
宗教改革の影響(42).....七
宗教改革の影響(43).....七
宗教改革の影響(44).....七
宗教改革の影響(45).....七
宗教改革の影響(46).....七
宗教改革の影響(47).....七
宗教改革の影響(48).....七
宗教改革の影響(49).....七
宗教改革の影響(50).....七
宗教改革の影響(51).....七
宗教改革の影響(52).....七
宗教改革の影響(53).....七
宗教改革の影響(54).....七
宗教改革の影響(55).....七
宗教改革の影響(56).....七
宗教改革の影響(57).....七
宗教改革の影響(58).....七
宗教改革の影響(59).....七
宗教改革の影響(60).....七
宗教改革の影響(61).....七
宗教改革の影響(62).....七
宗教改革の影響(63).....七
宗教改革の影響(64).....七
宗教改革の影響(65).....七
宗教改革の影響(66).....七
宗教改革の影響(67).....七
宗教改革の影響(68).....七
宗教改革の影響(69).....七
宗教改革の影響(70).....七
宗教改革の影響(71).....七
宗教改革の影響(72).....七
宗教改革の影響(73).....七
宗教改革の影響(74).....七
宗教改革の影響(75).....七
宗教改革の影響(76).....七
宗教改革の影響(77).....七
宗教改革の影響(78).....七
宗教改革の影響(79).....七
宗教改革の影響(80).....七
宗教改革の影響(81).....七
宗教改革の影響(82).....七
宗教改革の影響(83).....七
宗教改革の影響(84).....七
宗教改革の影響(85).....七
宗教改革の影響(86).....七
宗教改革の影響(87).....七
宗教改革の影響(88).....七
宗教改革の影響(89).....七
宗教改革の影響(90).....七
宗教改革の影響(91).....七
宗教改革の影響(92).....七
宗教改革の影響(93).....七
宗教改革の影響(94).....七
宗教改革の影響(95).....七
宗教改革の影響(96).....七
宗教改革の影響(97).....七
宗教改革の影響(98).....七
宗教改革の影響(99).....七
宗教改革の影響(100).....七

プロシア勃興(一).....	六九
プロシア勃興(二)フレデリキ大王.....	七〇
七年戦争.....	七二
合衆國の獨立(一).....	七三
合衆國の獨立(二).....	七三
合衆國の獨立(三).....	七四
近古の文化(一)科 學.....	七五
近古の文化(二)哲學、歴史、法律、經濟.....	七六
近古の文化(三)文 學.....	七七
近世史 佛國革命時代.....	七八
フランス革命(一)原因.....	七八
フランス革命(二)國民議會時代.....	七八
フランス革命(三)立法議會時代.....	八〇
フランス革命(四)國民集會時代.....	八〇
ナポレオンの革命(一)統督政府時代.....	八二
ナポレオンの革命(二)執政官時代.....	八三
ナポレオンの革命(三)優勢時代(一).....	八四
ナポレオンの革命(四)優勢時代(二).....	八五
ナポレオンの革命(五)衰勢時代(一).....	八五
ナポレオンの革命(六)衰勢時代(二).....	八五
ウイーンの會議.....	八六
自由統一主義發生及大成時代.....	八六
神聖同盟.....	八九
アメリカ諸國獨立.....	九〇
ギリシアの獨立.....	九二
七月革命及其影響.....	九三
英國改革.....	九三
東方問題.....	九四

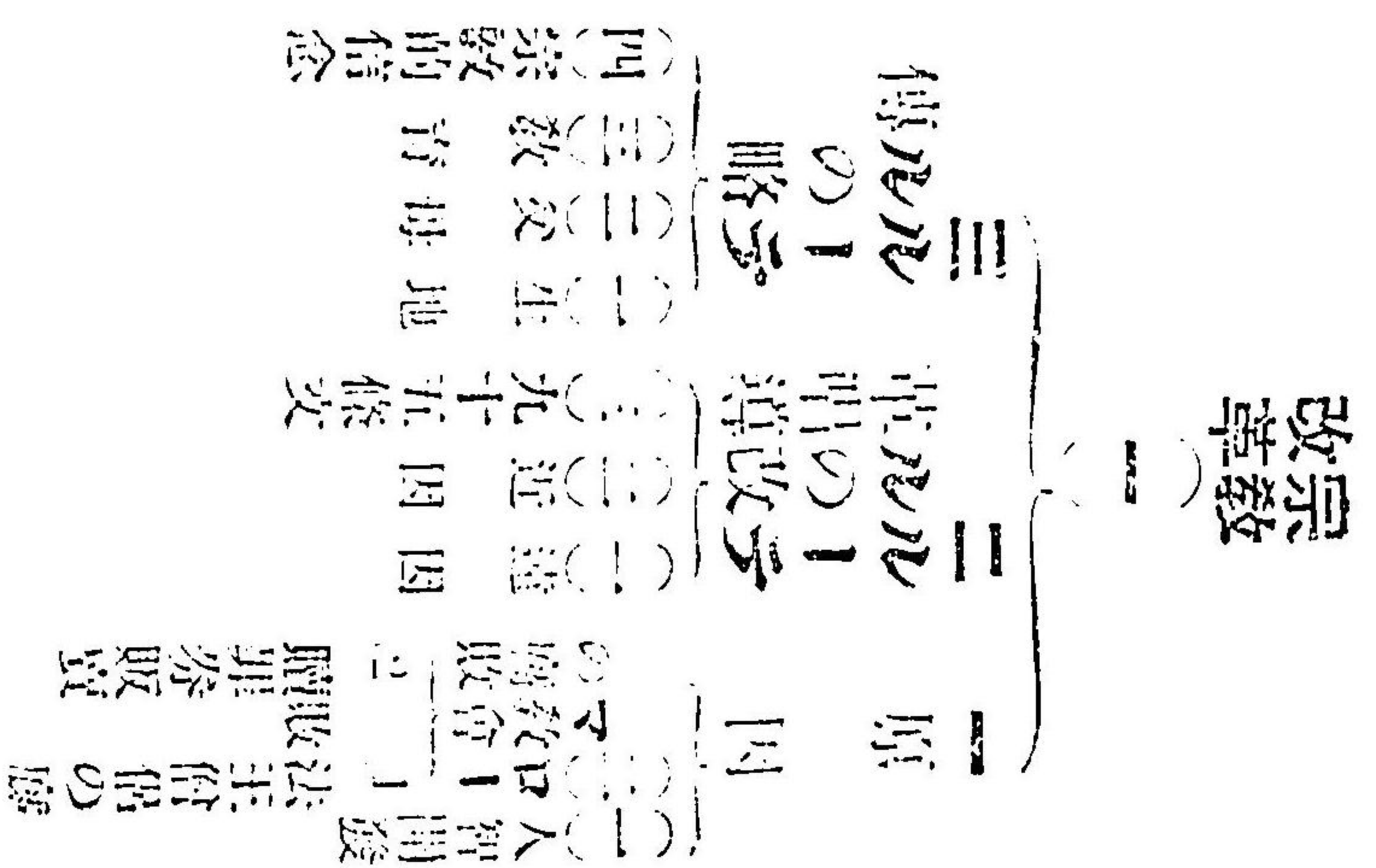
目 次 終

二月革命及蔡翁三世.....	九五
二月革命の影響.....	九六
クリム戦争.....	九七
イタリヤ統一(一).....	九八
イタリヤ統一(二).....	九九
プロイツ統一(一).....	一〇〇
プロイツ統一(二)普墺戦争.....	一〇一
プロイツ統一(三)普佛戦争.....	一〇三
プロイツ統一(四)普佛戦争.....	一〇三
北米南北戦争(一).....	一〇四
北米南北戦争(二).....	一〇五
露土戦争(一)原因.....	一〇六
露土戦争(二)戦争及結果.....	一〇七
三國對三國同盟(一).....	一〇八
歐米諸國の勢力擴張(一)アジア.....	一〇九
歐米諸國の勢力擴張(二)アジア.....	一〇九
歐米諸國の勢力擴張(三)アメリカ分割(一).....	一一〇
歐米諸國の勢力擴張(四)アメリカ分割(二).....	一一三
歐米諸國の勢力擴張(五)太平洋分割.....	一一三
近古文化(一)文 學.....	一一四
近古文化(二)哲學及史學.....	一一五
近古文化(三)科 學.....	一一六
近古近世重要年代.....	一一七



- 一 ローマ教會の腐敗を述べよ
- 二 贖罪券とは何か
- 三 ナツメルとは何人か
- 四 改革期道真前に於けるル・テルに於て述べよ

参考問題



一 原因
 (一) 人智開發
 (二) 國王僧侶の腐敗
 (三) 教會の腐敗 (2)
 贖罪券販賣

二 ルールの改革
 (一) 遠因
 (二) 近因
 (三) 九十五條文

三 ルールの略
 (一) 生地
 (二) 父母
 (三) 教育
 (四) 宗敎的信念

參考問題

- 一 ローマ教會の腐敗を述べよ
- 二 贖罪券とは何ぞ
- 三 ツツェルとは何人か
- 四 改革唱道以前に於けるルーテルにつきて述べよ

第三部 近古史

第一編 宗敎改革時代

一 原因、原因の一は中世末文藝復興の結果人智進歩しローマ教會の教義命令に盲從せず自ら聖書を研究するに至れることこれなり、次はローマ教會の腐敗にして教會の首長たる法王、及僧侶等の敗徳無學は首語に絶せり、殊に贖罪券を賣りて私利を營めるが如き甚しく世人の非難攻撃を受けたり。

二 ルーテルの改革唱導、既にして一五二七年法王レオ十世、サン、ペテロ寺院を修築せんとて其費に窮し爲めに盛に贖罪券を賣らしめたり、獨逸にて

はライプツの大僧正之を監し僧テツルエ之を販賣せり、而して其言辯舉動頗る陋劣を極めたり、ルーテル之を見て大に憤慨し一五二七年十月三十一日九十

五ヶ條の意見書をライプツに掲示し、この意見書は忽ち印刷せられて全獨逸に廣まれり、これ宗敎改革の發端なり。

三 マルチノルーテルの略傳、ルーテルは一四八三年

サクソニアのアイズレーンに生る、父は貧しき礦夫なりしも教育に熱心にして彼をマギザルグアプ、イゼナハの學校に送れり、一五〇一年マルクト大

學に入り法律を學べりしが彼はかゝる現世的學問に満足すること能はず終に法律を捨て、エルフルトの

僧院に入り熱心、神學を研究して一個の信念を得たり、一五〇八年ウイテンベルヒ大學の神學教授となり、一五二一年ローマに就し教會の腐敗を目撃し大に宗敎改革の必要を認めたり。

(一) 法王黨の反對

(二) ルーテルの宣告

(三) 破門

(四) 破門狀燒棄

(五) サクソニア侯庇護

(一) 獨帝カロロの勢カ

(二) 佛王反對

1. 血統 2. 領土

四 改革說とローマ法王

五 獨逸とフランス

宗敎改革(二)

參考問題

一 ルーテルの改革說に對する法王及法王黨の態度如何

二 ライプツヒ公開討論會に於けるルーテルの所説如何

三 法王破門の効力に對する今昔の差、

四 獨帝カロロ五世の血族的關係を述べ、

五 ランス王の獨逸に反對する理由如何

宗教改革

(西洋史六九)

四 改革説とロリア法王、ルイテルの改革説出づるや、

法王黨のもの更に此改革説を攻撃し、法王は一五二八年ルイテルをアウクスブルグに召喚して其説の取消を要求せしむルイテル動かず。一五一九年法王黨の博士エック、ライプチヒ公開討論會に於てルイテルの説を攻撃するやルイテル更に又大に抗論し法王の無上權を否定し法王も又過誤なき能はず故に耶穌の教義につきては一に聖書によるべきことを論じて譲らず。法王終にルイテルを破門せり。ルイテル屈せず一七二〇年七月十日ウイテンベルヒ寺院の門前に於て法王の破門狀を燒棄し斷然としてロリア教會と斷てり。さて復古學者等多くはルイテルの説を養ひ又サクソニア侯はルイテルを庇護し改革説漸盛なり。法王大に苦心し終に改革説鎮壓の掇を獨帝カロロ五世に乞ふ。

五 獨逸とフランス、(一)獨逸にてはハズブルグ家

のマクシミリアン帝たりしが一五一九年死してイスパニア王カロロ相續してカロロ五世と稱せり
 マクシミリアン—アトリボ—カロロ五
 フェルジナント
 アサベラ
 カロロ五世は相續の關係よりイスパニア、オーストリアの外にナポリ、ネーデルラント、南北アメリカに於ける廣大なる領地を併有するに至れり、(二)これに於ける廣大なる領地を併有するに於て獨逸と相争ふに至りしなり。と自ら獨帝たらんと運動せしむるも破られたれば爾來獨逸と相争ふに至りしなり。

(西洋史七〇)

- (一) 獨帝法王を掇く
- (二) 獨帝とルイテル

- 1. 取消要求
- 2. ルイテルが

- (三) 1. ヴルトラグ
- 2. 聖書獨譯

- (1) ルイテルの活動

- (2) 獨帝外戰
- (3) 一時的信教自由

- (1) 獨帝の外戰勝利
- (2) 改革說禁止

- (3) プロテスタント

宗教改革(三)

五 ヴォルム大會議

六ズパ

ルイエバ

參考問題

- 一 獨逸皇帝の法王を援助せし理由を述べよ、

- 二 ヴォルム宗教會議に於けるルイテルの主張を述べよ

- 三 隱退中ルイテルのなせし事業

- 四 スパイエル會議に於ける獨帝の反覆的言動を述べよ

- 五 プロテスタントとは何ぞ

宗教改革(三) (西洋史七〇)

五 オールムズの會議 (一)獨帝カロロ五世は獨佛の

關係上の如くなれば法王と結托するを利なりとし法

王の乞に従ひて改革說鎮壓主義を採れり、(二)即一

五二年國會をオールムズに開きルイテルを召喚し

て其說を放棄せしめんとせり、然れどもルイテルは

斷然これを斥けて曰く法王及宗教會議の命令は悉く

信すべからず、信すべきは聖書のみ、我説に異なら

ば聖書によりて證明せし然らずんば予は我説を曲ぐ

ること能はずと、帝乃ルイテル、所説を聽さざるに

より邪教徒なりとし法律上の保護を取消し、且其著

書を燒き改革說の唱導を嚴禁せり、(三)かくてルイ

テルは禍の其身に及ばんことを恐れてサクソニアに

逃れサクソニア公保護の下にワルトブルグ城に隱居

すること一年、この間彼はギリシア、ヘブライの古

書により聖書を獨逸語に譯せり、これ今日獨逸に行

はるゝ聖書なり。

六 スパイエル會議 (一)籠居一年にしてルイテルは

再び出て、改革說を唱導す、此時獨帝はイタリアに

於て佛王と争ひ、東方に於てトルコの侵入を防禦す

る爲め一日の暇なし、やむなく一時國內の改革派を

鎮壓せん爲め一五二六年スパイエルに宗教會議を開

き次に開かるべき會議まで信教の自由を許せり、こ

ゝに於てルイテル派の人々は會堂を建て學校を起し

又大に貧民の救助等に盡力せり。(二)然るに一五

二九年獨帝は佛國に勝ちトルコを防禦し得たれば再

開き改革說の布教を禁せり、改革派大に其非を鳴ら

し飽迄之れに抗議せり、これより此派を抗議派

(Protestant)と呼ぶるに至れり。

(西洋史七一)

七 シツマールカルト同盟

ハニサルンズ (一)トルコ侵入

(二)信教自由許可

(三)トルコ人驅逐

九 シツマールカ (一)トリエンツ會議

(二)新舊兩派の戰

十 アウグズブルグ會議 (一)ルイテル所説公

認

(二)諸侯信教自由

(三)人民は未だし

十一 新教の別 (一)ツインツグリー派

(二)カルビン派

宗教改革(四)

八ニサルンズ會議

九シツマールカ

十アウグズブルグ會議

十一新教の別

一 シツマールカルト同盟の目的を問ふ

二 シツマールカルト戦争とは何ぞ

三 アウグズブルグの宗教會議につきて述べよ

四 アウグズブルグの宗教會議に於ける人民の得たる

權利を述べよ

五 新教の別派を問ふ

六 カルビンとは何んぞ

(三十五年高等學校)

參考問題

七 シツマルカルド同盟、スパイエル會議の後新舊兩教の争益、激烈となりしかば新教徒の諸候は自衛の爲め一種の攻守同盟をなす名けてシツマルカルト同盟と云ふ。

八 ニッルンベルヒ會議 此時に當りトルコのスレイマン一世大兵を以てウイーンを圍みしかばカロロ五世方を新教撲滅に專にすること能はず一五三二年ニッルンベルヒ會議に於て信教の自由を公許し擧國ニ致トルコ人を撃退せり此間に於て新教説は大に勢力を北歐に張れり、

九 シツマルカルド戦争 (一)既にして一五四年獨帝はフランスとクレビーに和し、兩國の争ひ始めて已むに至り、翌年トリエント會議に於て新教徒に不利なる決議をなし、更に兵を以て新教徒を抑壓せんとせしかば一五四六年新教同盟は帝に抗して戦を開きしが一度は敗れて首領サクソニア侯捕虜となりしと後佛王ヘンリー二世の援助を得て一五五二年帝の軍を破りたり、

十 アウクスブルの會議 かくてカロロも到底新教を撲滅し能はざることと察し一五五五年九月アウクスブルグに宗教大會議を開き(一)ルイテルの改革説を公認し(二)諸候都市に其領内に於て自由に宗教を定め得るの權利を與へ(三)一般人民には移住し得るの自由を得たるものにあらざりしもこれによりて半世紀の平和を保てり。

十一 スイスにツウイングリあり一新教の別派(一)スイスにツウイングリあり一八八年改革を唱導し舊教徒と戦ひて陣没し、(二)スイスにカルビンあり又別に新教を唱へしが國人に追れてジュネバに走りて大に信徒を得たり。

宗教改革(四) (西洋史七一)

宗教改革の反動

- 一 新教傳播 (一) 傳播せし諸國 (二) 舊教徒覺醒 (三) 設立者及目的 (四) 活動 (五) 海外 (六) ザビエル (七) マテオリチ
- 二 エスナイダ 會設立
- 三 教會の改革
- 四 西王フイリポ盡力

(西洋史七二)

參考問題

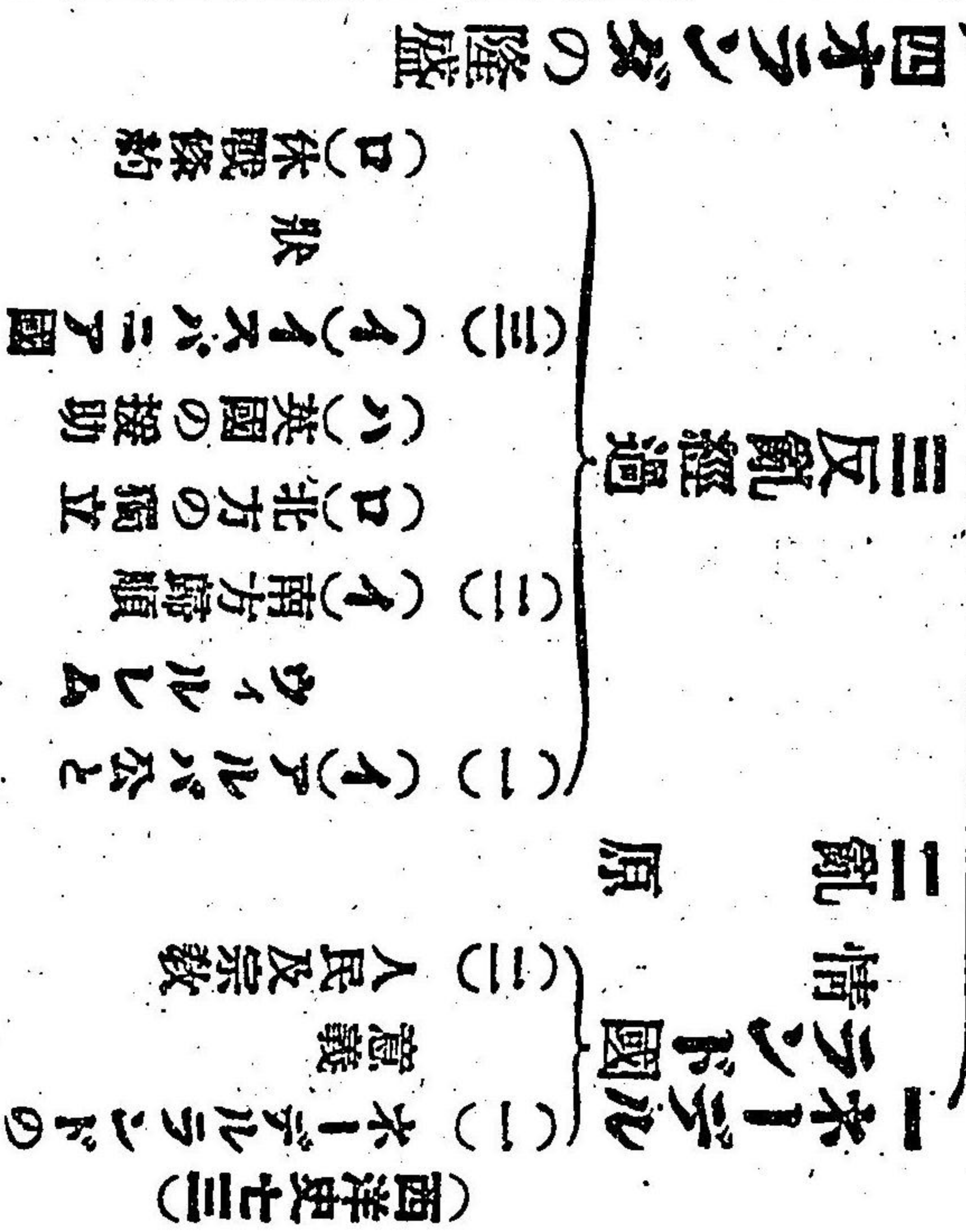
- 一 エスナイダ會とは何ぞや (四十二年神戶高商)
- 二 フランシス、ザビエルにつきて述べよ (三十二年高)
- 三 イクナチオロムとは如何なる人ぞ 宗教改革の反動とは如何なる事ぞ
- 四 西洋より我國に始めて渡來せし宗教は何宗の何派に屬し如何なる性質のものなりしか及其頃歐洲にて強大の勢を有せし何人なりしか (三十五年機關校)

宗教改革の反動 (西洋史七二)

一 新教の傳播 十六世紀中葉に於ては新教は獨逸、スウイス、デネマルク、スカンヂナビア、イングランド、ホーランド、ポリアント、ホンガリア等に傳播し勢益盛になりたれば舊教派も漸く覺醒し種々勢力恢復の運動を開始せり其主なるもの左の如し、

二 エスエス教會の設立 (一) エスエス教會とは耶蘇會の意なり、本會は一五四〇年イスパニア人イグナチオ・ロヨラが其友ザビエル等と謀りて舊教保護の爲めに設けたるものなり (二) 彼等は會員中才辨あるものを撰みて諸國の宮廷に送り學問あるものを學校の教師となし熱情あるものをして説教せしめ切りに舊教の弘通を圖れり。(三) 尙エスエス會徒は盛に海外布教に従事せり、中にもザビエルは一五四二年インドのゴアに來り後我國にも來り布教せしが、十分なる結果を得る能はず支那に還らんとする途中に死せり、又マテオリチ(利瑪竇)は一五八三年支那に來り布教すること約三十年に及びり。
 三 教會の改革 教會は一五四五年トリエントに會議を開き積弊を除きて以て新教徒の攻撃を避けんとせり。
 四 フアイリボの盡力 イスパニア王フアイリボ二世はイザリヌ女王マリアと婚し、後又ホルトガル王后イサベラと婚して其王位を兼ね大なる勢力を以て舊教を保護し自舊教の保護者を以て居れり

ネーデルラントの亂



參考問題

- 一 ネーデルラントの國情如何
- 二 ネーデルラントの宗教如何
- 三 反亂の原因
- 四 何故に南方は歸順せしか
- 五 ウイルム沈黙の傳を述べよ
- 六 ユトレヒト同盟とは何ぞ
- 七 モリッツとは誰ぞ
- 八 休戰に至りし次第を述べよ

ネーデルラント反亂(オランダの獨立)

(西洋史七三)

一 ネーデルラントの國情 (一)ネーデルラントは

低地の意にして今のオランダ、ベルギー兩國の地を

稱せり、(二)人民は北部デールマニ族、南部はラチン

系の人民なり宗教は北部は新教、南部は舊教なり、

二 反亂の原因、此地もと獨帝カロロ五世の領地なり

しがイスパニア王フィリポ二世譲り受くるや政治上

に於ては都府の特權を奪ひ自治制を廢して專制を行

ひ宗教上にては新教を嚴禁して舊教を強ひたれば人

民激昂して終に亂をなす、

三 反亂の經過 (一)フィリポ王即アルバ公をして兵

二万を以てネーデルラントを討たしむ、アルバ公勇

なれども性殘忍なり、一五六七年ネーデルラントに

來るや反對派の貴族を殺し又重税を課し宗教裁判所

を設けて新教徒を殺戮す。オランジェ侯ウイレム

屢義兵を起して戦ひしも捷たず。三

(二)然るに一五七八年ハールナム(アル

バ)に代りて總督となるや都府の特權を復して南部十

州をイスパニアに歸順せしむ。こゝに於て北方七州

一五七九年ユトレヒト同盟を組織し次で一五八一年

獨立を宣言しオランジェ侯ウイレムを大統領とせ

り、これオランダ國の起原なり。一五八四年に至りウ

イレルム刺客の毒手に斃れしが同盟益固く其子モリツ

ツを大統領とし更に英國の援兵を得て依然イス

パニアと戦へり、

(三)然るにイスパニアは一五八八年其大艦隊は英國

に破られ翌年フィリポ二世死し、フィリポ三世嗣き

〇九終に同盟を屈服すること能はざるを悟り、一六

九年和を講じ十年間の休戦をなす、

(西洋史七四)

一 ハンズリー八 (一)信仰保護者

(二)皇后離婚問題

(三)ローマ教會と絶

二 イギリス教會の基なる (一)エドワード六世

(二)クランマーの盡

力

三 イギリスの舊教復興

イギリスの宗教改革

一世

- 一 ハンズリー八世の宗教意見如何
- 二 ハンズリー八世がローマ教會と斷つに至りし次第を述べよ
- 三 法王は何故ハンズリーの乞を許さざりしか
- 四 アクトオヴスプレマシーとは何ぞ
- 五 クランマー大僧正につきて述べよ
- 六 イギリス舊教復興につきて述べよ

參考問題

いざりす宗教改革 (其一)

ヘンリー八世 (一) ルーテルが改革を唱導せし頃の英王はチョーブル家のヘンリー八世なり王は元來舊教信者なりしかば新教に反對し法王より信仰保護者の稱號を得たる程なりき。

(二) 然るに王は皇后カタリナを離婚せんとし法王と相争ふに至れり蓋し皇后はイヌバニアの皇女にして八世の兄アーサーの后なりしをアーサー死後ヘンリー八世と婚したる者なり、婚後三男一女を生かしも男子皆死したれば八世は男子相續者を望み終に不正結婚を名として離婚を法王に要求せり、然るに皇后は獨帝カロロ五世の叔母なれば法王獨帝を憚りて之を許さず(三) 英王怒りて法王と絶ち一五三三年クラマニをカクタベリーの大僧正となし其手により離婚を許可せしめたり、更に一五三四年には英國會は至尊條令(Let of Supremacy) を發布しイギリス内には法王權の行はざること及び國王を以てイギリス王トホルド六世即位す大僧正クラマニ新教に據り祈禱書を編纂し又禮拜式を定め英國教會の基なる。イヌバニア王アメリゴ二世と婚し舊教を採用し法王に處せり、後女王は佛國と戦ひ一五五八年佛將ギロワの爲めにカレシを奪はれ大に國民の憤怒を買いて死せり。

一 エリザベタと新教

二 エリザ (一) スコットランドの新教

イヌバニアと (二) 女王マリア

マリア (三) マリアの死刑

イギリス宗教改革 (三)

三 イギリス

アスとイ (一) フォルボ憤る

(二) 必勝艦隊

アスとイ (三) 英國海上權

四 エリザ

イヌバニア時 (一) 東印度商會

(二) 北米植民地

(三) シェクスピア

參考問題

一 清淨派とは何を

二 ノクスとは誰ぞ

三 マリアとエリザベタとの關係を述べよ

四 必勝艦隊とは何ぞ(三十二年東京高師)

五 エリザベタ時代の英國につきて述べよ

イギリス宗教改革 (其二)

一 エリザベタと新教
 (一)エリザベタ在位一五五八、一六〇三はヘンリー八世の女容貌美ならざるも豊動活潑雄偉氣象丈夫の風ありマリアに次きて王となり(二)新教を採用しイギリス教會を國教とし之を奉ぜざるものを嚴刑に處せり、此時國教に反對せし新教派に清淨派(ピューリタント)あり、マリアの時スウイスに逃れカレピンに化せられて歸國せるものなり。

二 エリザタとマリア (一)スコットランドに於てもジェームス五世の時新教行はれノックス等の盡力により漸く私布するに至れり(二)ジェームス死後マリア女皇たりマリアはジェームスの女にして佛王フランシス二世に嫁せしが王の死後歸國してマリアは常にイギリス王位を望めり然れども歸國後舊教を奉じ且素行修らざりしを以て人望を失ひ王位を奪はれ禁固されたり一五六八年逃れてイギリスに來りエリザベタに授すエリザベタ捕へて之を幽閉す、歐州舊教徒はエリザベタを諍殺してマリアを救助してイギリス王位に即かしめんと謀りしも陰謀洩れ一五八七年エリザベタ終にマリアを死刑に處す、イギリスボニ世はエリザベタが新教を奉じ且オランダを助けしを惡み居たりしに今又マリアを殺せしにより終に百三艘よりなる所謂必勝艦隊を以て英國を攻めしが却て大に敗られ是より西國の勢力復振はず英國の海上權漸く大となれり。

四 エリザベタ時代は東に印度商會立ち北米に植民地起り、國內には文藝に盛に起きシエクスピア等の大家現はれ、所謂エリザベタ時代の隆盛を現出せり。

フランスの内亂

- 一 新教抑壓
 - (一)エリザベ
 - (二)ギーズの抑壓
- 二 母后の野
 - (一)新教の布教を許す
 - (二)新舊兩教徒和解策
 - (三)セントバルトロムオ祭夜の虐殺
- 三 ヘンリー
 - (一)パロア王家絶ゆ
 - (二)ヘンリー四世即位
 - (三)ナント勅令
 - (四)王の内治功成
- 四 世

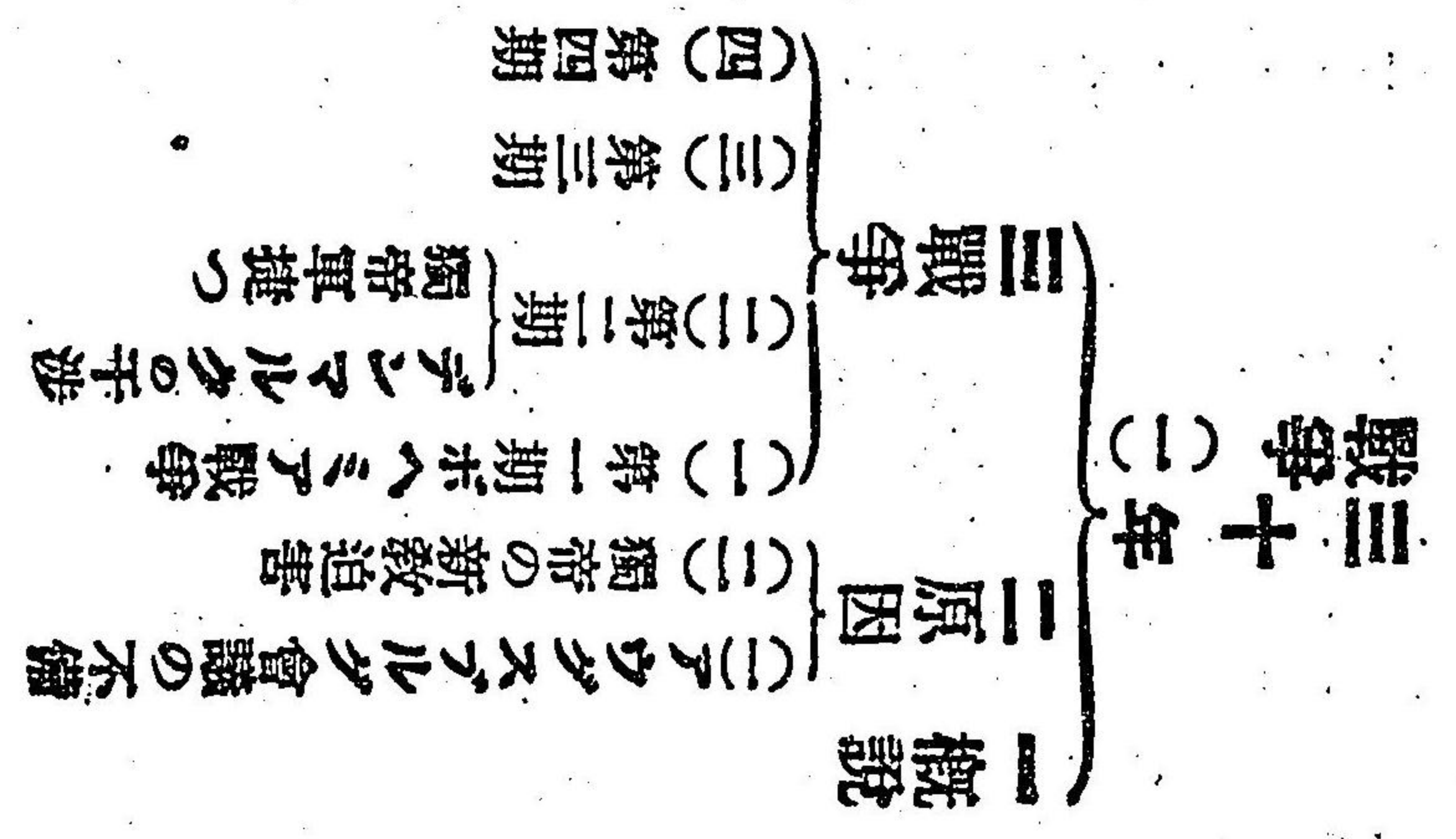
參考問題

- 一 ユーグノーとは何ぞ、
- 二 母后カタリナは何の爲に新教の布教を許せしか、
- 三 セントバルトロムオ祭夜の虐殺とは何ぞ、
- 四 ナントの勅令とは何ぞ、
- 五 ヘンリー四世につきて述べよ、
- 六 ショリとは誰ぞ、

フランスの内亂 (西洋史七六)

一 新教抑壓 (一)佛國にはカルビン派の新教行はる
 之をエーグノーと稱す、(二)一五五九年フランス
 二世即位するや外戚ギーズ侯權を專にし且新教を敵
 視して迫害を加ふること甚し、
 二 母後の野心 (一)フランス二世早世し弟カロロ立
 つに及び母后カタリナ攝政す、母后は新教徒の援助
 をかりギーズ家を抑へ自ら政權を專にせんとし新教
 徒に布教の自由を興へしより新舊兩教徒の争益激烈
 を極む(二)然るに王は對外關係より新舊兩教徒を和
 解せしめん爲め妹を以て新教徒の首領ナバラ王ヘン
 リーに嫁しぬこれより新教漸く盛なり、(三)然るに
 母后は政權の新教徒に遷らん事を恐れ再びギーズ侯
 と合し恰もナバラ王の婚儀に列せんと爲め集りたる新
 教徒の未だパリを去らざるに乘じ一五七二年聖バル
 トロヌ祭の夜半俄に起ちて新教徒を虐殺したり此
 時パリに殺されたるもの二千餘人地方に於ても新教
 徒の殺されたるもの三萬餘人と云ふ、然も新教徒の
 三 反抗益盛なりき。(一)一五七四年カロロ九世没し弟
 ヘンリー四世、(二)一五七四年カロロ九世没し弟
 ヘンリー三世次ギーズの專權を惡みて之を殺しし
 が王も間もなく暗殺せられ、ナバラ王統絶ゆ、
 リに於てナバラ王ヘンリー入りて佛王となるこれヘン
 リー四世なり。(二)王は即位の後國家を統御する便
 宜上蓋教に改宗し次(即位の年即一五九八)ナント
 の勅令を發し信仰の自由を許し新舊兩教徒に同一の
 權利を興へたれば多年の争亂全く止む、(三)かくて
 王は平和の時を利して國力の増進を計り賢相ジカ
 リを用ひ富國強兵の實を擧げ、以て覇を歐洲に唱へ
 んとせしが一六一〇年狂人の爲に殺されたり。然れ
 ども將來佛國強大の源は王の世にありと謂ふ可し。

(西洋史七)



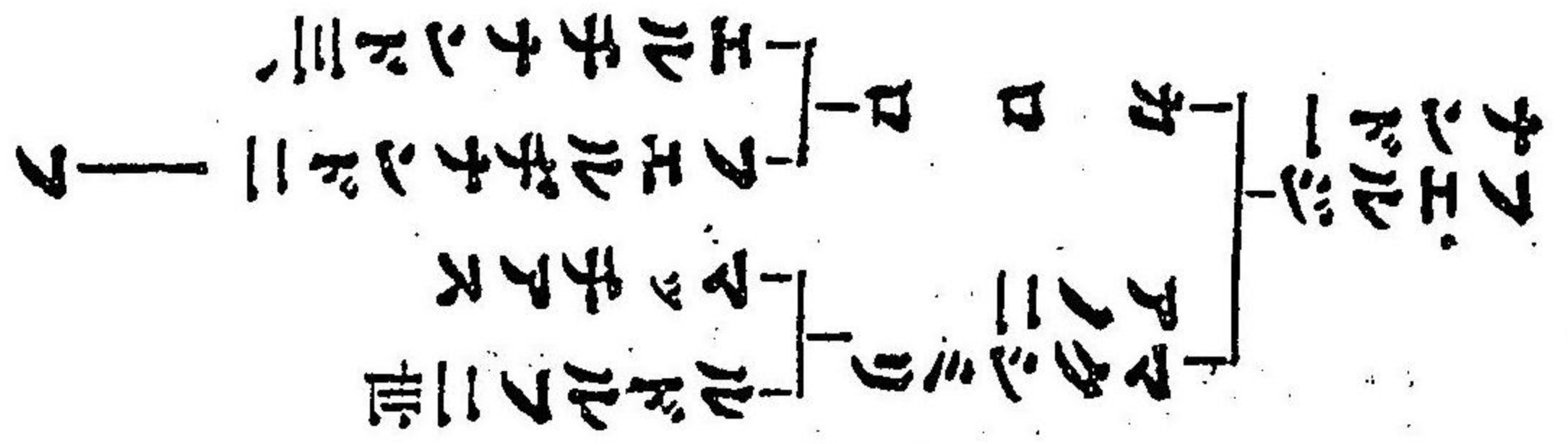
參考問題

- 一 三十年戦争の原因を述べよ、
- 二 デンマルク王を援助したる國如何
- 三 三十年戦争を何期に分つか
- 四 ヴェンヌアインは誰ぞ
- 五 三十年戦争の結果を述べよ (三十七年東京高師)

三十年戦争 (西洋史七七)

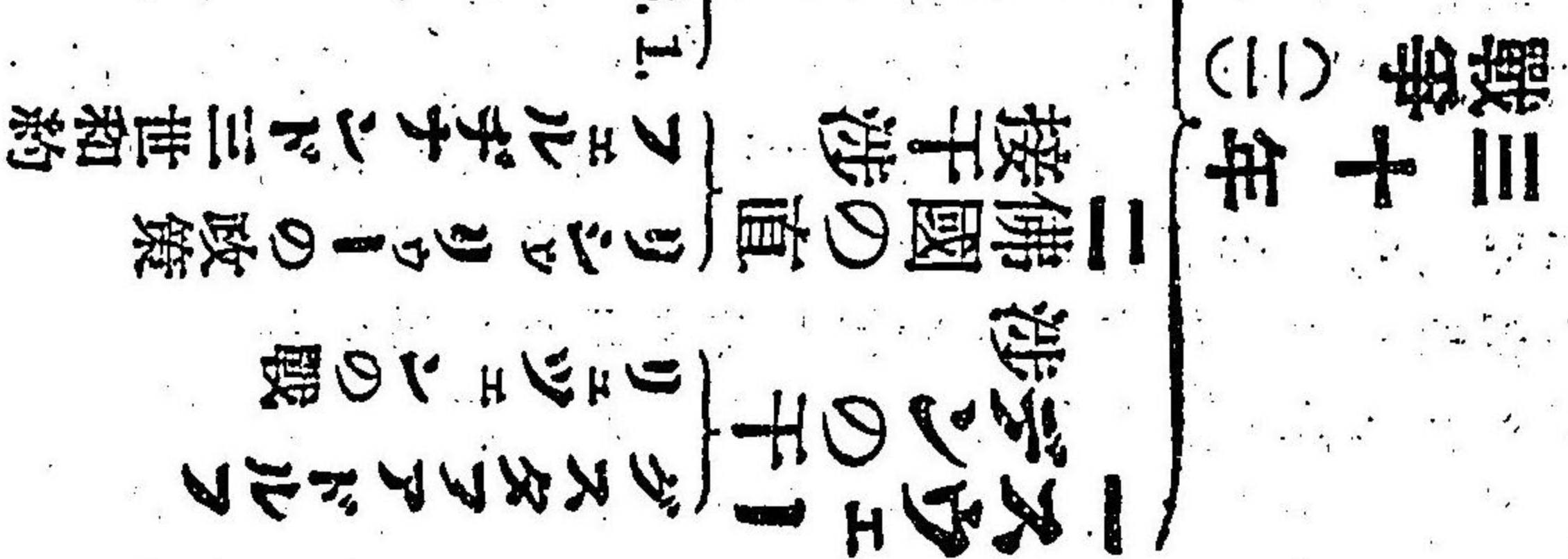
一 概説 ドイツに於ては一五五五年アウクスブルグ會議以來宗教上の紛争一度落着せしが一六一八年以來再び起りて諸國之に干渉し前後三十年に渉れる大亂となれり今其原因を述ぶれば左の如し。

二 原因 (一)アウクスブルグ會議の結果は諸侯には信教の自由を與へしも人民の權利は未だ不十分たるを免がれず其他此決議に不備の點多かりし爲め新舊兩教徒間に争を生ずるに至れる事、(二)獨帝の中に舊教徒を偏愛し新教徒に迫害を加へし者ありし爲也



右中フェルディナント一世、マクシミリアン二世は共に信教の自由を許ししも其後ルドルフ二世、マツチアス、フェルディナント二世等は甚新教徒を迫害せり

三 戦争 第一期(一六一八—一六二二)フェルディナント二世、マツチアスに次ぎてボヘミア王となるやボヘミア人之承認せず新教徒にして英國の女孀なるパルツ公フレデリックを迎立す、(二)戦争は舊教徒の勝利に歸しぬ、
第二期(一〇二五—一六二二)ゾルマク王クリスチアン四世は新教徒なり、英、蘭二國の援助により獨逸に侵入して新教徒を援く、官軍の勇將クレシスダイニ大にゾルマク軍を破りて和す。



一 スウェーデンの干渉
グスタフアドルフ
リヒツェンの戦

二 佛國の直接干渉
リヒツェンの政策
フェルディナント三世和約

三 和約要項
4. 3. 2. 1.

四 結 果
獨逸の表類

參考問題

- 一 グスタフアドルフとは何人ぞ (三十五年高等學校) リヒツェン戦争とは何ぞ (三十五年高等學校) 佛國干渉の目的如何
- 三 三十年戦争が獨逸に及ぼせる結果を述べよ
- 四 三十年戦争の顛末を畧述せよ (三十四年東京高商)
- 六 クレシスダインにつきて述べよ (三十四年東京高師)

三十年戦争 (二) (西洋史七八)

一 第三期(一六三〇—一六三五) スウェーデン王グスタフアドルフは熱心なる新教徒なり、獨逸新教徒の勢日に蹙まるを慨し之を救はんとし一はプロシアのグザ家を抑へてバルト海の主權を握らんとし一六三〇年精兵を以て獨逸に侵入し連に帝軍を破りしかばフェルザンブド再クレンスラインを起して帝軍の總督となす關雎一六三二年十一月大にリュツェンに戦ひグスタフは勝を得しも不平等戦死せり

二 第四期(一六三七—一六五七) スウェーデン人はグスタフ死後佛國と同盟して尙戦を繼續せり、蓋佛相リシウツァー獨逸の勢力を弱めて佛國の勢力を張らんとし從來スウェーデンを援助し來りしが今や更に直接兵を出して獨逸と戦ふに至れり、獨逸にては一六三七年フェルザンブド二世死し其子フェルザンブド三世嗣きしが佛國及スウェーデン兩國の合併に敵する能はざるを知り且國內の新舊兩派も漸く戦に倦みたればフランスの宰相マザレンの周旋に依りてウエストリアの和約を結ぶ(一六四八)

三 和約條項 (一)新舊兩教徒同一の權利を得ること、(二)佛國はスツツ、ツール、ベルダン、エルザス等の地を得ること、(三)スウェーデンはバルト海岸の地を得ること、(四)スウイス、和蘭二國の獨立を承認すること、

四 結果 戦争の結果獨逸の蒙れる損害は上の和約條項のみならず帝權衰へ諸侯皆も獨立の狀を呈し全統一を失ひ且道德敗壞し學藝廢し商工業も萎靡して振はず、國勢大に衰ふるに至れり。

フランスの勢夫ス

- 一 リシウツァー 内治、外交
- 二 マザレン
- 三 ルイス 十四世
 - (一)王の人物
 - (二)王の專制主義
 - (三)財政の整理
 - (四)活動

參考問題

- 一 リシウツァーの政策を問ふ
- 二 マザレンの事績を述べよ
- 三 ルイス十四世の人物を述べよ
- 四 コルベールの事績を問ふ
- 五 ルイス十四世の政治主義如何
- 六 五三四三ニルイス十四世時代の佛國の狀態を説明せよ (三十五年東京美術)

フランスの勢大

(一)

一 リンツァー、マザレン、(二)ヘンリー四世の死

後其子ルイス十三世即位す、大僧正リッパリを

舉げて宰相とす、彼は當時佛國第一流の政治家

なり、彼は内諸侯を抑へ新教徒を壓して王權の擴大

を計り外はドイツを挫きて佛國の威を歐洲に輝せ

り、かくて彼は一六四二年死し翌年十三世も又死

し、五才なるルイス十四世繼げリマザレン之を補く

二 マザレン又リッパリの政策を紹き内は王權の

擴大を圖り外は三十年戦争に上りて領土を廣め又イ

スパニアと戦うてネーデルラントの數市を割かしめ

(二六五九)更にイスパニア女王マリア、テレサとル

イス十四との婚を約し一六六一に死す、

二 ルイス十四世親政、(一)マザレンの死後王又宰相

を置かざ天下の政を自處決せり、王は學動高尚容貌

威嚴ありよく人を抑ふるに足る誠に當時歐洲第一流

の帝王と謂ふべきなり、(二)王は王族は國家也と

稱し王權神授論を唱へ、專制を主義とせり、(三)王

思へらく活動の源泉は富國にありと、即大理財家コ

ルベールを擧げて、財政を整理せしむ、コルベール

は冗官を汰し保護貿易主義により商工業を奨励し航

路を擴張し爲めに國大に富み、乃陸海軍を擴充す當

時佛國の海軍は英蘭二國のそれを合せたるよりも多

數なりき、かくの如く富國強兵の實を擧げて後王は

機を見て外國侵略の活劇を演じ始めぬ次に述べる。

ルイス十四世の活動

一 ネーデル

略

(イ)原因

(ロ)和蘭の干渉

(ハ)和議

(イ)原因

(ロ)諸國和蘭を助く

(ハ)和議

(イ)原因

(ロ)五國同盟

(三)和議

四 イスパニア王位繼承戦争

参考問題

一 ルイス十四世のネーデルラント侵略に對し何故に和蘭は干渉せしか。

二 アイヘンの和議とは如何

三 和蘭戦争の原因如何

四 ナイメーグンの和約を述べよ

五 フランス戦争の始末を述べよ

フランスの盛大 (二)

一、ルイス十四世の活動、

(一)ネーデルラント侵略、(イ)イスパニア王フィリ

ポ四死してカロロ二嗣ぐやルイス十四の後はフィリ

ポ四の女なるを以て相續權ありと主張しネーデルラ

ントを要求し其聽かれざるや直に兵を以てネーデルラ

ントに侵入す(一六六七)(ロ)然るに和蘭は佛國ネ

ーデルラントを領し自國と境を接するに至らんこと

を恐れ英國、スウェーデンと同盟してルイスに抗す、

(ハ)一六六八年終にアムステルダムに和し、ルイスは侵略

地の大部分を返還し只國境に十二の市を取れり、

(二)和蘭戦争 (イ)ルイス十四世はネーデルラント

侵略の際和蘭の干渉せしを憤り一六七二年十二萬の

大兵を以て和蘭を攻む (ロ)和蘭外交家を各國に派

しフランスの同盟を離間して却てオランダを助けし

む、こゝに於てルイスはドイツ、イギリス、イスパ

ニア、和蘭の連合軍と戦ひしが一六七八年ナイメー

ゲンに和す (ハ)即ルイスは和蘭の使地を還したれ

どもイスパニアよりフランスに攻め入りネーデルラ

ントの數市及ドイツよりフランスに侵入し、大

に領地を増す

(三)フランス戦争 (イ)一七八五年獨逸のフアンツ

選撃侯カロロ死し嗣なし、ルイスは己の弟の妻がフアンツ

の妹なるを理由とし弟の爲めフランスを要

求し聞かれざるに及び兵を出す、(ロ)歐洲諸國ルイス

スに反對し英國、和蘭、獨逸、西國、瑞國五國の連

合なるルイスの軍常に優勢なりしも多年交戦の結果

財政の缺乏を感じ終に和す(一六九七年)

フランス盛大 (三)

(三)

四 イスパニア王位相續戦争

(イ)原因 西王嗣子なし 佛王と獨帝との競争 國力平均問題

(ロ)戰況

(ハ)結果…ユトレヒト條約

五佛國の隆盛

參考問題

一 西國、佛國獨國の皇室の關係を述べよ、

二 イスパニア王位相續戦争の原因如何

三 フィリポ五世の即位するに至りし次第如何

四 ユトレヒト條約を述べよ

フランス盛大 (三) (西洋史八一)

四 イスバニア王位相續戦争

(1)原因 ルイス十四(佛王)

フランス
ルイス十四
フランス
フランス
フランス

フランス四

(西王) カロロ二世

マルガレトテサ

ヨセフ
カポロ

レオポルト(獨帝)

カロロ二世子なし、姪ヨセフを嗣とせしに早世す依

りてルイス十四世の孫フイリポを繼嗣となすべきを

遺言して一七〇〇年死せりよつてフイリポ西王とな

るや英國、和蘭、獨逸諸國は佛西の連合を以て國力

の平均を破る者とし獨帝レオポルトの子カポロを立

てて西王となさんとしルイス十四世と相戦へり。

(ロ)戦況 戦は初めは多く佛國の敗に歸せり蓋し獨

逸のコンデ公英のマルボロ一侯填のエウジエニオ公

子等の勇將ありしによる、然るに一七一一年獨逸の

ヨセフ一世死して弟カポロ六世即位するや同盟軍は

獨逸を助くる勇氣なく局面一變して一七一三年終に

(ハ)結果 ユトレヒトの和議を講ぜり

1.佛國西國の合併せざることを認む、

2.英國はジブラルタル及ミノルカ島をイスパニア

ハバリア、ニウアフリカ、ウエストインド、バスクチア、

3.ゾラント地方を佛國より受くること、

王は又土木を營みザルサイユ宮を始め數多の宮

殿を建て榮華を極め佛國最隆盛を現出せり。

五

英國革命 (其一)

一ゼームス二世

(西洋史八一)

第一革命

二カロロ二世

失政

王權神授論

議會解散

徵稅募債

嚴刑

蘇蘭と戦ふ

議會召集

兵を以て議會に臨む

革命の

内亂起る

クロンウェル

王の死刑

參考問題

一 ゼームス二世の系譜如何

二 革命の原因を述べよ

三 長期議會とは何ぞ

四 國會黨の行爲を評せよ

英國革命

(其一) 第一革命

一 ジェームス一世、一六〇三年エリザベタ女皇死して嗣なし、スコットランドのチャールズ一世と稱す、これスチャ

六世入て王となり、ジェームス一世と稱す、これスチャアト家の祖なり、王は風采野卑動作輕燥にして且鷹病の性なりき、然かも政治上にては王權神授論を主張し國會の協賛を経ずして税租なとり獻金を強ひ宗教上にては國教以外のものを嚴禁せり、

二 カロロ一世 (一) ジェームスは民心を失ひたれど猶事なきを得ず、其子カロロ次々に及び同じく

王權神授論を唱へ議會と衝突し之を解散すること二回、一六二九年以後國會を召集せざること十一年此

間擅に租税を徵收し、強て公債を募り、又高等法院を設け已に抗するものを捕へて廢君に處せり其專制極點に達し民心大に離畔せり

(二) 偶王イギリス國教をスコットランド人にも信仰せしめんとして、アレスビリア教徒怒りて兵を擧

げ英國に侵入す、王之を防禦せんとし軍費に窮し巴

むむを得ず一六四〇年議會を召集し其協賛を求めしに

議會は王之失敗を攻撃し其要求に應ぜざりければ直

に之を解散し同年再び議會を召集す是所謂長期議會

離して軍費の協賛を與へざりしを以て王憤り兵を以

て議院に臨み反對黨の首領を捕へんとしてなからず、

國會大に怒り兵を以て議院を守る王恐れて走り、

チャングラムに至り兵を集む内亂これより起る。

三 戰爭は始めは王黨勝れしがオリバークロムウェ

ル出づるに及び王軍終に破れ、王は蘇格蘭に走る蘇

格蘭人王を幽す。國會は四十萬磅に代へて王を得一

六四九年一月終に死刑に處す。

英國の革命 (其二)

一 英和政府の建設

二 アイランド、スコットランド

ト征服

三 外交

航海條令

イスパニアを破る

四 内治

クロムウェルの專制

人民の厭惡

五 末路

リチャードクロムウェルの辭職

一六五九年

第一革命 共和政時代

參考問題

一 アイランド、スコットランドは何故に反亂せし

か

二 航海條令とは何ぞ、(三十五年東京高商)

三 クロムウェルの内治外交如何

四 リチャードクロムウェルとは誰ぞ

五 共和政時代は幾年續きしか

六 クロムウェルの事績を問ふ (三十二年外語、郵便電信校)

英國革命 (其二) 共和時代

(其二) 共和時代

共和政時代

(一)王を死刑に處したる後數日王政を廢して共和政府の建設を布告す、

(二)アイルランド、スコットランド征服、カロロ死刑の報傳はるや、アイルランドの勤王黨は太子カロロを率じて共和政府に抗せり、クロンウェル即ち

四九年進撃して之を破り、カロロ、スコットラに遁るゝやスコットランド人歡迎して又共和政府に抗せり、クロンウェル又進て一六五〇年大に之を破

(三)外交 (イ)當時歐洲の海運業國としてはイスパニア、ポルトガル兩國は漸く衰へオランダ英國之に代り然して和蘭最も盛なり、クロンウェル其利益を

和蘭より奪はんとし、一六五一年航海條令(Navigation Act) (英國に輸入せらるゝ貨物は悉く英國船若くは其產物原産地の船ならざる可からず)を發して

和蘭を苦しむ和蘭怒りて戦しが敗して和す、(ロ)又クロンウェルは一六五五年佛國と同盟してイスパニアを破りジブチア力を奪取せり。

(四)内治、クロンウェルは軍人等の選舉により終身の保護總督となり、全權を一身に集めて專制を斷行せり故に名は共和政治と稱すれども實は古今例なき

專制政治なりき、倘彼は國民に對して頗る嚴峻を極めしむ以て漸く人民の壓惡を招き、一六五八年死し其子

(五)リチャードクロンウェル、職を襲きしが自其無能を悟り一六五九年辭職し、王政復古す。

英國革命 其三

其三

一 カロロ (イ)國民の囑望と同構 (ロ)失政 審査律 人身保護律

二 ホイグ黨とトリリ黨

一 ゼームス二世失政 舊教採用 王權神授論

名譽革命 二 ヴァルム・オランジ侯來る 三 權利表白狀

參考問題

一 テストアクト(審査律)とは何ぞ

二 人身保護律とは何ぞ

三 名譽革命とは何の意ぞ

四 ホイグ黨とトリリ黨

五 トリリを説明せよ

(三十八年東京高師)

英國革命 其三 (西洋史八四)

一 王政復古 (一)カロロ二世、リチャード其職を辭

するや先帝の王子カロロ二世迎へられて王となる、

(一)王は囑望と同情とを以て迎へられしが(ロ)性故

縦遊意にして私行修まらず且(ハ)失政多かりしを以

て人望を失へり

一六七三年には議會は審査律を決議し舊教徒が官吏

又は議員たるを得ざらしむ、これ王が舊教を復さん

とせしによる、又一六七九年には人身保護律を決議

し蓋に人民を捕ふるなきを要求せり

(二)王の時に當り議會はホイグ、トリリーの二黨に

分れ前者は進歩的にして後者は保守的なりき然れど

も共に國憲國教を重したり。

二 名譽革命 カロロ二世子なし弟ゼームス二世王と

なる、王は王權神授論を持し且舊教を奉じ舊教徒

を軍人に採用し大に人心を失へり、然れども王に男

子なきを以て國民敵と動せざりしが一六八八年に至

り一男子生るゝに至り國民遂に動搖し、(二)ゼーム

スの長女マリアを娶れるオランシエ侯ヴァイルムを

オランダより招く二世大に驚き舊教徒官吏を免じ國

民と生死を共にせんと誓ひしも事既に遲し一六八八

年ヴァイルム終にロンドン入る、ゼームス二世佛國

に走る、ヴァイルム、ムアリ共に王位に即ぐ之を名譽

革命と云ふ、

(三)一六八九年ヴァイルムは議會の議決せる權利表

白狀を認む (イ)國會の協贊なくして置税せざるこ

と。(ロ)言論の自由 (ハ)臣民に請願の權あること。

一 建 國 (一)ルリク 八六三年 (二)ルリクの子孫

二 欽察汗下の露國

三 獨 立 (一)モスクバ大公 獨立の年

(二)イパ 東ロリアの女と 三 婚す 雙頭鷹章

四 東方侵 (一)イパニ四世 略の緒 (二)エルマク

五 ロマノフ王家

ロシア勃 興 其二

參考問題

一 ロシアの建國年代及建國者の姓名人種如何

蒙古人に支配されしこと約幾年か

三 露西亞を獨立せしめたるは誰ぞ

四 シベリア侵略の緒を開きしは何時頃なるか

五 エルマクとは誰ぞ

六 ロマノフ王家とは何ぞ

ロシアの勃興 其一

ロシアの建國 (一)スウェーデンに住せしノルマ

ン人の一族ルスの酋長にルリクなるものありスラ

グ族の内亂に乗じて之を征服して居をノゴロド附近

に定むこれロシア建國の基なり時に八六二年、

(二)其子孫南下しキエフ地方を取り、東ローマ帝國

の文化を輸入して開明の曙光を認むるに至りしが十

一世紀に及び國亂れ諸侯相割據するに至れり、

二 欽察汗下の露國 (一)かくの如く統一なき時に當

り蒙古人の侵襲を蒙り一二四〇年にはキエフ陥り以

來一四八〇年まで約二四〇年間欽察汗國の下に屈し

て毎年サライに朝貢せり。

三 獨立 (一)モスクバ大公國 (二)モスクバ公はルリ

クの後なり、十三世紀モスクバ地方の領主となり十

四世紀ボミトリ、ドンスコイに至り漸く強しなり十

イバ三世(一四六一—一五〇五)自らモスクバ大公(一三

と稱しカザン、ノゴロトを略し一四八〇年終に欽

察汗國を破りて獨立しツァーリと稱す、東ローマ帝

國の女ウラシアを娶り且ローマの雙頭鷲を用ひて徽

章としローマ帝國の繼承者を以て自任せり、

四 東方侵略の端緒其孫イバ三世(一五三三—一五

八四)に至りアストラハンを略し又シベリア侵略の

端緒を開けり、蓋シベリアの侵略の緒は一五八三年

(天正十一年)コザツクの一酋長エルマクがシベリア

國を亡ぼしトボルク地方を取りてイバ三世に獻

したるに始まる、

五 ロマノフ家、イバ三世死後國亂れ

遠裔ミカエルのロマノフが出て國を平定して王とな

る之れをロマノフ家の祖となす、後二世を経てペテ

ロに至る。

ペテロ大帝

一 其即位

(一)内外の状況

二 當時の露國

(一)ペテロの三策

四 西歐巡遊

造船術研究

百艘文明の視察

内亂の報

(一)近衛兵解散

(二)風俗改良

(三)其他の改革

參考問題

一 ツァーリとは誰ぞ

二 ペテロ大帝當時露國內外の状況如何

三 西歐巡遊の目的及其結果

ロシアの勃興 其二 ペテロ大帝

一 ペテロの即位 ペテロは一六八二年異母兄イバン五世と共に帝位に登る時に年十一才なり、異母姉ゾフィア政を攝す、一六八九年姉ゾフィア陰謀を企てしを以て攝政を解き之を寺院に幽し政を親らす、當時の露國 (一)の狀態を見るに内國民は未西歐諸國の文化に浴せず且玉權強大ならして僧侶兵士等跋扈せり外トルコに限られ西スウエーデン、ポリアンドに壓迫せられて一も海に出づるの道なく國勢尙甚微弱なりき、(二)よりては即位後三策を立て著々之を實行しぬ即第一四歐の文化を輸入すること第二玉權を擴大すること、第三黑海及バルト海方面に三要港を占領すること

三 アゾフ海を取る、十七世紀末よりトルコ漸く衰ふ乃ペテロ一六九六年トルコを破りアゾフを取る、

四 西歐巡遊 整二六九七年親しく西歐の文明を視察せんとし、其師レオナルトを正使とし自ら微服して其行に加り、リガ、クニグスベルヒ、ベルリン等を經過てオランダのザム造船所に入り、一職工となりに渡り職工技士を庸聘し機械を求め歸途オーストリアに入りウイーンを経たイタリヤに到らんとするや遇へ本國より近衛兵亂するよしの報に接し急行歸國すれば内亂は既に鎮定し居たり、

五 改革 ペテロは歸後諸種の改革を施して西歐の文明を輸入せり(一)近衛兵を解散して新式兵を置きし(二)衣服を西歐風のものに改め又髻を剃らし(三)其他郵便、貨幣、道路等各種の改革を行ひたり。

一原 因 (一)ペテロの野心 (二)スウエーデン之王効なり 同盟

二戰 争 (一)カロロ十二世 (二)ヂンマルクを降す (三)ナルバの戰 (四)ホーランドを降す (五)ペテロの事業 (六)ホルタワの敗

三結 果 (一)スウエーデンの和 (二)露國列強の班に入る

北歐戰爭

一 北方戰爭の原因如何
 二 カロロ十二世の用兵如何
 三 ホルタワとは何地ぞ
 四 カロロ十二世の最後如何
 五 カロロ十二世のホーランド征伐中のペテロの行動如何
 六 露國歐洲列國の班に入りしは何世記にして又何人の時なるか (三十六年機關校)

參考問題

ロシアの勃興

北歐戦争

一 原因 (一)ペテロ内治漸く緒に就けり進んでバルト海の主權を握らんとす、バルト海はスウェーデンの領域なり (二)以りて、ペテロはスウェーデン王の幼少なるに乗じデンマルク王フレデリキ四世及ホランド王アウグスト二世と同盟してスウェーデンを分割せんとして一七〇〇年スウェーデンに向て戦を宣せり、

二 戦争 (一)時にスウェーデン王カロロ十二世は十八才の青年王なりしが剛勇膽略ありよく兵を用ふ、(二)三國の同盟をきき其兵を合せざるに先だち一七〇〇年五月突然海を渡りてデンマルクを攻めて降し(三)同年十一月僅に兵八千を以てペテロをナルバに撃ちて大に之を破り、(四)更に進てポリアンツドを攻め連戦連勝終にポリアンツト王を降しぬ、(五)カロロがポリアンツドを征する約八年の間にペテロは内軍制を改良し進てバルト海沿岸地方を奪ひ一七〇三年にはネバ河口にペテロブルグ府を建設せり、既にして一七〇八年カロロ再露國に侵入し先づ南露を平けて北露に及ばんとし南して大に露軍とポルタワに戦ひ(一七〇九)にて大敗し身を以てトルコ走る (六)カプロ、トルコに留まること五年後國に歸り内亂鎮定の際戦死す時に一七一八年なり、

三 結果 (一)スウェーデンはバルト海沿岸を露に與へて一七二一年ニスタットに和す、(二)戦後スウェーデンは振はず、露國に於ては都をペテロブルグに強國の列に入れり、改革し國勢益々振ひ一躍して歐洲に移し諸般の政治を

ポリアンツド分割

- 一 ポリアンツドの衰運の原因
- (一) 選舉王國
 - (二) 貴族跋扈上下不一致
 - (三) 新舊兩教徒の争
 - (四) 嗣王選定の争
 - (五) カタリナの野心
- 二 第一回分
- (ハ) 露普奧三國の干渉分
- 三 第二回分
- (イ) ポリアンツド人の改革
- 三 第三回分
- (ロ) 露の干渉、分割
 - (イ) コシウシコの擧兵
 - (ロ) 三國の干渉と分割

参考問題

- 一 ポリアンツド衰頹の原因如何
- 二 ポリアンツド第一回の分割年代如何
- 三 ポリアンツド分割をなしたる外國君主如何
- 四 コシウシコの事績を問ふ (四十士官校)
- 五 ポリアンツドの滅亡を説明せよ (三十三年二高)
- 六 ポリアンツドの分割を説明せよ (三十五年兵學校)
- 七 (三十七年商船校)

ポロニア分割 (西洋史八八)

一 ポロニアの衰運の因 (イ)ポロニアは中世末に

於ては勢頗る振ひたる國なりき (ロ)然るに一五七

二年選舉王國となり王權微弱を極め反對に(ハ)貴族

跋扈し私利を營むに及び上下の軋轢甚しく (ニ)加

ふるに新舊兩教徒の争を以せしかば國勢次第に衰へ

終に分割滅亡の悲運を招くに至れり、

二 第一分割 (イ)一七三六年ポロニア王ヤザグス

ト二世死し嗣王選定に關する争あり (ロ)時に露西

亞に女皇カタリナ二世あり、有爲悍雄丈夫に優れり

ポロニアの衰運に乗じて之に干渉し今や嗣王の争

あるに乗じ其寵臣ポニアトフスキイをして至たらし

め以てポロニアを屬邦視す、ポロニアの志士大

に憤慨しトルコの援を得て兵を擧ぐ女帝大兵を發し

てポロニアを壓するや (ハ)プロシア、オースト

リアは露國に交渉し終に三國同盟し一七七二年第一

回の分割を行ひたり

三 第三回分割 (イ)ポロニア人は第一回の悲運を

慨し國勢回服の手段として憲法を改め王位を世襲と

し一刷新を行ひしに (ロ)カタリナはポロニアを起

さしめ次て兵を送り、更にプロシアと合して第二回

分割を行へり時に一七九三年なり。

四 第三回分割 ポロニアの志士コシウ・シゴ一七

九四年恢復の義軍を起したれども内は貴族平民と和

せず外は露、普、奧三國の同盟軍の攻撃に堪えず軍

敗れ三國の爲めに第三回の分割を受けて終に亡びぬ

時に一七九五年とす。

プロシア勃興 其一

一 概説

ニ グラントヴィンブルグ侯

三 プロシア公

四 プロシア王國の創立

五 フレデリキ・ウイラム

プロシア

参考問題

一 プロシア公の起原如何

二 プロシア王國創立の由來を述べよ

三 プロシア王國創立年代如何

四 フレデリキ・ウイラム二世の事業を述べよ

プロシアの勃興 其一

一 概説 プロシア王國は獨逸のブランデンブルグ侯が一七〇一年プロシア王號を稱するに始まり、依りて今ブランデンブルグ侯とプロシア公の起原につき述ぶる處あるべし

二 ブランデンブルク侯 は十世紀の頃獨帝が東邊スラヴを防がん爲めに置ける諸侯にして後漸く強大となり、一三五六年には七選定侯の一となり、一四一五年にはホーエンツォルン家イリフデリッキ出てハ相繼するに及び益強大なり、一六一一年プロシア公の領地をも合せたり。

三 プロシア公 プロシアとは北獨逸バルト沿岸の地名なり十三世紀の頃獨逸の騎士、蠻族を逐ひて此地を占領せしも十五世紀ホーランド王に屬す、十六世紀に至りホーエンツォルン家のアルベルト出てポランド王の許可を出てプロシア公と稱す一六一八年其正統絶ゆるに及びブランデンブルグ侯之を合す

四 プロシア王國創立 ブランデンブルグ侯フレデリック三世に至りイスマニア王位相繼戦にドイツ皇帝を助け其功によりプロシア王號を稱するを許可されり。プロシア王フレデリック一世と改む時に一七〇一年なり。

五 フレデリック、カールレム一世はフレデリック一世の子なり、勤儉を重んじ勇武を尙び教育を強行し農工商を獎勵し國本を培養せしかば國富み兵強し他日其子フレデリック大王が動地の偉業をなすの基を置き

プロシアの勃興 其二 フレデリック大王

一 大王の青年時代

(一)原因 (イ)ブラダマチャカ
ンクシヨン
(ロ)各國の要求

(イ)大王シレジア占領
(ロ)バワリア王の侵入

(ハ)テレサの計
(ニ)大王再度の侵入
(イ)バワリアと奧國の和
(ロ)普奧の和
(三)奧佛の和

二 オーストリア相續戦

參考問題

- 一 フレデリック大王の青年時代を述べよ
- 二 フレデリック大王の青年時代を述べよ
- 三 フレデリック大王は如何なる土地に向て活動せしか
- 四 奧國相續戦の原因を述べよ
- 五 フレデリック大王の治績を述べよ
- 六 フレデリック二世の事績を述べよ

(三十二年東京高商)

(三十三年郵電校)

プロシヤ勃興 其二 フレデリキ大王

一 フレデリキ大王(二世)の青年時代、王はフレデリキ・カイルム一世の子なり、一七二二年に生る父王は大王を財政家兼將軍たる機に教育せんとせしも大王は文學美術を好み殊に音樂を愛し父王の志に忝はざりければ父王之を惡み大王を兵營に置き其處置頗る嚴峻を極む、大王堪々難く脱れて英國に走らんとして捕へらる父王怒りて大王を殺さんとせしが大王の侍臣自殺して罪を償ひ漸く赦さる、これより大王大に悟る處あり、日夜政事軍事を勉勵し大に身神を練る、一七四〇年父王の死後位に即く、

二 大王の活動 オーストリア王位相繼戰爭、(一)原因(イ)ドイツは古來男系相續法により女子の相續を認めず然るプロイツ帝カロロ六世男子なしより死後女オリアア・テレサをして全領を相續せしめんとしゾラゾアチツクサンクシヨ(相續令)を出し諸國の承認を得一七四〇年死す、(ロ)オリアアテレサ相續するや各國異議を唱へ諸要求を提出す、即パヴリア王カロロは獨帝を、フレデリキ大王はシレシヤを、ゾラゾア・ギルギイをイスパニアはオーストリア北部を各要求し來り茲に一大爭亂を起せり、(イ)一七四一年大王は進てシレシヤを占領し、(ロ)パヴリア佛國は合してオーストリアに侵入し、(ハ)オリアアテレサ一度大王と和しホングア世と稱す、(ハ)オリアアテレサ一たびパヴリアを破る、(ニ)大王オリアアと和し次で同年、普、奧又プロシヤを侵す(三)結果 一七四五年カロロ七世歿しパヴリア奥國を普に與へ其代りにテレサの夫獨帝となる、一七四八年奥佛和し戰亂漸く收まれり、

一 **オリアア**
 (一)テレサの憤慨
 (二)奥國の準備
 (三)對普同盟

二 **企復讐の**
 (一)大王の敏活
 (二)大王の活躍諸國を破る
 (三)大王の精兵減少
 (四)局面一 露帝の死 英佛の和

三 **戰況**
 (一)大王の精兵減少
 (二)大王の活躍諸國を破る
 (三)大王の敏活
 (四)局面一 露帝の死 英佛の和

四 **二終局**
 (一)プロシヤの和
 (二)戰後の普國

參考問題

- 一 七年戰爭の原因を述べよ
- 二 奥國普國に對する準備を述べよ
- 三 フレデリキ大王の戰爭振り如何
- 四 クホルストルフの戰とは何ぞ
- 五 七年戰爭の結局を述べよ
- 六 七年戰爭の概略を述べよ (三十二年東京高師)
- 七 オリアアテレサの事績を述べよ (三十四年同)

七年戦争

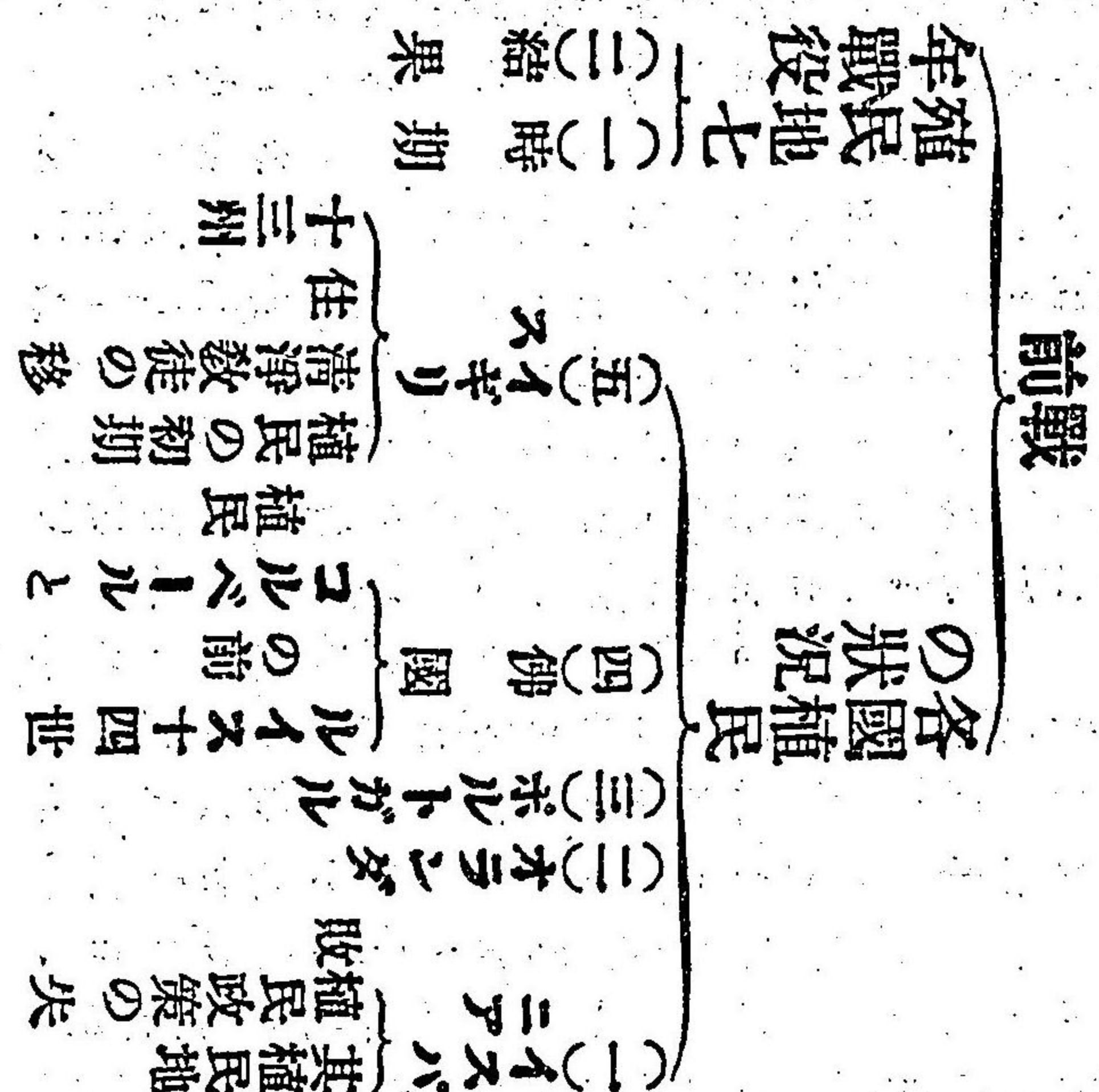
(西洋史九一)

一、マリヤテレサ復讐の企、(一)マリヤテレサは温雅にして婦人の美德を備ふれど又氣象剛毅にして丈夫に譲らず、常にシレシアをプロシヤをプロシヤに奪はれたるを憤り夙夜報復の策を考慮しき、(二)即曾て自國の敗れたる所以普國の強き理由を考へて行政を整理し財政を整へ陸軍を充實し (三)更に進んで當時普國の強大に對して快とせざる露國女帝エリザベタ及びサクソニア王等を誑らひて對普國同盟を作り又恰も英佛兩國が一七五五年米國に衝突し英國はプロシヤと同盟せしを以てテレサは佛國を誘ひて對普國同盟に加らしめ、更にポランド、スウェーデンを加へ此同盟を以て一舉普國を粉碎せんとす、

二、戰況 (一)プロシヤの機敏なる同盟諸國の兵を合せざるに先ちて之を破らんと欲し一七五六年サクソニアを討ちて首府ドレスデンを占領す、こゝに七年戦争又第三シレジア戦争開始す、(二)次て翌年佛をロスバハに破り埃軍をロイテンに破り更に翌年露軍をツォルンに撃破し大に歐洲諸國をして大露王の軍事的才能に感ぜしめしが(三)多年の戰に軍費漸く乏しく精兵又大に減じたり加之(四)露國は露國の連合軍とクネホルストルフに激戦して大敗し身を絶つて逃る然かも其翌年には英國より軍費の供給も絶るたれば大王益窮境に陥れり(四)然るに一七六二年年露帝死しペテロ三世嗣ぐや同盟を脱して反て大王を助けたり一七六三年には英佛和なり佛又同盟を脱して兵を撤するに及び大勢一變し埃國又已む得ずプロシヤに普國と結局 埃國又已む得ずプロシヤに普國と和し、(一七六三)シレシアの領有を認めたり、此戰にて普國は大に荒廢せしが大王銳意恢復を圖りしを以て國勢復隆興し埃國と覇權を相争ふに至れり。

北米獨立

(西洋史九二)



爭獨立前戰

- 一 イスパニアの植民地の振はざりし理由如何
 - 二 和蘭人の植民地を問ふ
 - 三 英人の移住者は多く如何なる人々なりしか
 - 四 獨立戰爭前に於ける植民の狀況を略述せよ
 - 五 英佛の植民地七年戰役(オールドフレンチ戰爭)を述べよ
- 參考問題

北米獨立 一 (西洋史九三)

一 獨立戰爭前に於ける各國植民の状況

(一)一四九二年コロンブスの發見以來各國競ふて植民せり其主なるものをイスパニア、ポルトガル、フランス、イギリス等とす、

(二)イスパニアは北米のメキシコ、中央アメリカ

四印度諸島中の二三と南米の大部とを有せし、植民

策宣敷を得ず只本國を利せんことのみ企てしを以て

十分なる成功を見ること能はざりき

(三)オランダ人は一六一八年ニウアムステルダ

ム植民地を開きしも成功せず後英人に奪はる、

(四)ポルトガル人は南米ブラジルを有せり、

(五)佛人はルイス十四世以前漁業貿易の爲めカナ

ダ地方に來住せしが十四世の時コルベール出で、大

に植民を奨勵しカナダ、ルイジアナ、ミシシッピ地

方を占領せり、

(六)イギリス人は十六世紀末ユリザベア時代に初

めてバビジニアを占領し後本國清淨教徒來りてマサ

チューセツ、ニウハンプシャー、ニウジージー

デラウェア、コンネチカト、マリランド等を占

め熱心開拓に従へり一六六四には蘭人ユリニウピア

ムステルダムを奪ひ後南北カリナ、ペンシルバニア

ア、ジョルジアを開き十八世紀の半に於て東岸に十

三州二百萬の人口を有せり、

二 英佛の争 兩國の植民地は土地相接し且人種宗敎

を異にすれば本國の争に伴ひて屢相争へり殊に一七

五六年歐洲に七年戦争起るや植民地に於ても同じく

七年戦争をなし終に英國の勝利に歸し一七六三年和

約の結果英國はカナダ、ミシシッピ以東の地を佛國

よりアロリアガをイスパニアより割占し勢大に振ふる

獨立

原因

一 本國の專賣主義

(一)政府財政の窮乏

(二)印紙條令

(三)輸入税賦課

(四)植民地人反對の本據

(五)ボストン事件

(六)第一回大陸會議

二 課税

問題

獨立

原因

一 本國の專賣主義

(一)政府財政の窮乏

(二)印紙條令

(三)輸入税賦課

(四)植民地人反對の本據

(五)ボストン事件

(六)第一回大陸會議

二 課税

問題

參考問題

一 スタンブリアクトとは何ぞ
植民人は何故少許の茶税を課せらるゝ專まで拒み

二 しかボストン事件とは何ぞ

三 第一回大陸會議と (First Continental Congress) は何ぞ

四 獨立戰爭の原因を説明せよ (三十三年) 高師

五 合衆國獨立宣言の年代を問ふ

六 合衆國獨立の顛末を述べよ (三十六年) 商船校

北米合衆國の獨立 (西洋史九三) 原因 二

獨立の原因

(一)本國の專賣主義 植民地人は皆宗教、政治上の自由を得んとして移住せる人々なれば皆自由の精神に富みたり、然に本國政府は植民地をして本國の外一切他國と通商するを禁じ以て自國を富ますことを計れるを以て植民地人大に不平を唱へたり、

(二)課税問題 英國民は租税に關しては彼等の承諾を與へざるものに對して出税を拒みしは其憲法の證する處なり、植民地人も又英人なれば安ぞ濫税を忍

べんや時に本國政府は七年戰爭の結果十四億萬圓の國債を償ひ財政窮乏せる結果植民地に課税するに決

し、一七六五年(1765)印紙條令を發して新聞雜誌より商業上の取引土地賣買結婚契約等に至るま

で總て不廉の印紙を貼用すべきことを命せり、植民地人は代議士を出さざるに課税するは不當なりとし

フランクリンをやりて本國政府に抗議せしかば翌年此法は撤去せられたり、然るに更に其翌年又茶、紙、

硝子等に課税せしかば植民地人再抗議して撤去を望むや一七七〇年茶以外の諸税を廢せり、然れども植

民地人は代議士を送らざるが故に出税せずと稱して反對益甚し、一七七三年十二月ボストンの青年五

十餘人夜に乗じて同港に淀泊せる英船に至り積載せしる茶を悉く海中に投入せり、英政府怒りてボストン

港を封鎖し船舶の出入を禁せり、故に於て翌一七七四年ジョージア以外十二州の代表者フイラデルフ

アに會し植民地の自治權を得るまでには本國との通商を中止することを決議せり、所謂第一回大陸會議也

北米合衆國獨立 (西洋史九四) 三

一 戰爭の 發端 (一)コンコルドの衝突 (二)第二回大陸會議

二 獨立宣言 (一)歐洲志士の來援 (二)佛國の同盟と來援

三 歐洲諸國の同情 (一)歐洲志士の來援 (二)佛國の同盟と來援 (三)オランダ、イスパニアの同盟

四 米軍優勢 (一)初期の敗軍 (二)サラボカの大勝 (三)ヨイクタウソンの大勝

六 獨立承認

七 憲法制定

戰爭及結果

參考問題

- 一 合衆國獨立宣言の年代を問ふ
- 二 佛國が合衆國と同盟を締結せし所以を述べよ

北米合衆國の獨立 三 戰爭

一 戰爭の發端 (一)一七七五年英將ダッジ兵八百を

率ゐて植民地人の建てたるマサチューセッツ州コン

コルドの武器庫を破らんとし終に市民と衝突し互に

死傷者を出せり、(二)よりて植民地人は同年五月第

二回大陸會議をフィラデルフィアに開き戰を決しワ

シントン推して總督とせり

二 獨立宣言 一七七六年七月四日獨立宣言書を天下

に公にし翌年同盟條命を發し十三州合して合衆國

(United States of America) と稱せり

三 獨立と歐洲諸國 (一)合衆國の獨立を宣言せるや大

に歐洲人士の同情を惹けり殊にフランスの起き

て援を佛國に乞ふや同國年少貴族ラファイエット先

づ起ちて米軍に投せり其他グロリアのアストイ、ボン

ラントのコミンゴ等も又來り援けたり、(二)次

て一七七八年佛國は前敗の屈辱を雪ぎ且米國に於け

る英の商利を奪はんと欲し米國と同盟せりイバニ

ア、オランダ又之に加盟せり、

四 合衆國軍の優勢 戰爭の始めに當りては米軍は調

練なく軍資乏しく屢英軍の破る處となりしがサト

ガ(一七七七)の戰後形勢一變し加ふるに佛國同盟來

り援くるに及んで益々強勢となり一七八一年英將コ

ル独立承認 一七八三年佛國の獨立を

承認するや英國又おもむを得ず一七八三年佛國の

サ独立承認 一七八三年佛國の獨立を

六 憲法制定 かくて合衆國は一七八七年聯邦議會を

フィラデルフィアに開き新憲法を制定し政體を共和

となし、中央政府は立法、行政司法の三部を置き行

大政の長官を大統領とせり。統領と稱しワ

シントンを推して第一の

統領とせり。

近古の文化 其一

- (一)コペルニクス
- (二)ガリレオ
- (三)ケプラー
- (四)ニュートン
- (五)ライプニッツ

天文學

- (一)ハイベー
- (二)リッホ
- (三)トリセリ
- (四)ホイヘン
- (五)ジュゼッパ

物理學

科

學

其

他

參考問題

- 一 近古の三大天文學者は誰を
- 二 望遠鏡の發明者を問ふ
- 三 種痘法の發明者を問ふ
- 四 ニュートンの發見及發明如何
- 五 十八世紀に於ける科學の發達を述べ

近古の文化

共一

科學

一 文化の進歩 中世末文藝復興や發明發見等の影響によりして科學哲學文學等大に進歩したり。

二 科學 (一)コペルニクス(一四七三—一五四五)は

獨逸の天文學者なり、一五三〇年一書を著し從來の

地球中心説を破りて太陽中心説及地動説を唱導せり

(二)ガリレオ (一五六四—一六四二)はイタリアの

天文學者なり望遠鏡を發明し之を用ひて木星の月と

土星の環等を發見せり、

(三)ケプラー(一五七一—一六三〇)は獨逸の天文

家なり遊星の軌道及遊星運行に関する法則を説け

り、上の三大學者によりて太陽系に関する智識大に

明瞭となれる時に當りて

(四)ニュートン(一六四二—一七二七)出て、引力の

理法を發見天文上に偉功を著せり、其他彼は微積分

法を發明し數學上に貢獻せり、

(五)ラプラス(一七四九—一八二七)は佛人なり、

イッツのカントと共に星雲説を以て名高し、

(六)フランクリン(一七〇六—一七九〇)合衆國獨立

の際大功を建てたる彼は科學に於ても雷電の電氣獨立

用なることを發見し又避雷針を發明して大功あり

(七)ラボアジエール(一七四三—一七九四)は佛人な

り近世化學の祖と稱せらる、

(八)其他、英人ハイベル(一五七八—一六五七)は血

液の循環することを發見し、スウェーデン人リッネ

オラソン(一六〇八—一六四七)は晴雨計を發明し文

時計を發明したり、ジェンナ(一六九五)は振子

はイギリス人なり種痘法を發明せり、

近古の文化

共二

哲

歴

經

近世文化

(三)

學

史

律

(一) (二)ベッコ
(三)デカルト

ピコ
キホ

グロチウス

アダムス・スミス

參考問題

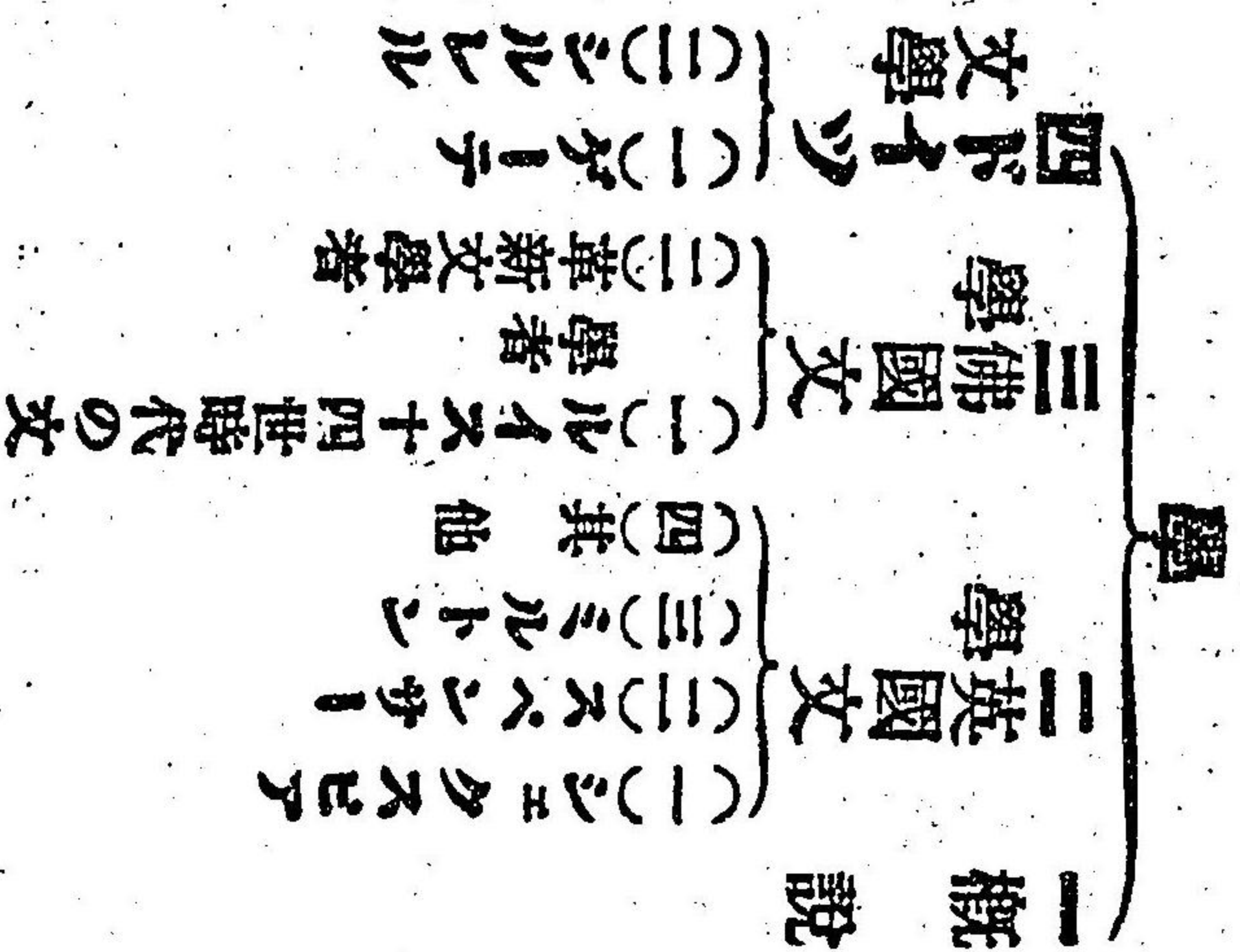
- 一 ベッコの唱導せし主要點を述べよ
- 二 デカルトとベッコ
- 三 經濟學の最初の研究者は誰ぞ

近古の文化 其二 (西洋史九六)

一 哲學 中世に發達せし煩瑣理學漸く衰へ近世に至りて二派の哲學を生ぜり、一は經驗派又英國派と稱しベニコ之を首唱し、ホッブズ、ロックス等繼承し他は推理派又大陸派にしてデカルト之を唱導しスピノザ、ライブニッツ等之に屬せり兩派相争ひて下らざりき、
 (二)ベニコ(一五六一—一六二六)は英國の人名なり、エリザベタ朝よりジェームス二世の朝に事へて貴族となりしが後罪を得て專ら哲學の研究に従ふ彼は早くより演譯法の不備なるを發見し新に歸納的研究法を主張し世上一切の眞理は經驗にて得らるゝ事を説けり著書には學問の進歩、新機關等有名なり。
 (三)デカルト(一五九五一—一六五〇)は佛國の大哲學者なり、彼曰く、世間一切のものは皆疑はしきもののみ、然れども我は思ふが故に我の存在は疑はんと欲して疑ふ可からざるものなりと、彼は又我を作る辦あることを認識せり、かくて彼は神と我の存在を基礎とし百般の哲學問題を解決せんとせり、
 一 歴史 に於てはイタリア人ビコ(一六六八—一七四四)は歴史及神話に科學的研究をなし、英人ギボツはロイヤ表亡史を著して有名なり、
 三 法律經濟 に於てはオランダ人グロチウスは國際公法に關する著書を公にし、英人アダムス・スミスは「國民の富」と題する書を著し富、勢力、資本等の事を論ぜり經濟學の開祖と稱せらる、

(西洋史九七)

近古文化 其三



文

參考問題

- 一 シェクスピアの主なる著作を問ふ
- 二 革新文學者の主なる人々を擧げよ
- 三 ミルトンにつき知る所を述べよ
- 四 近古時代歐洲の主なる文學者を擧げよ

一 概説 中古末各國々語成立し各國に國文を以て記

されたる文學數多輩出せり、殊に英國にはエリザベ

多朝の盛時あり佛國に革新文學の起るあり獨逸又隆

二期 英國文學 (一)シエクスピア(一五六四—一六

一六)は商家の子弟なり、高き教育を受けたるにお

らず青年にしてロンドンに出て俳優となり後戯曲

に筆を取りしが彼の創作的天才は人心の機微に觸

れ、人情の妙を穿ち、韻藻又流麗なり眞に世界文壇

の巨擘と稱すべきなり、其著書主なるものはハムレ

ット、マクベス、キングリア、オセロ等なり、尙

外にスベンサー、ミルトンの二大家あり前者の作に

「仙女王」あり後者はクロソウエルの書記をしたる政

治家にて又大詩人なり其失樂園(Paradise Lost)最名

あり此外ベリコン、パンヤン、ゴルトスミス等あり

三期 佛國文學 (一)ルイス十四世時代にはゴルヌリュ

(悲劇作家)ラシニア(全上)モリエール(喜劇作家)等

の大家輩出し次て(一)十八世紀に至りて革新文學起

れり、ボルテールは輕妙の筆を以て當時の國家、社

會、寺院等を諷刺し、モンテスキューは其著万法精

理に於て立法、司法、行政の分立を唱へ又英國の憲

法政治を賞讃せり、ルソフは其の社會契約に於て

に大なる自由民權を主張せり、彼の説は後年佛國大革命

四 ツの人文世界的詩人の評あり著書中アエラト最名あ

り、シラレル(一七五九—一八〇五)サエラト最名あ

は主觀詩人なり、其著、オルレアニ少女、テル、カ

レシタイン等名あり、

フランス革命

一 王家の專制 (ルイス十四、五世の專政)

二 貴族僧の跋扈 (特權 人民抑壓)

三 下層人の不平 (壓制 賦税)

四 革新文學の影響

五 合衆國獨立の影響

參考問題

一 革命前に於ける佛國人民の状況

二 ルイス十六世の人物如何

三 革命の原因を述べよ (三十五年東京高師)

(四十年長崎高商)

近世史 フランス革命時代 其一

フランス革命

原因 (一)ブルボン王家の専政、佛國にては十五、十六世紀に至りて王權最も發達しルイヌ十四世に至りて其極度に達せり、王は政權神授論者にして専制主義を持し縦に重税を課し横に人民を禁固し疾く民權を蹂躙せり、ルイヌ十五世又専制にして失政多く自ら曰く「我死後に洪水あらん」と然り人民は甚しく王室を恐むに至れり、

(一)貴族僧侶の跋扈 當時佛國に於ては平民二千五百萬人に對し貴族僧侶の數僅に三十萬人なるに拘らず全國田畑の三分二を領し、然も租税を免せられ又其領内の人民に對し司法警察の權を有し富と權力とを私し徒に安逸に耽けるのみ、

(二)下層人民の不平 願み下層の人民を見るに彼等は重税と壓制とに苦しみ平時に雖も尙溫袍の味を知らず屈辱の悲に泣き深く王室及貴族を怨み、

(四)革新思想の影響、ボルテール、ルイヌ等の革新的文學は當時の佛國民の意向に投し最も愛讀せられたり然れども極端なる君權打破の説や自由平等の説や、民主主義の説は甚しく上下の別を紊し國王の威嚴を損せしめたること大なりき、

(五)合衆國獨立の影響 内部の状況上の如き時に當りて民主主義の鑑は合衆國の獨立によりて示されたなり、佛人羨望の念禁する能はざりしなり、

(六)ルイヌ十六世の優柔 王は道徳上賢むべき人に見えざりしが果斷に乏しく失政を重ねて人民の怨みを招き遂に無前の大革命を起すに至れり、

フランス革命 其二 國民議會時代

一 三民議 (一)財政整理の困難 (二)議會召集 (三)平民の分離

二 革命の 發端 (一)議會解散風説 (二)バスチーユ襲撃

三 ブルサ 襲撃 (一)議會解散説 (二)暴民襲撃 (三)國王及妃幽閉

四 國王の 逃走 (一)内政改革實行 (二)逃走の理由 (三)國王幽閉 (四)立憲王政なる

國民議會時代

參考問題

- 一 三民會議を召集するに至りし次第を述べよ
- 二 國王の逃走せし理由を述べよ
- 三 パリ暴民の状況如何
- 四 左の年代に對し事實 (三十二年一高)
 - a 一六八八
 - b 一六八八
 - c 一七〇〇
 - d 一七八九
- 五 ルイヌ一世に對して述べよ (三十五年郵電校)

フランス革命 其二 國民議會時代

一 三民議會召集 (一)當時佛國政府最苦しみし處は

財政の窮乏にあり、よつてルイス十六世はチャルゴ

1、ホッゲル等をして其整理に當らしめしも貴族僞

侶の反對に遭ひて一も成功せず、已むを得ずネッケ

ルの策を用いて一六一四年來廢絶せし國會をベルサイユ

イエに召集せり、(二)然るに一七八九年ベルサイユ

に集りたる議會は議院の組織につき平民と貴族との

間に争起り平民は斷然分離して國民議會を組織し新

憲法の制定を終るまで解散せざと誓へり、

二 革命の發端 然るに國王は王后、貴族等の勧めに

より兵力を以て議會を解散せんとするの風説傳はる

やパリの暴民大に憤激し一七八九年七月終にバスチ

イエ獄を襲ふて之を破壊せり、地方の暴民亦起り富

豪官吏を殺し狼籍を極めぬこれ革命の發端なり、

三 ベルサイユ襲撃 後再王は兵力を以て議會を壓せ

んとする由聞えければ暴民又起りてベルサイユを襲

ひ王と王妃とを捕へ擁してパリに歸りチャルサイユ

宮に幽せり、時に一七八九年十月なり、

四 國王逃走 一七九〇年新憲法成り、ミラボ、ラ

フアイエツト等の盡力により内政大に改革せられ貴

族僞侶も其特權を捨て財政も整理され民權大に伸張

せられ國王も又憲法遵守を宣誓せり、然るに一七九

一年王黨の首領ミラボ1死し議會の議論益過激に向

ひしを以て王不安の念を起し外國の力を借りて共和

主義を抑へんとしミラボ方面に逃走せしが捕へられて

パリに歸り新憲法の遵守を誓ひ再立憲王政となる

議會は解散せり、

フランス革命 其三 立法議會時代

立法議會時代

立憲時代

代議

一 立法會議 (一)成

立憲黨

(二)三黨 溫和共和黨

過激共和黨

(一)進入の理由

二 填普軍 (二)亂民王宮を襲ふ

(三)王幽閉さる

(四)外國軍退去

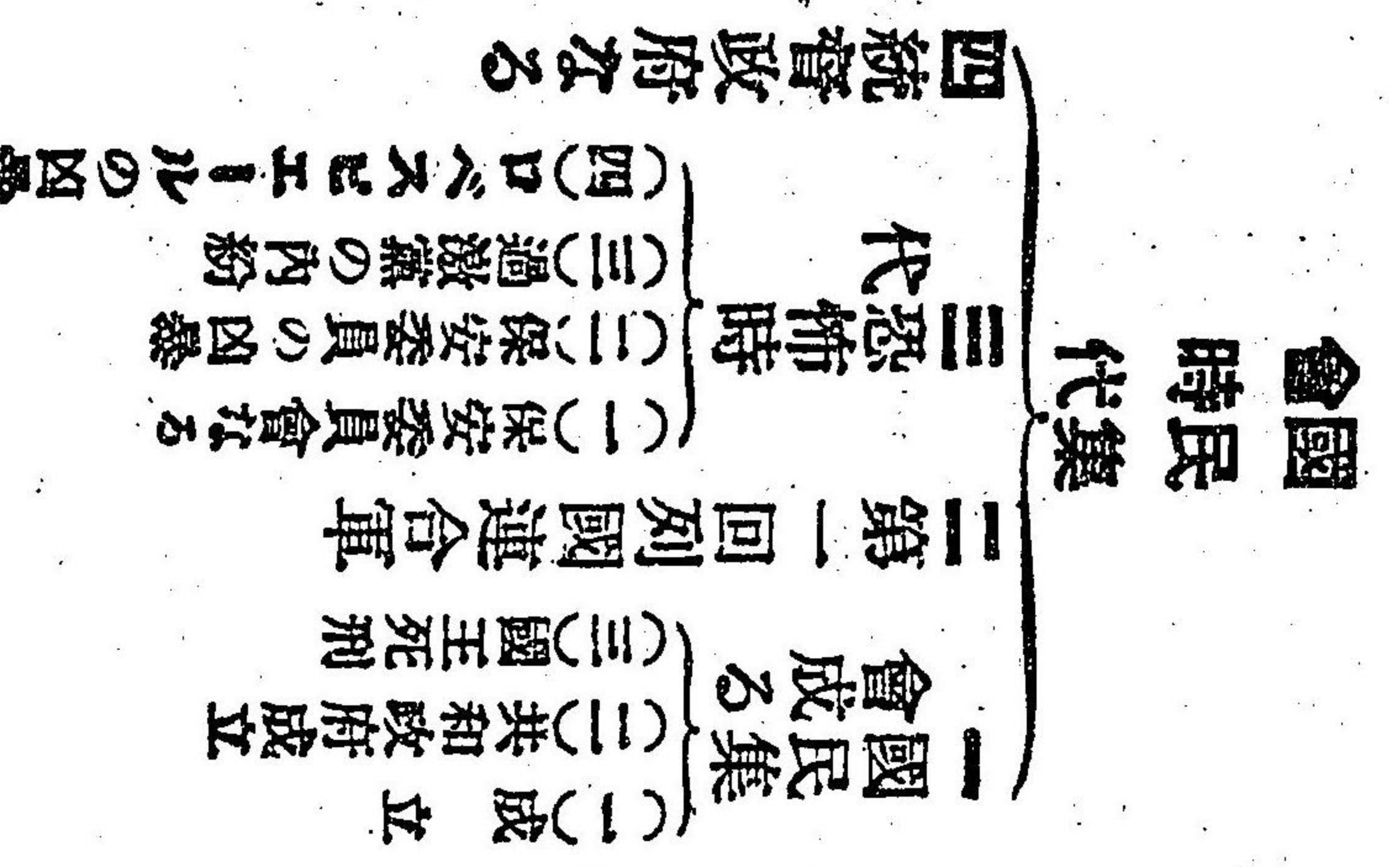
參考問題

- 一 立法議會の三黨派名並に其首領につきて述べよ
- 二 普墮軍進入の理由如何
- 三 何故に亂民王宮に闖入せしか
- 四 外國の侵入に對する立法議會の措置如何

フランス革命 其三 立法議會時代

一 立法議會成立 (一)國民議會は一七九一年九月自
 解散し新憲法に基きて同年十月立法議會なる、議員
 數七四五名なり、多くは小肚者とす、(二)其黨派分
 れて三となれり、一は立憲黨にして少數なりラフ
 イエット其首領なり、二は溫和共和黨(ジロンド黨)
 ロラン、ダムリエー等を其首領とす、三は過激
 共和黨(ジャコピン黨)なりダントン、マラー、ロベ
 スピエル等を首領とす最も勢力を運くせり、
 二 普埃爾軍の進入 (一)オーストリア王及プロシア
 王はルイス十六世の境遇を哀れみ且つ其革命的爭亂
 の自國に波及せんことを恐れ終に相約して佛國革命
 を鎮壓せんと兵を以てフランスに進入せり、
 (二)當時佛軍は軍規整はず埃普聯合軍に敵すべくも
 あらず諸戰皆破れ聯合軍は長驅バリに迫らんとする
 の勢なりければ市民の動搖言語に絶せり逋政府の募
 集せる騎勇兵五千人マルセイユより來り市内一層騒
 然たり、暴民等思へらく各國軍の進入は國王外國と
 通したる結果ならんと、乃ち王を廢せんとし亂民王
 に闖入す玉璽を議會に避く (三)時に議會は聖王處
 分につき討議中なりければ直に王を捕へ罪人と同一
 の待遇を以てタンプルの牢獄に幽閉し進て國內の王
 黨、立憲黨三千餘人を殺戮し内顧の憂を斷ち、(四)
 夫より全國の兵を集めて外國軍と戰ふ時に聯合軍中
 疾病起り且ロシアが普埃爾兩國の虛に乗して勢力をホ
 リランドに恣にするを恐れて軍を退けたれば革命軍
 は意外の勝利を博せり

フランス革命 其四 國民集會時代



參考問題

- 一 國王に對する佛國民の行爲を評せよ
 英國革命と比較評論せよ
 恐怖時代とは何ぞ
 保安委員會とは何ぞ
 シェロツトコルゾーとは如何なる人ぞ
 佛國革命の歐洲に及ぼしたる影響を述べよ
 (三十七年神戶高商)
 (三十九年名古屋高工)

フランス革命 其四 國民集會時代

一 國民集會成る (一)一七九二年九月立法議會を廢し新に國民集會を作る、(二)共和黨殊に過激共和黨最も勢あり先づ王政を廢し九月二十二日共和政治の成立を布告し、(三)十二月より議會は法庭となり、國王の罪跡を審議し三百三十四票に對す三八七票の多數を以て王に死刑を宣告し。一七九三年一月終に王を斷頭台上に害せり、

二 第一回列國連合軍、國王死刑の報傳はるや各國佛國民の暴戻を憤り英、奧、普、蘭、イスパニア其他の國々合して佛國共和黨を撲滅せんとせり、

三 恐怖時代 (一)外連合軍の侵入あるに際し内南北に勤王黨の反亂あり國民集會は此内憂外患に對し強固なる政府の必要を感じ保安委員會及革命裁判所なるものを設け其局に當らしめたり、(一七九三)(二)然るにダントン、マラー、ロンスピエル等保安委員の行動無謀慘忍を極めしを以て世人この時代を恐怖時代と云ふ即彼等は溫和に傾ける溫和共和黨の人々を殺し、マラー、マラーを刺せし後も

四 統督政府 國會は一七九五新憲法を作り立法部を元老院、五百人議會の二とし行政を五人の統督に委し自解散せり、これより一七九九年までを統督政府時代と云ふ。

終れり、
に處せり時に一七九四年七月にして恐怖時代こゝに
に暴威を振ひしが國民集會の議員之を惡み捕へて死刑
争ひエベール、ダントン殺されロンスピエル獨り
の如く對反黨を撲滅したる彼等過激黨は相互に相
せしこと一年間に約八萬人の多きに及びり (三)か
王后實族ロラン夫人始めジロンド黨員其他を殺戮
るものな設け其局に當らしめたり、(一七九三)(二)

ナポレオンの覇業 其一 統督政府時代

- (一)征伐理由
- (二)奈翁大勝
- (三)カン・ホルミオの和議
- (四)凱旋
- (一)理由
- (二)大勝

一 アイタリ

- (三)海軍大敗
- (四)第二回列國連合軍
- (五)奈翁歸國

二 エジプ

- 一 カン・ホルミオの和とは何ぞ
- 二 エジプトと遠征の理由を述べよ
- 三 第二回列國連合軍の首唱者は誰ぞ

參考問題

統督政府 ける下 奈翁於

- 遠征
- アフリカ
- ナポレオン

ナポレオンの覇業 其一 統督政府時代

一 イタリヤ征伐 (一) 欧州列國連合軍は佛國に破ら

れ多くは和したれども英埃三國は尙難を構へしを以て統督政府先づオーストリアを討たんとして三軍を出せり、即ちロスはライオン河上流よりジッパルダンはライオン河の下流より、ナポレオンはイタリヤ共ニ埃國に侵入せんとせり時に一七九五年なり

(二) 時にナポレオン廿七功名の念燃ゆるが如き彼は被服糧食等給用不十分なる三六〇〇〇の兵を鼓舞して一七九六年イタリヤに入り、他の二將の敗れたるに拘らず、先づロツヂに奇捷を博しミラノ、バルザ、モヅナを下してマツチウナを陥れ進てオーストリヤに向ひカプロの兵を撃破し一撃ウイニを衝かん

とす (三) 埃國恐れて終にカンポ・ホルミオに和し(二) ネーデルラントが佛國に讓ること、(二) 佛の建てる共和國(チサルディナ、リグリア、ロリア、ヘルベチア)を認むることと約し一七九二年佛國第一流の將軍と仰がれてパリに凱旋せり。

一 エジプト遠征 (一) 佛政府は英國を討たんことをナポレオンに命ぜり奈翁佛海軍の英に及ばざるを察し先づ埃乃を征して英國と東洋との交通を遮斷せんことを獻策す政府之を許す、(二) 一七九八年三萬九千の兵と四百の兵船を以てアフリカに向ひ直にエジプトを征服せり、(三) 然れども不幸海軍は英將ネルソン

の爲めにアブキル灣に全滅せられたり、(四) 此報歐洲に傳はるや英相ピット首唱し第二回列國連合軍を作り將に佛國に進入せんとし佛國の形勢日々に危機に迫まれり、(五) 奈翁之を探知し英艦隊の封鎖を脱し一七九九年十月パリに歸る

(西洋史一〇二)

時執

政

代官

ナポレオンの覇業 其二 執政官時代

(西洋史一〇三)

一 執政官政府

- (一) 埃英二國の反對
- (二) 奈翁進撃
- (三) 大勝
- (四) リッホモールの和

二 埃國征伐

- (一) 舊教復興
- (二) 教育獎勵
- (三) 法典編纂
- (四) 其他の改良

四 内治

五 帝政創立

- 一 埃國征伐の理由如何
- 二 リッホモールの和約を述べよ
- 三 アミアン條約とは何ぞ
- 四 帝政創立の年代を問ふ
- 五 ナポレオンの内治を語れ

論義問題

ナポレオンの覇業 其二 執政官時代

一 執政官政府 (一)パリに歸りたる奈翁十一月兵を以て統督政府を仆し議會を解散し行政は三人の執政官を置き立法は元老院代議院立法院の三院に分ち自ら第一執政官となり行政兵馬の大權を握れり。(二)壘國征伐 (一)奈翁執政官となり統督國政の改良人心收攬に務むる時に當り英壘三國は尙新政府を承認せず奈翁を以て佛國の篡奪者とせり、奈翁怒りて先づ壘國を討ち次で英國に及ばんとす、(二)一八〇〇年春自四萬の兵を以てイタリヤに入り別にモロイをしてバヴアリヤ及び奧國に入らしむ、(三)モロイはホーヘンリンデンに捷ち奈翁はヴグラムに大勝し兩軍合してウイーンに追らんとす壘國恐れて和をリクナデルに和す(一)ラオ之河以西を佛國に讓ること、(二)イタリヤの共和國を認むること、(三)イタリヤの和時に英國に於ては奈翁の相手たるピット辭職し方針一變し佛國とアミアンに和せり、(四)内治 ナポレオンは平和の時を期して大に内治の改良を計れり、(一)舊教を恢服し上流社會の甘心を奪得(二)小學校を起し國民教育を獎勵し更に各地に專門學校を起し佛國には各種の法律、習慣、門學等を起し佛國に於ては奈翁の相手たる律等ありて統一を缺きしを以て專門家トロシツ1等(四)其他道路の改良橋梁の架設港灣の修築法典なりしに命じて新法典を編纂せしむこれ所謂奈翁法典なり(五)國民の募ふ所となれり、(一)二年推れて終身執政官となりしが今や國民多數の希望を入れて一八〇四年共和政を廢して帝政を建て、五月パリに即位しナポレオン一世と稱し翌年伊太利王の位に即けり

ナポレオンの覇業 其三 優勢時代 (一)

- 一 第三回列國同盟 (一)奈翁の計畫 (二)計畫斷絶 (三)ホルウ之戰死 (一)マツクを降す (二)アウステルリツツ壘露
- 二 トラフ (一)アウステルリツツの戰 (二)アウステルリツツの和
- 三 アウステルリツツの戰 (一)ヨセフ・グザボリ王 (二)ミウラー・ヒルツ大公爵
- 四 兄弟を封ず (一)ルイスII和蘭王 (二)ミウラー・ヒルツ大公爵
- 五 ライン同盟
- 六 神聖ローマ帝國解散

優勢時代 (一)

参考問題
第三回對佛同盟の主張者を問ふ
トラフ・アウステルリツツの和とは何ぞ
ライン同盟とは何ぞ
神聖ローマ帝國の創立は何年なりしか
左記の地につき知れる所を述べよ (三十六年東京高師)
1. イグツ 2. カンネ 3. アウステルリツツ、セド 4. アウステルリツツ、セダンを説明
3. アウガム、サニステアノ、セダンを説明 (三十八年神戸高商)

ナポレオンの覇業 其三 優勢時代 (一)

一 第三回列國同盟 ナポレオン帝となるや英國はミアン條約を履行せずのみならず露國、スウェーデン、ナポリと連合して對佛同盟を作りて反抗せり。

二 トラファルガルの海戦 (一) 奈翁大に憤慨してニポロンドンを擧げんと欲し大兵をギリコニコイ

に集めしも強大なる英の海軍あり又露塊の背後を窺ふありて未だ海峡を渡るに由なし、然れども奈翁一計を案じ海將ビルミアゾをして英領西印度を襲

ふが如く装ひて南航し英艦を透ひ虚に乗じ再北上せしめ全艦隊を以て英海峡を衝かんとして、(二) ビル

ミアンの命の如くせしめ露英艦と衝突してイスパニアのカデス港に入りしが強て北上してグレスタトに至

らんとしてホルツンの艦隊とトラファルガルの岬附近に衝突して大敗せり、(三) 五年十二月一日なり、水

三 ルツンは不幸にして敵の流弾に中りて戦死せり、(一) 先に奈翁はビルミアゾに授けし計畫の破るゝや、

先ちギリコニコイの兵を解きて獨逸に侵入し十月二日先日埃將マックをバリアリアに降し、進て(二) 埃露

の連合軍とアウステルリッツに戦ひ大に之を破り、(三) 埃國をして同盟を脱せしめ、(四) 五年十二月二日な

四 兄弟を封す、一八〇六年兄ヨセフをナポリ王に妹婿ミクラーイをサルズ大公に弟ルイスを蘭國王に封じ

五 其他親近の封ぜられしもの多かりき、同年七月西南獨逸の十六州をしてライン同盟を作らしめ自ら其保護者となり、事ある時

六 には七萬三千の兵を出さしむることを約せり、事ある時獨帝は神聖ローマ皇帝の位を辭し單に埃帝フランシジ

ス一世と稱せり、

ナポレオンの覇業 其四 優勢時代 (二)

(一) 尊王の擧兵及其理由

一 グロシ (二) 奈翁の進軍

二 征伐 (三) チルジットの和

(四) ウェストハリヤ王國と

ワルシヤ公國

二 大陸制 (一) 其目的

(二) 内容

三 イズパニア征伐

四 埃國征 (一) クラマの戰

(二) 和議

五 埃國公主と婚す

全盛時代

優勢時代 (三)

一 参考問題

一 グロシヤ王擧兵の理由を説明せよ

二 チルジットの和議とプロシヤ王國

三 大陸制度とは何ぞ 七 (三十七年早稲田)

四 ヨセフイナを離婚したる理由

五 Continental System (大陸制度) を説明せよ (三十八年神戸高商)

ナポレオンの覇業 其四 優勢時代 (二)

一 プロシア征伐 (一) 當時のプロシア王をフレデリ

キ・ウイレルム三世となす、一七九五年佛國と和し
てトリハンフェルを得る密約を以て第二、第三
回の列國同盟に加らず中立を守りアウステルツツ

戦後ハンフェルを取りしに一八〇六年奈翁英國
と和せん爲めプロシアをしてハンフェルを英國
に還附せしめんとす、普王夫に憤り露と同盟して佛

國に對して戰を宣せり、(二) 奈翁直に兵を進めて普
軍を破り一八〇六年十月ベルリンを陥れ翌年露軍を

フリドリヒンズドに破り (三) 終に露普兩國とチルジ
ットに會して和す、(一) 普國はライン、エルベ間の地

を佛に割くこと、(二) ポーランドより得たる地を割き
てワルシア公國を作ること、(三) 大陸制度を守るべ

きこと、(四) 常備軍を無限すること、(四) 奈翁は割か
しめたる地の西部にウエストハリア王國を立て弟を

封じ、ワルシア公國をサクソニアに屬せしめぬ、
大陸制度 彼ベルリンに入りし時ベルリン條令を

公布し諸國をして英國と通商するを禁じ英船の大陸
諸國の港に来るものは捕へて其貨物を沒收すべきこ

とを命し以て英國を苦しめんとせり、(四) 奈翁は
三 一八〇八年イスマニア征伐 一八〇八年イスマニア

幽し其國を奪ひヨセフを國王とするや國民服せざら
をなす奈翁行きて征す、奧國間に乘じて兵を擧ぐ、

四 粉砕しウイーンに和す (一八〇九) 奈翁は后ヨセフイナとの間に子
五 奧國公主と婚す 奈翁は后ヨセフイナとの間に子
なかりしと、名家と婚して己が門地を高めんと欲せ
しヨセフイナを離婚して奧帝の女マリアルイザと
と婚せり (一八一〇) 爾後三年間を奈翁全盛の時と

ナポレオンの覇業 其五 衰勢時代 (一)

衰勢時代 (一)

一 奈翁の諸因

- (一) 大陸制度
- (二) 壯丁減少
- (三) 重税
- (四) 廢王侯の不平
- (五) 其他原因

二 プロシアの征伐

- (一) 大兵の進軍
- (二) 戰争
- (三) 露軍退却
- (四) 佛軍の困却
- (五) 退軍

三 列國の軍連合

- (一) 列國並起る
- (二) ライプチヒの戰
- (三) 奈翁の大敗

參考問題

- 一 奈翁勢力衰頹の諸因を語れ、
- 二 奈翁失敗の序幕は何ぞ
- 三 露國征伐の原因如何
- 四 ライプチヒとの戰とは何ぞ

ナポレオンの覇業 其五 衰勢時代 (一)

一 奈翁衰勢の諸因 (一)大陸制度は却て大陸諸國を因却せしめ不平の因たり、(二)多年の戦争により佛國の壯丁減し兵力を減殺せしこと、(三)軍費の爲め重税を課し人民漸く不平を抱きしこと、(四)廢せられたる諸王侯の恢復の機を待ちつゝあること、(五)イスパニア王を廢しヨセフィナを離婚したること、
 二 ロシア征伐 (一)其原因、露國チルジツト和約後佛國と好を通せしも佛國の強大なるを思ひ且大陸制度の甚しくロシアの商業貿易に不利なるを以て終に一八一一年公然英國と通商貿易を管めり、奈翁其約を破るを以て終に之を征す、
 (二)戦争 (一)歐洲諸國中英國とスウエーデン、トルコを除くの外皆強て援軍を出さしめたる總軍五十萬の大兵を以て一八一二年五月征露の途に登りニース

ロジノに大勝し十四日モスクバ進入せり (2)然るに露軍は戦を避けて市街及糧食馬糧を焼き退却す (3)ここに至りて佛軍兵舎なく糧食又乏しく然かも寒天に向て防寒の用意なし其因却筆紙の盡す所にあらず天に(4)奈翁已むなく十月十九日退軍に決せり然れども佛軍は饑渴と寒氣とコサツク兵等の爲めに非命に十二月十四日パリに歸り直に兵を募集せり。奈翁は十二月三十一日大に連合軍と佛國との間に調停を試みしやな

に戦ひ送らざり

ナポレオンの覇業 其六 衰勢時代 (二)

四 奈翁の (一)パリ陷落 (二)帝位を辭しエルバに向

五 ルイヌ十八世

六 奈翁再 (一)エルバ島脱出 (二)上陸 (三)帝位に即ぐ

七 ヴルテロワの戦

八 末路 (一)英艦に降る (二)セントヘレナ島に流る (三)死去

參考問題

モスクバの敗後に於ける奈翁の運命如何
 ナポレオンがより上陸せし時佛國民は如何に
 せしか
 ヴルテロワの地は今日何國に屬するか
 ナポレオン一世の戦績を述べよ (三十四年美術)
 ヴルテロワの戦績を述べよ (三十六年外語)
 西暦一八五一年に於ける奈翁の運命如何 (三十六年専門學校)

ナポレオンの覇業 其六 衰勢時代 (二) (西洋史一〇七)

四 奈翁の辭位 (一) ライプチヒ敗後直にパリに歸り再募兵して連合軍と戦ひしも大勢既に傾きて又如何とする能はず一八一四年三月はり陥り (二) 四月六日帝位を辭し同じき二十日エルバ島に向ふ、
 五 ルイス十八即位 四月二十四日ブルボンのルイス十八世(十六世の弟)英國より來りて王位に即ぐ、
 六 奈翁の再舉 奈翁はエルバ島に居ること十ヶ月ならずして再舉を計れり蓋しルイス十八世の不入望及ウイーン會議の衝突等なきに機逸すべからずとせしなり即一八一五年二月二十六日エルバを發し三月一日佛國に上陸してパリに向ふや征討の將木一を始めとし將士來附するもの數萬皆道皆皇帝萬歳を唱ふ三月二十日パリに入り再皇帝の位に即ぐ
 七 ウィテルロウの戰 此時列國はウイーンに會せしが奈翁再舉の報を得て再連合軍を出して之を攻む奈翁は兵十三萬を率めて六月普將ブクヘルの兵をリニヒに破り次で同月十八日英將ウェリントンとウィテルロウに激戦し勝敗未定まらざりに忽ダリッヘル兵來りて英軍を援くるに及んで終に大敗し二十一日パリに歸り復起つ能はず
 八 奈翁の末路 (一) 敗後米國に逃走せんとせしが能はずして英艦に降り英國に送られ終にセント・ヘレナに流され十月へレナ島に著す(二) 爾來英將ハドソレがロリの嚴しき監督を受け辯臺單調なる生活を送りしが風土身に適せず身心衰弱して一八二一年五月五十九日死す、蓋世英雄の末路又衰れむべきものなり

ウイーン會議 (西洋史一〇八)

一目的——土地處分

二列席者

三會議の狀況

ウイーン會議

- 四 議 項 決 議 要
- (一) 普奧兩國舊地を復す
 - (二) 露の獲得地
 - (三) 英國はポルタその他を
 - (四) スウェーデンの合併
 - (五) 和蘭の合併
 - (六) 獨逸聯邦
 - (七) 其他土地は舊主に復すること

參考問題

ウイーン會議出席者中主なる人々を擧げよ
 會議の難問題は何か
 佛使タレヒランは何事をなしたるか
 ウイーン會議の決議要項を語れ
 左の事件は西暦何年に起りしか

五四三二一

- br ウェストフリア條約 (三十二年二高)
- bro 最後の奥普戰爭
- ad ウイーン列國會議
- ae アメリカ發見
- ウイーン會議の年代を問ふ (三十二年二高)
- ウイーン會議の結果を別圖に示せ (三十七年兵學校)
- タレヒラン會議の始末を陳べよ (三十八年東京高師)
- ウイーン會議の始末を陳べよ (四十二年陸軍主計)

九八 七六

ウイーン會議 (西洋史一〇八)

一 目的 佛國大革命に次ぐにナポレオン戦争を以て

し歐洲諸國の領土境界錯雜紛糾して亂麻の如きな
適當に處理せんとす、これ本會議の主目的なり、

二 列席者 本會議は一六四八のウエストフアリア會
議及後に来るべき一八七八年の伯林會議と共に近世

の三大會議と稱せられ最重要なるものなり其會合者
はトルコを除き凡て歐洲諸國の帝王或は使臣を網羅

せり其主なる人々を擧ぐれば

露國 アレクサンドル 一、ネッセルロート

普國 フレデリクウイリム、バルデンベルヒ

奧國 フランシス一、メッテルニヒ

ウエリントン

タレラン

三 會議の状況 會議中難問題はサクソニア及ヴルシ
ア問題なり露はヴルシワの全部を得んとシプロシ

はサクソニアの全部を合せんとし兩國意見一致し將
に一致行動に出でんとす、奧國喜ばず間に乘して佛

四 決議要項 (一) 普奧兩國舊地を復すること、(即普
國はサクソニア及ヴルシワの一部ライン左岸、ウ

エストリアリア等を奧國はネーデルラントを失ひイタ
リア北部に地を加ふ)、(二) 露國はヴルシワ公國の

大部を占領すること、(三) 英國はヴルシワ及チーナ
植民地等を得ること、(四) スウエーデンはノルウェ

エスタトリアを合併すること、(五) 和蘭はベルギ

エスタトリア諸小國及イネバニアは之を舊主に返す

自由統一主義の發生及び其大成時代

一 神聖同盟 (一) ウイーン會議の保守傾

來盟の由 (一) アレキサンデル主唱

二 神聖同盟 (一) メッテルニヒの經歷

ツァーレン (二) 保守主義

ニヒル (三) 利用

自由主 (一) プロイツ

義抑壓 (二) イネバニア

(三) イタリヤ

神聖同盟

參考問題

一 メッテルニヒ事蹟を述べよ (三十三年東京高師)

二 神聖同盟の主義を問ふ

三 神聖同盟の主唱者は誰ぞ

四 神聖同盟の目的と加盟せし諸國の名を記せ

五 神聖同盟の性質を述べよ (三十五年女子高師)

六 神聖同盟につきて (三十七年専門校)

神聖同盟

一 神聖同盟の由來 ヲイーン會議は佛國革命以來各國

民中に漸く發生し來れる自由統一の思想に毫も顧慮

する處なく保守的に傾きしを以て稍もすれば反對運動

起り歐洲の平和の傷けられんとするの兆あり (二)

一八一五年九月露帝アレキサンデル一世キリスト教

の主義に基き正義慈善平和を内治外交の主義として

世界の平和を圖らんと主張し普王堦帝の贊成を得て

茲に一同盟を作れりこれ神聖同盟なり、英國、土耳

古、法王を除く外諸國皆加盟せり、

二 ムツテルニヒと神聖同盟 (一) ムツテルニヒは奥

國の貴族なり、若くしてフランスに親任せられ三

十七才奧國宰相となり、ナポレオンの勢力を覆さん

として大に盡力せり、奈翁没落後ウイーン會議々長

となり大に敏腕を振へり、彼は保守主義を抱き疾く

自由主義に反對せり、(二) 以りて彼は神聖同盟を利

用して自由統一主義を壓服するの具に共せり、

三 自由主義抑壓 (一) ドイツに於ては大學生等大に

自由主義國家統一の必要を論じ種々の運動を試みし

かばムツテルニヒは聯邦會議を開き學生の結社言論

の自由を制し出版物の檢閲を嚴にし全く之れを鎮壓

したせり、(二) イスパニアに於て自由主義の運動起

り憲法再興を要求して一揆起れりムツテルニヒ又干

渉し神聖同盟諸國と圖り佛國の兵を以て之を鎮定せ

りしがムツテルニヒは兵力を以て之を抑壓したりか

く歐洲に起れる自由運動は一時悉く神聖同盟の名に

ムツテルニヒの干渉を以て鎮定し了れり、

自由統一主義の發生及び其大成時代

アメリカ諸國の獨立

(一) イスパニアの失敗

(二) 獨立

パリアルヘンチ

パラルグアイチ

(三) 南米の獨立

ボリビア

ペレグエラ

ニウグエラ

エクスアドラダ

(四) 北米の獨立

メキシコ

中央アメリカ諸國

一 ニアスの獨立

米國諸國の獨立

ニブラジルの獨立

三モントロイ主義

一 アメリカ諸國の獨立せし原因を述べよ

二 カンニングとは如何なる人ぞ

三 モントロイ主義を説明せよ (三十二年東京高師)

參考問題

アメリカ諸國の獨立

一 イスパニア領アメリカ諸國の獨立
 (一)イスパニアは南北アメリカに多大の領地を有せしが愚なる本國政治家は植民地の發達して本國を擾がんことを恐れて常に其發達を阻害せり加ふるに總督知事等收斂を專とし又商業は專賣主義をとりしな以て植民地人は常に本國の苛政を怨めり、(二)本國の奈翁に併呑せられしや各植民地は各自治の政をとりり今や自由統一の氣勢は遂に新大陸の天地に及び遂に彼等諸國の獨立を見るに至れり

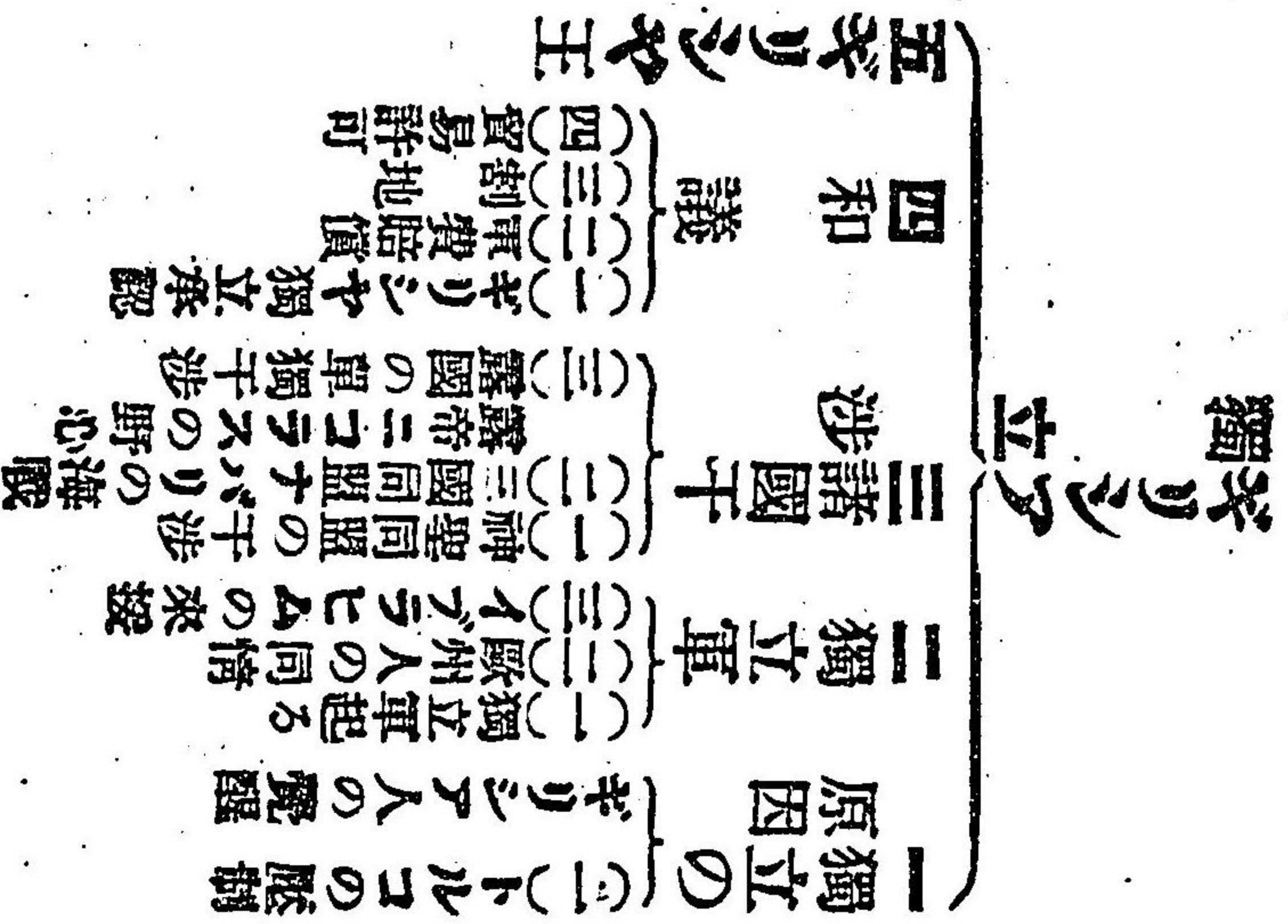
(三)アルヘンチナは一八一〇年分離し一八一九年共和國となり、パラグアイ一八一一年分離し一八四四年共和國となり、ウルグアイは一八三九年共和國にベルーは一八二四年に獨立し、ボリビアは一八二五年年に、チレは一八一八年に獨立し、一八一九年に獨立せしコロンビヤ分裂してヴェネズエラ、ニカラガ、ラナダ、エクスドル三國を生じぬ、(四)メキシコは一八二三年に共和國となり又一八二四年には中央アメリカが合衆國起り後五ヶ國に分る、

二 グラヅル はポルトガル領なりしが一八二三年獨立帝國となる、

三 モンロー主義 アメリカに獨立運動起るやメグテセリ英相カンニング先づ之に反對し次て合衆國大統領は合衆國が其獨立を承めたる諸國に對し干渉するもの對せざる可からざりと世に之れをモンロー主義と稱せり、

自由統一主義の發生及び其大成時代

ギリシアの獨立



參考問題

- 一 ギリシア獨立の原因を述べよ
- 二 ギリシア獨立とロシアの野心
- 三 アブリアノールの和議を述べよ
- 四 希臘獨立と神聖同盟
- 五 ナパリの海戰につき述べよ (三十三年三萬)

ギリシア獨立 (西洋史一一)

- 一 ギリシア獨立の原因 (一)ギリシアは十五世紀以來トルコの治下におりしが人種、宗教を異にし且政治上の抑壓を受け煩る不平なりき、(二)十八世紀に至り希臘人西歐諸國の大學に學び古代希臘の雄渾なる文學美術、自由開進的なる政治の行はれしことを知り祖先に對し現在の奴隸的生活を恥ぢ大に愛國心を起し發奮するに至れり、
- 二 獨立軍 (一)一八二〇年ギリシア志士終に獨立軍を起す、(二)歐洲諸國人はギリシア昔時の文運を追想し大に之に同情し軍資を送り或は兵士を送りて之を助けたり殊に英國詩人バイロンは自ら筆を劍に代へ赴きて獨立軍に投じたり、(三)トルコ帝援をエジプト太守マハムットアリに乞ふアリの子イブラヒム一八二五年大兵を率ゐて獨立軍を討ち大に之を破り將に之を鎮定せんとせり、
- 三 諸國の干渉 (一)これまで諸國は神聖同盟の主義に支えられて敢て干渉せざりしが、(二)一八二五年露帝アレキサンデル一世死しニコラス二世嗣ぐやトルコ侵畧の野心を以て英佛を誘ふて三國同盟を作りトルコに對し希臘の自治を要求し聞かれざるや三國同盟の海軍を以てトルコ海軍をナパリの破り(一八二七)(三)更に露國は陸兵を以てトルコを攻め連勝將にコンスタンチノブルを衝かんとせり、
- 四 和議 トロコ屈してアブリアノブルに和し(一)希臘の獨立を認め、(二)露國に軍費を賠償し、(三)トルコ河口の地を割きて露に與へ、(四)且露人にトルコ内に貿易することを許せり、
- 五 ギリシア王 はバウリア王子オトリヲを迎へ立てぬ

自由統一主義の發生及び其大成時代

七月革命
 原 因 (一)ルイス十八及カロワ王の失政 (二)宰相等の專制
 果 (一)カロワ王廢せらる (二)ルイフィリポ即位

七月革命
 一 パル立 (一)兩國の相異點 (二)獨立運動 (三)ロンドン會議
 二 ポーランド人 (一)獨立運動 (二)失敗
 三 イタリアに於ける自由運動
 四 獨乙及スウイスに於ける影響

參考問題

- 一 カロワ王の專制を述べよ
- 二 七月革命とボリニヤとの關係を述べよ
- 三 蘭白兩國人の相異せる點を述べよ
- 四 七月革命と其影響を述べよ(三十四年東京高師)

七月革命及其影響

七月革命の原因 佛國王ルイス十八世終に民心を

收攬すること能はずして一八二四年死し其弟カロロ

十世繼ぐ、王は頑迷なる保守家にして貴族僧侶を優

遇しポリニクを重用して專制主義を斷行し大に議

會の反抗を買ひしかば外征によりて人心を轉ぜしめ

んとして成功せざ一八三〇年の總選舉に反對派多數

を占めしかば同年七月緊急勅令を發して未召集せざ

る議會を解散し、選舉法を改正して選舉資格を高め

且新聞紙の檢閲を嚴にし圖書出版の自由を束縛せり

二 暴動起る、是に於て暴動忽パリに起り、王は英國

に走りオルレアン公ルイ・フィリップに迎へられて王と

なる之を七月革命と云ふ、

三 革命の影響 (一)ベルギーの獨立 (二)ベルギーはウ

ィン會議に於て和蘭に合併せられしも元來人種、宗

教育語、利害を異にし且政治上の權力蘭人の手に歸

したれば白人の不平甚しく。兩民族の軋轢絶えざ

りき (二)七月革命の報應するやベルギー人獨立運

動を首府ブルッセルに起し蘭軍を撃退せり、(三)明

女列國ロンドンに會しベルギーの獨立を認め永世中

立とせり。

(二)ポランド人も又七月革命に勵まされて獨立運

動を起せしも忽ち露軍に鎮壓せられ志士多くシベリ

アに流さる、

(三)イタリヤに於ても同じく七月革命の影響により

法王領モデナ・パルマ公領内に自由運動起りしも境

國の爲めに皆鎮壓せられたり、

(ハ)其他獨逸の或地方及スウイイにも反亂起り結果

幾分の自由を得て各鎮定に歸せり、

自由統一主義の發生及び其大成時代

一 改革問題

二 舊教徒 (一)テスト・アクト、

自由法 (二)アイルランド人不平

案 (三)法案通過

三 選舉改 (一)英國の選舉法

正 (二)ウエリックの反對

四 奴隸解 (一)解散主張者

放 (二)解散奴隸八十万

五 穀物條 (一)穀物條令は

令 (二)細民の困難

廢止 (三)コブデン等の盡力

英國改革

參考問題

一 オークンボルとは如何なる人か

二 何故に英國には流血的革命起らざりしか

三 舊教徒自由法案とは何ぞや

四 ヴィクトリア女皇の即位年代如何

五 コブデンにつきて

英國の改革 (西洋史二二三)

一 改革問題 英國にては名譽革命以來國內血を見る

の争亂なく政黨政治により着々進歩せり、然して當時改革を要すべき問題四あり、舊教徒自由法案、

選舉改正案、奴隸解放案、穀物條令廢止案とす、

二 舊教徒自由法案 (一) アストラクトによりて舊教

徒は官吏又國會議員たること能はず、(二) アイルラ

ント人は其八分の七は舊教徒なれば常に不平を抱き

しが、(三) 一八二九年オイクセルの盡力により此

法案議會を通過し舊教徒も官吏、議員たるを得るに

至れり

三 選舉法改正 (一) 英國選舉法は十四世紀の制定に

して衰微せる小市の議員を出せるに拘らざるに

スタム等の大都會より一人代表者を出ざるの奇觀あ

りて選出の比例頗る當を得ざりき (二) 當時トリ

リ内閣のウエリントンは之に反對して辭職し (三)

ホイ黨のグレイ内閣となるや改正案は再度否決の後

一八三二年終に上下兩院を通過し以後選出の比例公

平とな水り、

四 奴隸解放 (一) パクストン、ウヰルバ、

ス等の熱心なる主張により一八三三年奴隸解放案議

會を通過し(二) 黒奴八十萬人を解放し政府は使用者

に對し二億萬圓の辨償をなせり、(三) 英國民が米國

に先じて此事をなせるは名譽と稱すべきなり、主

五 穀物條令廢止 (一) 穀物條令は一八一五年地主が

穀物の價を高くとせんと爲り設けたるものなれども、

(二) 細民これが爲めに大に苦しむ、(三) コブデン等

六 一八四〇年ロンドン會議の要點を述べ

之が廢止を唱へ一八四六年漸く其目的を達せり、等

レム四世の姪、(二) 英國民が米國

隆盛に向へり。

東方問題

一 其起原

(一) トルコの衰微

(二) 露國の野心

(三) 英國の利害

二 トルコ

(一) エジプト太守の要求

(二) トルコの敗

(三) 和議

(四) 露土密約

三 エジプト

(一) アリのアラビヤ經營

(二) 英國の野心

(三) 土、埃開戦

(四) 露の野心ならず

(五) ロンドン會議

(六) エジプト屈服

東方問題

自由統一主義の發生及び其大成時代

(西洋史二一四)

參考問題

一 バルカン半島に於ける英露の干渉を述べ

二 東方問題の起因を説明せ

三 英國は何故にトルコを助けしぞ

四 一八四〇年ロンドン會議の要點を述べ

東方問題

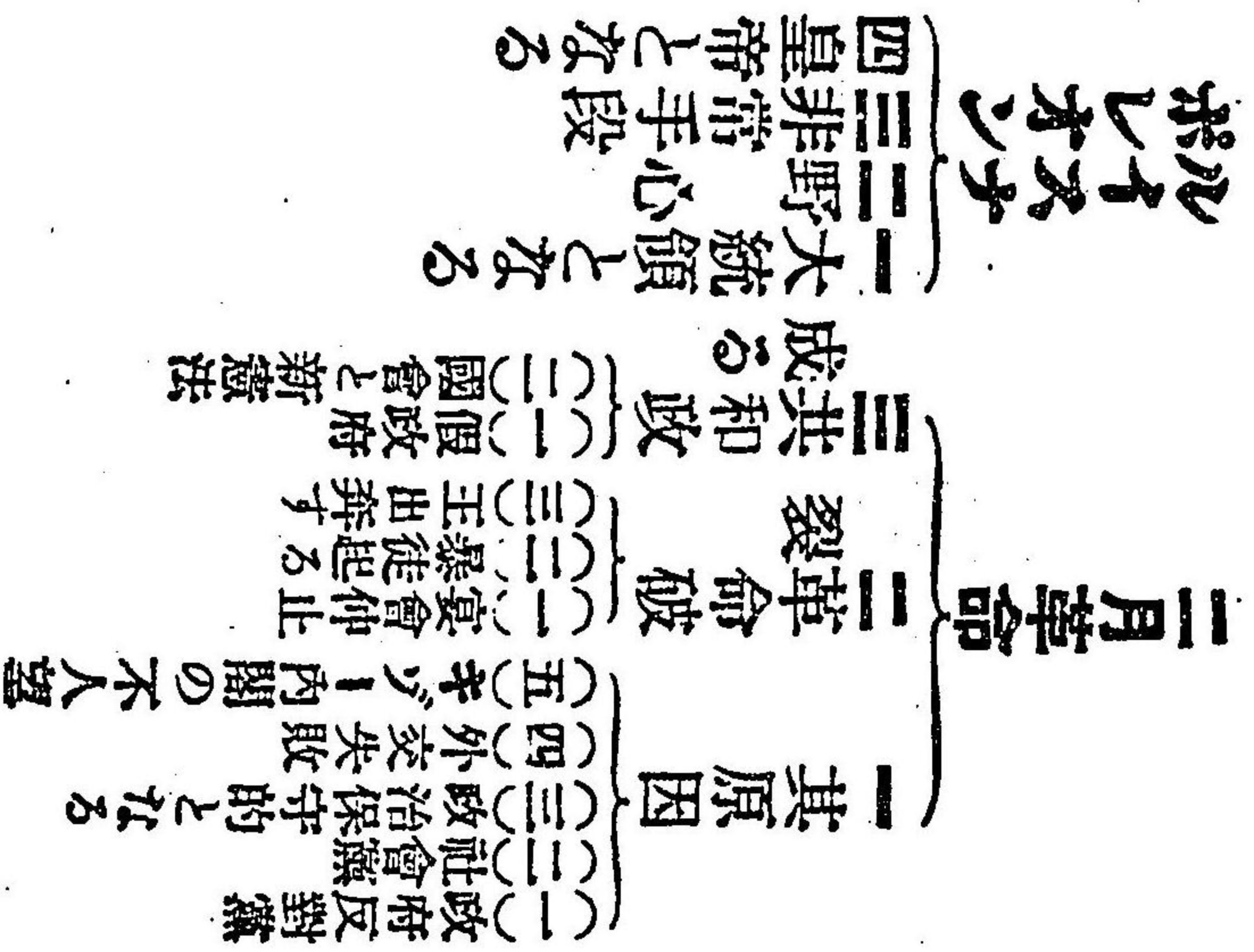
一 其起原 (一)トルコは國政亂れ頗る衰微の状態にあり (二)之に乗じて露國はトルコを亡ぼしバルカン半島に出てんとする野心あり、(三)然れども露國の南下は英國の好まざる所なり、これ等の事情によりて起れるもの、これ所謂東方問題なり、

二 トルコエジプト戦争 (一)エジプト太守メマ、トアリ希臘獨立戦争に土耳其古を援けて功ありシリアを要求して聽かれざるを憤り一八三二年兵を擧げシリアを占領し進てコンスタンチノブルに迫らんとす (二)露は乘じて野心を果さんと欲しトルコを助けんとす、(三)英佛トルコに勸めてエジプトと和さしめシリアをエジプトに與ふ、(四)然るに露は其後トルコとウシキアル、スグレ、シ秘密條約にて攻守同盟を結ぶ、

三 エジプト戦争 (一)其後メマトアリは大にアラビアを経營し紅海を領し英國東洋の商路を扼す、(二)英國大にアリを惡み一八三九年事によりてアジンを奪ひ更にトルコに勸めてエジプトを討たしむ、(三)トルコ即一八三九年エジプトと戦ひしが却て大敗しコンスタンチノブル再危し、(四)露國は機に乗じて密約を行はんとせしも、メマタルニヒ之を妨げ(五)終に一八四〇年英普奧露ロンドンに會しトルコを助けてエジプトを降服せしめんことを決し、(六)降伏をエジプトに促すエジプト尙聽かざりしが孤立接なきに及び終に屈しエジプトを保ちてトルコに從屬せり、

自由統一主義の發生及び其大成時代

二月革命及奈翁三世



參考問題

- 一 二月革命を述べよ
 - 二 キヅィとは如何なる人ぞ
 - 三 奈翁三世佛人の態度につきて
 - 四 大革命以來佛國政體の變化を述べよ
 - 五 二月革命を説明せよ
- (三十八年機關學校)
- (三十七年士官校)

二月革命及奈翁三世

其原因 (一)ルイスフィリポには反對の黨派頗る

多かりきブルボン黨ナポレオン黨共和黨皆王の政治

に反對せり (二)此外社會黨あり貧富の懸隔の甚し

きを憤り社會共產主義を唱へ、選舉法の改正を主張

し皆王の政治を困難ならしめぬ、(三)王即位の初め

憲法を守り自由の政を行ふことを約せしも反對黨の

反抗や宰相の意見等に左右され政見自然に保守に傾

き漸く民望を失ひ (四)加ふる外交の失敗を以てし

益々民心離散するに至れり、(五)キヅメ内閣成るに

及び國民の切望せし選舉改正案を否決し民權の擴張

に反きし

二 革命の破裂 (一)一八四八年二月政府反對黨はパ

リに宴會を開き政府反抗の心を固めんとするや政府

は其宴會の中止を命ず (二)人心俄に激昂し暴徒パ

リに發す、(三)王恐れ英國に走るこれ二月革命なり

三 共和政府成る (一)共和黨員は假政府を建て共和

政府の成立を公布す (二)五月國會開かれ十一月憲

法を定め行政は任期四ヶ年の大統領に委し立法は同

年限の一院に託することとせり、

一 ルイスナポレオン (一)はルイスボナパルトの子

なり六月議員となり十二月選ばれ大統領となる、

(二)彼伯父大奈翁に倣ひて大事をなさんとす即軍隊

の要路に勝臣を置き、人心の收攬に努め、(三)終に

一八五一年十二月突然非常手段を以て反對黨の名士

を捕へ兵力を以て一揆を鎮定し、新憲法を呈し大統領

の任期を十ヶ年とし且權利を擴張し元老院をして

彼を帝となすの發議をなさしめ國民の投票に問ひ多

數を以て位につきたホレオ三世と稱せり、

二月革命の影響

言

ウイーン暴動

マッテルニヒ

トリア

逃走

(二)ホンガリア反亂

(三)プロシアの改革運動

(四)フランクフルトの會議

ミラン

ベネチア

サルヂニア

法王領

ナポリ王領

全

一 概

二月革命の影響

二 ドイツ

三 イタリア

(一)北部分

(二)諸州

參考問題

一 ホンガリアの人種如何

二 コストとは誰ぞ

三 北イタリアに於ける奥國の勢力を見よ

四 獨逸の統一希望につきて

全

一 二月一命の影響 佛國革命が欧州の天地を動かす

ことゝに三度其影響の及ぶ所頗甚大なりとす。

二 ドイツ (一)オーストリアにては多年抑壓せし民心俄に破裂し學生等先づ二揆を起し、^ステューリニ英

國に走り政權改革派の手に落ちぬ、(二)ホングリア

は志士コスートの盡力により一時オーストリアより

分離せしが一八四九年に至り墮國露の援助を得て終

に之れを屈服したり、(三)プロシアにては又改革運

動ベルリンに起りしがフレンジキカイルム四世國

會を開設し且獨逸統一に盡力すべきこと誓ひ鎮定に

歸し五月に至り國會は成立せり、

(四)ドイツ各邦は統一の希望に起り一八四八年三

月末聯邦の代表者フランクフルトに會し憲法を制定

シプロシア王を獨逸皇帝に推戴せんとするや墮皇帝

は退席し又プロシア王も時未だ至らざるを見て之れ

を辭しぬ、

三 イタリア (一)イタリアの北部諸州はウイーン暴

動の報傳はるやミラノ先づ墮國の守兵を追ひ、^ズボ

チア獨立を宣言し、サルヂニアも墮國に對して宣

戦し一時北部イタリアは墮國より分離したる状況を

呈しぬ然るに六月に至り墮將來り革命運動を鎮壓し

再墮國勢力の下に北イタリアを置き

(二)二月革命の影響は只北部諸州に止まらず法王領

にては憲法を興へ議會を置き、兩シチリア王國又憲

法を制定し議會を設けぬ、

二月革命の影響

全

クリム戦争

(一)露國の野心

(二)聖地 教の争

問題 奈翁三世の計

(三)露國の要求

(一)英佛トルコを援く

(二)セバストポリルを圍む

(三)サルヂニアの來援

(四)露帝ニコラス一世死す

(五)陷落

一原因

二戦争

三パリ會議

(一)出席諸國

(二)和約 ヤウ教徒待遇法

條項 黑海問題

トルコの領土保全

クリム戦争

參考問題

一 聖地問題とは何ぞや

二 奈翁三世のクリム戦争に關係したる以所を問ふ

三 サルヂニア來援の理由如何

四 パリ會議の露佛兩國に及ぼしたる結果如何

附(ナインチンゲールの出てたるは此設なり)

五 クリム戦争の顛末を述べよ (三十六年郵電校)

六 セバストポリルを説明せよ(三十五年千葉專學校)

全 クリム戦争

原因 (一)トルコを征服して地中海に權力を伸張せんとするは露國年來の宿志なり、(二)然るに、(一)に聖地問題に關し露佛の間に葛藤を生ぜり、それは從來聖地につきてはギリシア・ローマ兩教徒共に其保護權を得互に相排斥せしがギリシア教徒遂に勢力を得てローマ教徒を退けたり、然るにナポレオン三世は伯父モスクバの大辱を雪ぎ又自歐洲外交上の指導者たらんとし一八五一年トルコに迫まりて聖地保護權をローマ教徒に與へしめたり、ニコラス一世之を聞き大に怒りトルコ領内ギリシア教徒保護權を要求せり、(三)然して其要求の聞かれざるや一八五三年トルコに向て開戦を宣告したり、

一 戦争 (一)英佛同盟してトルコを助け一八五四年露國に對して宣戦せり、(二)三國の兵クリム半島に上陸しセバストポールを圍む城中よく防ぎて容易に抜く能はず然かも糧食の缺乏、寒氣疾病等の爲めに同盟軍の困難非常なり、(三)時に一五五年一月サウルズニア王ヴァイクトリオエマヌエロ同盟に加り一萬五千の兵をして援けしむ、(四)同年三月露帝ニコラス一世死し露軍振はず、(五)同年九月に至り城終に陥りぬ圍を受くること三五一日なりき

三 三パリ會議 (一)整一八五六年英・露・佛・奧・普・土サルズニア七國の委員パリに會し和約を定む、(二)薩教徒はムハメツトの權利を得ることを得ず、(三)露海は商船の外軍艦を(1)トルコを歐洲國際の班に入れ其獨立と領土の安全を保障すること、(7)士領内の耶蘇教徒はムハメツトの權利を得ることを得ず、(8)黑海は商船の外軍艦は一切入ることを得ず、

イタリア統一

一 ヴァイク
(一)小國分立
(二)填國の壓制
(三)先づ填國を破る可し

二 サルヂニ
(一)カロロ・アルベルト
王の統一運動
(二)エマヌエロ王
(三)カヴ
累地の統一の
戦

三 伊太利
(一)カヴ
累地の統一の
戦

四 興起と
(一)カヴ
累地の統一の
戦

五 統一
(一)カヴ
累地の統一の
戦

三 奈翁三世 (一)プロンビールの密約
(二)奈翁援助を諾す
(三)クロチルド婚嫁す

とイタリア

イタリア統一

イヨタリア統一に對する填國の勢力如何
サルズニアの位置如何
統一に盡力せしサルズニア王を問ふ
イタリア統一に關するカヴールの計畫如何
プロンビールの密約

六 イタリア統一の始末を述べよ (三十五年外語)
四十二年專門 (三十二年東京高師)

七 左の人々の事績を述べよ (三十四年大學豫科)
左記のものを説明せよ
a カヴールの説明せよ
b サドワ

イタリヤ統一 (一)

一 ヲイーン會議後のイタリヤ、(一)イタリヤはウ

ニア、バルバ、モズナ等の小國に分れ且北部ロンバ

ルヂアは奥國之を領せり、(二)イタリヤ人民も自由

統一を得んとし七月、二月兩革命の後は屢自由統

一運動を起せしも奥國又は是等小國の君主が奥國の

援助を得て何れも鎮壓し壓制を續行したり、

(三)さればイタリヤを統一せんと欲せば先奥國の勢

力なイタリヤ外に驅逐せざる可からざるなり、母

二 サルヂニアの興起と統一事業 (一)サルヂニア王

カロアルベルトは夙に自由統一を主張し國內に自

由民主的憲法を布き一八四八年には奥國と戦ひしも

成らずして國外に走り逃にリサボンに客死せり、

(二)其子ビクトリア・エマヌエロは英明なり父王

の志を嗣ぎ伊太利統一を以て其任とし銳意南治を計

り且賢相カザールを任用し殖産を勵まし軍隊を練り

以て統一事業の大成を期せり、(三)カザールは實に

當時の大政治家なり其統一を心掛けエマヌエロ

を助けて先内政を改革し次に小國を以て大事をなす

の難きを悟り大國の援助を得んとしエマヌエロに勸

めてクリム戦争に際し英佛を援けてセバストポルに勦

滅し戰し知なるに及んでカザール自らパリ會議に出

席しイタリヤの現狀を報告し列國の援助を得て統一

大成の必要を唱導し他日統一の素地をなせり。

三 奈翁三世とイタリヤ、カザールは奈翁三世とプロ

ンビエールに會し(一八五八)切に其援助を乞ふル

野心を許す次てサルヂニア王女ドロチルを奈翁

の塔に嫁す

イタリヤ統一 (二)

(一)サルヂニア備兵

(二)奥國宣戰

(三)佛國宣戰

(四)奥軍(マゼンタ

の敗軍)ソルフィ

二 和 議 (一)ビララ

ツカの和議結果由

三 中部併有 (一)ガリ

バルヂの功

四 南部統一 (一)ナホ

リ平定

五 王國建 (一)トリノ

國會

六 統一 (一)ベネチア

合併

(二)ロマー古領

全

イタリヤ統一 (三)

一 奥伊戰

二 和 議

三 中部併有

四 南部統一

五 王國建

六 統一

參考問題

一 ソルフィノの戰

二 何故に突然奈翁は奥國と和せしか

三 ビララツカの和議の結果如何

四 イタリヤ建國の三傑を擧げよ

五 イタリヤ統一を説明せよ (三十七年専門校)

イタリヤ統一 (二)

一 境任戦争 (一)伊太利はプロンビエール密約後大

に軍備を修め務めて境國を怒らしむ (二)境國サル

ヂニアに向て解兵を要求し聞かれざるや一八五九年

四月遂に戦を宣せり。(三)佛國即サルヂニアを助け

て宣戦し其他の諸國は皆中立を守れり。(四)開戦す

るや境軍の勢最初より振はず一八五九年六月マジエ

ンタに敗れ次て同月皇帝自出陣して戦ひしも又ワル

フヱリアに大敗せり

二 和議 (一)かくて伊太利の統一將に近きにあらん

としてナポレオン三世は忽ち境帝とビラフランカに

和しロジバルチアを境國より得て更に之をサルヂニ

アに譲れり蓋しこれ奈翁がサルヂニアをして統一

の大功をなさんしと普國が佛國の背を

襲はんことを恐れたるによる。(二)サルヂニア又巴

三 中部併有 (一)一八六〇年カザルチア奈翁三と會し

パルマを合併す(二)サボヤを佛に割くを約しトスカナ、モナ

四 南部統一 (一)志士ガリバルチ一八六〇義勇兵を

以てシチリア島を征服し進てナポリに迫りエマヌエ

五 王國建設 かくてサルヂニアはベネチア・ロマー

以外の伊太利を統一し一八六一年議會をトリノに召

六 全土統一 (一)次で一八六六年普佛戦争に際し普

七 佛兵ロマーを去るに及び之を占領し都をロマーに

選し統一大成す

全

一 獨 2 の 統 (二)

一 國 情

(一)衰 頹

(二)統一の困難

(三)チルジツト和後の普國

(四)國民の決心

(五)改革實行 (軍制 財政整理 教育獎勵)

(六)ウイレルム一世の軍備

二 普國勃 興

(一)國會の反對

(二)斷 行

(三)ビスマルクの計畫

(四)統一大成

(五)境國排除

(六)フランクフルト會議

參考問題

一 普國振興の建築者及實行者は誰ぞ

二 ウイレルム一世と其名臣

三 フランクフルト會議に對するビスマルクの措置如何

全

獨逸の統一 (一)

一 國情 (一)ドイツは一六四八年三十年戰後國力大に衰微し次てナポレオンの爲めに大打撃を受け終に帝國を解散しウィーン會議には三十九邦聯邦を作りしも結合堅固ならず國民の間統一の希望頗る盛なりしも (二)普墺兩國の爭鬪の爲め統一事業却て困難を極めたり、

二 普國勃興 (一)チルジ、ト和約後普國々民は上下一致して其屈辱を雪かんと欲し大に勃興の準備をなす、其局に當りたる最初の名士をカロロアレクサンダー、フアンスタインとなす、然れども奈翁一世の勢に迫られて逃走せる後其計畫を實行せし人をハルゲンベルヒトす、然して其改革の主要點は (1)財政の整理 (2)兵制の改革 (3)國民教育の獎勵なりとす、

(二)アレクサンダー及び四世病むや一八五八年皇弟ウイラム攝政となる、時年六十才なりしが身體強健勇氣満々たり、切りに軍備の擴張と兵制の改革を唱へ一八六〇之を國會に提出し計費を求めしを得す、然に翌年帝位に即くやウイラムクを宰相とし口實を以て陸軍大臣としモルトクを參謀總長となし頑強なる議會の反抗を顧みず終に軍備の擴張と兵制の改革とを斷行せり (三)かくて國力益充實し威勢愈隆しビスマルク即墺國を聯邦外に驅逐し以て普國に統一して獨逸の統一をなさんと計畫す普墺兩國の反目これより益甚し (四)墺國主唱し一八六三年八月聯邦の憲法改正の爲め會議をフランクフルトに開くやビスマルクは本會議の自國に不利なるを看取し王に懇めて出席を拒み、更に後異議を唱へて其決議を無効ならしめたり、

全

ドイツ統一 (二)

普墺戰爭

一 原因 (一)遠因 (1) シュレースハイヒ州 (2) ホルスタイン州 (3) 普墺二國の反對 (二)近因 (1) (2) (3) (4) (5) 丁抹敗北 (5) 普二州を合せんとす、

二 ビスマルクの畫策 (一) 佛國仲立 (二) 佛國同盟す (三) 普軍大勝サボアの決戰

三 戰況 (一) 佛國の敗北 (二) 墺國分離 (三) 北聯邦構成

四 媾和 (一) 普の二州合併 (二) 墺のベネチア割與

五 結局 (一) 普國同盟の首長たり (二) 普國々運隆盛

普墺戰爭

參考問題

- 一 シュレースハイヒ・ホルスタイン事件とは何ぞ
- 二 普墺戰爭に於けるビスマルクの外交政策につきて
- 三 サボア戰フランクの媾和につきて述べよ
- 四 普墺戰爭の結果につきて述べよ
- 五 サボアにつきて説明せよ (三十二年三高)
- 六 普墺戰爭の原因 (三十八年長崎高商)

全 ドイツ統一 (三) 普墺戦争

一 原因 (一) 遠因は既に上述せし如く普墺兩國多年

の相権にあり、

(二) 近因 (1) は之をシツルネイウヒ、ホルスタイン

事件とす、此二州は十五世紀より下抹國に屬せしが

近來二州内の獨逸人は獨逸に合併されんことを希望

し屢紛擾を起せり(2) 一八六三年に至り丁抹王クリス

チアン九世はシツルネイウヒ州の合併を公にす (3)

ビスマルク即墺國に説き共に丁抹に反對し其宣言を

取消せしめんとして丁抹の聞かざるや (4) 兩國合して

整年丁抹軍を破りて二州を取り二國共同の主權とし

オーストリアはホルスタインをプロシアはシツルネ

イヒを管理することいせり、(5) 然るに普國の此二州

を自國に合せんと主張するや墺國之に反對し終に相

戦ふに至れり、

二 ビスマルクの畫策 (一) これより先一八六五年九

月佛國に旅行し奈翁三世に會し中立を約し (二) 更九

に一八六六年四月イタリヤとビネチアを興ふるを約

して攻守同盟を結びぬ、

三 戦況 戦は六月を以て始まり普軍は連戦連勝の優

勢を以て進み七月サドワの決戦に大勝を博せりイタ

リアに於ては海陸共にイタリヤ軍を破りしに拖らざり

に普軍ウイーンに迫らんとするに及んで終にグラッ

四 和議 (一) 墺國は獨逸聯邦より分離すること、

(二) 普國はライン河以北の諸州を含して聯邦を作る

こと、(三) 普はシツルネイウヒ、ホルスタイン二州を

合すること、(四) 墺はビネチアをイタリヤに割與す

五 結果 普國は獨逸第一位となり北方二十二州の盟

主となり國運益盛なり、

全 ドイツ統一 (三) 普佛戦争(一)

(1) 奈翁三世、普國の隆盛を妬

めること、

(2) 奈翁三世外交失敗と外征

ウマキシコ事件失敗

レオポルト事件

の普墺戦争時の外交失

敗

シツルネイウヒ州の購入

(3) ビスマルクと普佛戦争

二 近 因

(1) 西國内亂

(2) 西人獨逸の親王を迎立せ

んとす

(3) 佛國の抗議

(4) 佛國再度の要求

(5) 宣戦

参考問題

一 奈翁三世の外交上の失敗を擧げよ

二 レオポルト親王即位に對するビスマルクの態度

三 佛國のレオポルト即位抗議の理由

四 佛國再度の要求

五 普佛戦争の原因を述べよ

全 ドイツ統一 (三) 普佛戦争(一)

原因 (一)遠因 (1) 奈翁三世常に普國の隆盛とな

リ獨逸帝國を統一せんとせるを妬める事 (2) 又奈翁

三世は一八六一年以來其外交政策皆失敗に歸し疾く

威情を失ひたれば外征の功により再人望を回復せん

とせり今そを畧述せんに(2)始めメキシコ政府財政困

難の爲め國債利子の償還を停止するや英西佛合して

之を攻め事平きて英西兵を歸せしも奈翁三世は獨り

兵を止めてメキシコを攻め勝て帝國を建てしも後各

衆國の抗議に遭ひ擁立せし王を見棄てて撤兵せり、

(b)次にホライントを助んとして失敗し、(c)又普佛戰

争に際し徒に中立を守りメスブルクに騷弄せられた

ること、(d)又メスブルクを蘭國より購入せんと

せしにメスブルクの防げにより終に其意を果すこと

能はずかくして奈翁の普國に對する不満足甚く機あ

らば一戰以て普國を破らんとせり、(3)メスブルク又

獨逸統一の爲めに佛國を破らざる可からざとせる事

(二)近因 (1) 然るに遇其機を生ぜりこれイスマニ

ア王位相繼問題なり、當時西女王イサベラ諸臣を用

ひて國亂れ一八六八年内亂起り女王を廢し假政府な

り、(2)普王の遠親たるホーヘンツォルン家のレオ

ポルトを迎立して王とせんとす、(3)メスブルク又之を

贊せり(3)然るに佛國はこれ普西兩國の合併に等し

て國力の平均を破るものとし嚴しき抗議を提出して

終に佛國の上には尙未だ満足せず普國駐在公使をして普

王に對し將來レオポルトを西王とせざるの保證を得

終に戰を宣す時に一八七〇年七月なり、

全 ドイツ統一 (四) 普佛戦争(二)

(一)佛國 (二)ドイツ

(三)普軍優勢 (四)セザン開城

(五)パリ降る (六)和議 2. 償金

一 兩國の作戦計 (二)ドイツ

二 戰況 (三)セザン開城

(四)パリ包圍 (五)パリ降る

(六)和議 2. 償金

一 南部聯邦加入

二 ヲイルンム獨帝となる

三 新帝國憲法成立

參考問題

此戰爭中に出てたる知名の士の擧げよ

一八七〇年は明治何年か

如何なる地方を割讓したるか

普佛戦争の結果を述べよ

奈翁三世の末路如何

モルトケにつきて述べよ (三十二年五高)

プロシアの今日ある所以を説明せよ

マクマホンにつきて (三十二年兵學校)

十九世紀に於ける佛國政體の變遷を述べよ

一〇始めて獨逸皇帝の位につきたるプロシア王名及其

年代を問ふ (三十八年機關校)

全 ドイツ統一 (四) 普佛戦争 (二)

一 兩國の作戦計畫 (一) 奈翁三世は先南獨逸を破り

然して塙國及伊太利と同盟して普國に當らんと欲し

三十三萬餘の軍を分ち一をパセーヌに附しスツツを

守しめ一はマクマホンに托しストラスブルグ方面を

守らしめ一は豫備としてシプロンに置きぬ、

(二) 普國に於ては精密完全せる作戦計畫あれば動員

一令忽ち五十萬の大兵を召集し國王元帥となりモル

トケ參謀總長となり急進南下して佛國の境に迫まれ

り、これ佛軍の南獨逸入を看破せしによる、

二 戦況 (一) かくて奈翁は南獨逸入の豫定攻勢を取

るに能はず然かも諸國皆中立し塙伊連盟又ならざる

りて防禦の策を購するに至れり、(二) 普軍優勢八月

マクマホンを破り次でスツツを圍む (三) マクマホン

ンシプロンに退き奈翁三と合しスツツを救はんと欲

して自耳義境上よりスツツに向ひしに途中普軍と會

戦しセザン城に入る普軍圍むこと急なりマクマホン

重傷を負ひ兵氣阻喪如何ともする能はず奈翁遂に普

軍に降る九月一日なり、(奈翁三は後英國に走りて死

す) (四) 敗報パリに至るや佛人即帝政を廢し共和政

府を建て防備に盡力す九月十九日普軍來り圍むガレン

ズ風船に乘じ城外に出て義軍を募り戦ひしも敗

八七 (五) 城内兵器糧食乏し一三二日包圍を受け一

議の條件を定め五月フランクルトに本條約を結ぶこと、左和

の如し (1) エルザス東ロートリンゲンを割くこと、

(2) 箇金五十億フランツを三年間に支拂ふこと、

三 統一完成 (一) 戦争中南部は北獨逸邦に加入し

(二) 次でパリ陥落に先づドイツ一世はベル

サイエユに獨逸帝位に登り、三月伯林に國會開かれ憲

法なり統一統一遂に大成す

北米合衆國 (二)

一 ルイジアナ購入

二 フロリダ購入

三 ミネソタ以下の割取

一 政治上 (一) 北部、中央集權

(二) 南部、地方分權

(一) 北部 工業貿易

保護税要求

(二) 南部 農業

保護税反對

二 社會上 (一) 非奴隸使用

(二) 奴隸使用

南北戦争の原因

獨立後領土擴張

參考問題

一 カリアフォルニア、オレゴンの獲得は合衆國に如何なる關係を有するかを考へ

二 南部諸州は何故保護税に反對するか

三 南部は何故野蠻の遺風悖人道的奴隸制度を續けんとするか

四 北部は何故奴隸制度を廢せんとするか

五 南北戦争の原因を述べよ (三十五年東京高商)

北米合衆國

一 獨立後の領土擴張 獨立後次第に繁榮に向しが歴

代の大統領は購買攻撃を以て大に領土を擴張せり、

(一) 第三大統領ジェフアソンは其境の佛國の如き

有力な國と接するを不便とし奈翁一世の時數次敵

判の後一八〇三年千二百萬弗を以てルイジアナを購

入せり、(二) 又一八一九年五百萬弗を以てイヌビ

アムリアフロリダを購ひ更に (三) テキサス州民ヲキ

シユムリ分離して合衆國に合したる事ムリスキシコ

と相戦ひ大に之を破り一八四八和し其結果テキサ

ス、ニウミキシコ、上カリフォルニアを得同年又

オレゴン州を得たり

一 南北戦争の原因 (一) 政治上に於ては南北大に意

見を異にし北方は中央政府に比較的權力を興へんと

し南方は民主的にして可級の中央政府の權力を縮少

し各州に分與せんとす、

(二) 經濟上にても又南北異り北方は工藥物興し貿易

行はるゝにより國立銀行を立て保護税を可決せるに

南方は農業地にして利する所なきよりして之法の廢

止を主張す (三) 社會上の問題としては奴隸廢止問

題なりとす奴隸はワシントン時代より廢すべきもの

と考へられしも南部は農業上必要缺く可からざるも

のとせり、殊に綿種採取機械發明後棉花の需用大に

増加し奴隸の數も又増加し一八二〇年頃は四百萬人

となれりと、北方は製造工業地なれば奴隸使用の必

要を認めず又奴隸制度を以て天理人道に悖るものと

(西洋史二二四)

(西洋史二三五)

北米合衆國 南北戦争 (二)

- 一 南部分
 - (一) 理由
 - 1. 分離諸州
 - 2. アメリカ聯邦
 - 3. 人口
 - (二) 分離
- 二 戦争
 - (一) 當初南軍優勢
 - (二) リチモンド陥落
 - (三) 北部全勝
- 三 奴隸解放令
- 四 戦後の
 - (一) リンカーン暗殺さる
 - (二) 南部復讐

南北戦争 (三)

- 一 南部分
 - (一) 理由
 - (二) 分離
- 二 戦争
 - (一) 當初南軍優勢
 - (二) リチモンド陥落
 - (三) 北部全勝
- 三 奴隸解放令
- 四 戦後の
 - (一) リンカーン暗殺さる
 - (二) 南部復讐

參考問題

一 南北分離の直接の動機如何

二 分離後の南部

三 グラントにつきて (三十五年郵便電信校)

四 リンカーンにつきて (三十二年五高)

五 南北戦争の始末を述べよ (三十五年女子高師)

六 米國獨立以來重要な出来事を年代順に列擧せよ (三十七年神戸高商)

北米合衆國 南北戦争 (二)

南北分離 (一)以上の如き原因あり南北相争へる

時、殊に奴隸問題に關し激しく争へる時に當り一八六〇年は大統領の改選期に際せしかば南北は各自黨の候補者を出さんとして激烈なる運動をなせしが其結果終に奴隸廢止論者として最有名なるアブラム・リンカーン當選せり、(二)南部の盟主たるカロリナ州は若し南部大統領候補者の敗れし時には分離獨立せんと思ひ居たりしかばリンカーンの就職するや終に一八六〇年十二月斷然分離し翌年二月ジョルジアアラバマ、ミシジッピ、ルイジアナ、フロリダの五州と合してアメリカ聯邦を組織し奴隸使用論者なるジェフアイソンプービスを選びて大統領とせり後更にバージニア、ノルスカロリナ、テネッシー、アルカンサス、テキサスの五州加入し十一州人口九百萬となり以て北廿三州人口二千二百萬と相戦ふに至れり、

二 戦争 (一)戦は一八六一年四月を以て始まり當初は南軍の勢頗る盛なりしが次第に北軍の勝利に歸し一八六五年四月北部の將グラント南部の都會リチモントを圍み敵將リトを降し北部の全勝に歸せり、

三 奴隸解放令 是より先一八六三年リンカーンは奴隸解放令を發せり、

四 戦後の事件 (一)リンカーンは一八六五年四月劇場に於て凶徒の爲めに殺され (二)後大統領は寛大なる所置を以て南方人民の復歸を促し一八七〇年頃に至り南北相融和せり。

露土戦争 (一) 原因

- (一)露國の野心 (2)(1) 南下の宿望の露國
- (二)トルコの衰 (2)(1) 政治上の專制
- (三)コソボの難 (3)(2)(1) 財政困難

一 遠因

- (一)ボスニア反亂 (1) 二州反亂
- (二)ヘルゼゴビナ反亂 (2)(1) 二州反亂
- (三)三國干渉 (3)(2)(1) 三國干渉
- (四)ブルガリアを殺す (4)(3)(2)(1) 列國の干渉と拒絶

三 近因

- (一)露國の宣戰
- (二)ブルガリアを殺す
- (三)列國の干渉と拒絶

原因

參考問題

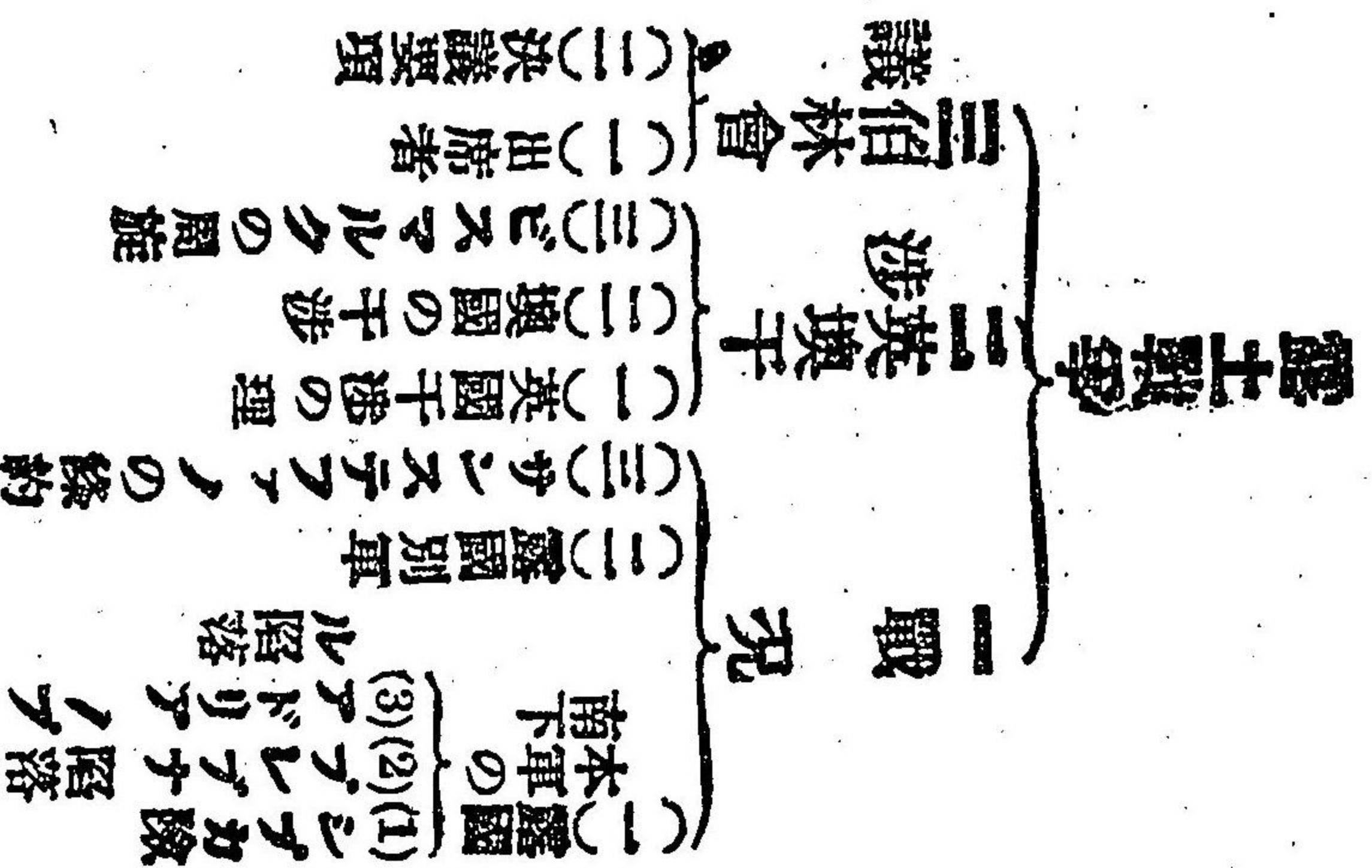
- 一 クリム戦後の露國の外交
- 二 露土戦争の近因を問ふ
- 三 露土戦争の原因を問ふ

露土戦争 (一) 遠因

一 遠因 (一)露國の野心 (1)クリム戦争後露帝アレキサンデル精勵治を圖り外は普佛戦争の虜に乗してクリム戦争の結果たるパリ條約一部の破棄を宣言し(黒海沿岸に造兵廠及軍港を築き且海に軍艦を浮ぶる權利を回復したり)海軍を擴張し (2)以て年來の宿望たるバルガ之半島南侵の機を待てること、(二)トルコ衰頹、君主專制を事とし人民を壓し宗教上にはギリ教徒を迫害し、財政困難にして賦歛益重く爲めに紛亂絶ゆる時なかりき。

二 近因 (一)ホスニア、ヘルゼゴビナ反亂、(1)二州の民トルコ政府の抑壓と重税に苦しみ且ムハマト教徒の迫害に堪えず一八七五年終に反旗を翻せり、(2)モンテネグロ、セルビア二國同情して私に其反亂を助け土耳其政府容易に之を鎮定すること能はず、(3)こゝに至りて露獨奧三國はトルコ政府に向て内政の改革(アブドラシムの公文及伯林覺書とを提出し)て)を併告せしむ拒絶せられたり、(二)然るにトルコは一八七六年ブルガリアの反亂鎮定の際大に虐殺を逞す、セルビア、モンテネグロ人等に激昂して亦反亂す、歐洲諸國は此虐殺をき、大に憤り英露佛獨奧伊六國公使(コンスタンチノブル駐在)相議し改革を提出して土耳其に干渉したるも拒絶せられぬ(一八七七)然れども野心ある露國何條黙すべきロンドン議定書なるものを作りて更に再度の干渉を試みしにトルコ再之を拒絶したり、露國怒りて一八七七年四月終にトルコに對して宣戰を布告せり、

露土戦争 (三)



參考問題

- 一 スパンパシアとは誰ぞ
二 奧國反對の理
三 伯林會議につき述べよ
四 伯林會議の決議要項を述べよ
五 左の事項を説明せよ
a. コンスタンチノブルの陥落
b. 佛國革命の發端
c. 伯林會議の結果
一八七七年に於ける露土戦争の結果
- 六 六
七 七
八 八
九 九
十 十
十一 十一
十二 十二
十三 十三
十四 十四
十五 十五
十六 十六
十七 十七
十八 十八
十九 十九
二十 二十
二十一 二十一
二十二 二十二
二十三 二十三
二十四 二十四
二十五 二十五
二十六 二十六
二十七 二十七
二十八 二十八
二十九 二十九
三十 三十
三十一 三十一
三十二 三十二
三十三 三十三
三十四 三十四
三十五 三十五
三十六 三十六
三十七 三十七
三十八 三十八
三十九 三十九
四十 四十
四十一 四十一
四十二 四十二
四十三 四十三
四十四 四十四
四十五 四十五
四十六 四十六
四十七 四十七
四十八 四十八
四十九 四十九
五十 五十
五十一 五十一
五十二 五十二
五十三 五十三
五十四 五十四
五十五 五十五
五十六 五十六
五十七 五十七
五十八 五十八
五十九 五十九
六十 六十
六十一 六十一
六十二 六十二
六十三 六十三
六十四 六十四
六十五 六十五
六十六 六十六
六十七 六十七
六十八 六十八
六十九 六十九
七十 七十
七十一 七十一
七十二 七十二
七十三 七十三
七十四 七十四
七十五 七十五
七十六 七十六
七十七 七十七
七十八 七十八
七十九 七十九
八十 八十
八十一 八十一
八十二 八十二
八十三 八十三
八十四 八十四
八十五 八十五
八十六 八十六
八十七 八十七
八十八 八十八
八十九 八十九
九十 九十
九十一 九十一
九十二 九十二
九十三 九十三
九十四 九十四
九十五 九十五
九十六 九十六
九十七 九十七
九十八 九十八
九十九 九十九
一百 一百
一百一 一百一
一百二 一百二
一百三 一百三
一百四 一百四
一百五 一百五
一百六 一百六
一百七 一百七
一百八 一百八
一百九 一百九
二百 二百
二百一 二百一
二百二 二百二
二百三 二百三
二百四 二百四
二百五 二百五
二百六 二百六
二百七 二百七
二百八 二百八
二百九 二百九
三百 三百
三百一 三百一
三百二 三百二
三百三 三百三
三百四 三百四
三百五 三百五
三百六 三百六
三百七 三百七
三百八 三百八
三百九 三百九
四百 四百
四百一 四百一
四百二 四百二
四百三 四百三
四百四 四百四
四百五 四百五
四百六 四百六
四百七 四百七
四百八 四百八
四百九 四百九
五百 五百
五百一 五百一
五百二 五百二
五百三 五百三
五百四 五百四
五百五 五百五
五百六 五百六
五百七 五百七
五百八 五百八
五百九 五百九
六百 六百
六百一 六百一
六百二 六百二
六百三 六百三
六百四 六百四
六百五 六百五
六百六 六百六
六百七 六百七
六百八 六百八
六百九 六百九
七百 七百
七百一 七百一
七百二 七百二
七百三 七百三
七百四 七百四
七百五 七百五
七百六 七百六
七百七 七百七
七百八 七百八
七百九 七百九
八百 八百
八百一 八百一
八百二 八百二
八百三 八百三
八百四 八百四
八百五 八百五
八百六 八百六
八百七 八百七
八百八 八百八
八百九 八百九
九百 九百
九百一 九百一
九百二 九百二
九百三 九百三
九百四 九百四
九百五 九百五
九百六 九百六
九百七 九百七
九百八 九百八
九百九 九百九
一千 一千
一千一 一千一
一千二 一千二
一千三 一千三
一千四 一千四
一千五 一千五
一千六 一千六
一千七 一千七
一千八 一千八
一千九 一千九
二千 二千
二千一 二千一
二千二 二千二
二千三 二千三
二千四 二千四
二千五 二千五
二千六 二千六
二千七 二千七
二千八 二千八
二千九 二千九
二千一〇 二千一〇
二千一一 二千一一
二千一二 二千一二
二千一三 二千一三
二千一四 二千一四
二千一五 二千一五
二千一六 二千一六
二千一七 二千一七
二千一八 二千一八
二千一九 二千一九
二千二〇 二千二〇
二千二一 二千二一
二千二二 二千二二
二千二三 二千二三
二千二四 二千二四
二千二五 二千二五
二千二六 二千二六
二千二七 二千二七
二千二八 二千二八
二千二九 二千二九
二千三〇 二千三〇
二千三一 二千三一
二千三二 二千三二
二千三三 二千三三
二千三四 二千三四
二千三五 二千三五
二千三六 二千三六
二千三七 二千三七
二千三八 二千三八
二千三九 二千三九
二千四〇 二千四〇
二千四一 二千四一
二千四二 二千四二
二千四三 二千四三
二千四四 二千四四
二千四五 二千四五
二千四六 二千四六
二千四七 二千四七
二千四八 二千四八
二千四九 二千四九
二千五〇 二千五〇
二千五一 二千五一
二千五二 二千五二
二千五三 二千五三
二千五四 二千五四
二千五五 二千五五
二千五六 二千五六
二千五七 二千五七
二千五八 二千五八
二千五九 二千五九
二千六〇 二千六〇
二千六一 二千六一
二千六二 二千六二
二千六三 二千六三
二千六四 二千六四
二千六五 二千六五
二千六六 二千六六
二千六七 二千六七
二千六八 二千六八
二千六九 二千六九
二千七〇 二千七〇
二千七一 二千七一
二千七二 二千七二
二千七三 二千七三
二千七四 二千七四
二千七五 二千七五
二千七六 二千七六
二千七七 二千七七
二千七八 二千七八
二千七九 二千七九
二千八〇 二千八〇
二千八一 二千八一
二千八二 二千八二
二千八三 二千八三
二千八四 二千八四
二千八五 二千八五
二千八六 二千八六
二千八七 二千八七
二千八八 二千八八
二千八九 二千八九
二千九〇 二千九〇
二千九一 二千九一
二千九二 二千九二
二千九三 二千九三
二千九四 二千九四
二千九五 二千九五
二千九六 二千九六
二千九七 二千九七
二千九八 二千九八
二千九九 二千九九
三千 三千
三千一 三千一
三千二 三千二
三千三 三千三
三千四 三千四
三千五 三千五
三千六 三千六
三千七 三千七
三千八 三千八
三千九 三千九
四千 四千
四千一 四千一
四千二 四千二
四千三 四千三
四千四 四千四
四千五 四千五
四千六 四千六
四千七 四千七
四千八 四千八
四千九 四千九
五千 五千
五千一 五千一
五千二 五千二
五千三 五千三
五千四 五千四
五千五 五千五
五千六 五千六
五千七 五千七
五千八 五千八
五千九 五千九
六千 六千
六千一 六千一
六千二 六千二
六千三 六千三
六千四 六千四
六千五 六千五
六千六 六千六
六千七 六千七
六千八 六千八
六千九 六千九
七千 七千
七千一 七千一
七千二 七千二
七千三 七千三
七千四 七千四
七千五 七千五
七千六 七千六
七千七 七千七
七千八 七千八
七千九 七千九
八千 八千
八千一 八千一
八千二 八千二
八千三 八千三
八千四 八千四
八千五 八千五
八千六 八千六
八千七 八千七
八千八 八千八
八千九 八千九
九千 九千
九千一 九千一
九千二 九千二
九千三 九千三
九千四 九千四
九千五 九千五
九千六 九千六
九千七 九千七
九千八 九千八
九千九 九千九
一〇千 一〇千
一〇千一 一〇千一
一〇千二 一〇千二
一〇千三 一〇千三
一〇千四 一〇千四
一〇千五 一〇千五
一〇千六 一〇千六
一〇千七 一〇千七
一〇千八 一〇千八
一〇千九 一〇千九
一〇千一〇 一〇千一〇
一〇千一一 一〇千一一
一〇千一二 一〇千一二
一〇千一三 一〇千一三
一〇千一四 一〇千一四
一〇千一五 一〇千一五
一〇千一六 一〇千一六
一〇千一七 一〇千一七
一〇千一八 一〇千一八
一〇千一九 一〇千一九
一〇千二〇 一〇千二〇
一〇千二一 一〇千二一
一〇千二二 一〇千二二
一〇千二三 一〇千二三
一〇千二四 一〇千二四
一〇千二五 一〇千二五
一〇千二六 一〇千二六
一〇千二七 一〇千二七
一〇千二八 一〇千二八
一〇千二九 一〇千二九
一〇千三〇 一〇千三〇
一〇千三一 一〇千三一
一〇千三二 一〇千三二
一〇千三三 一〇千三三
一〇千三四 一〇千三四
一〇千三五 一〇千三五
一〇千三六 一〇千三六
一〇千三七 一〇千三七
一〇千三八 一〇千三八
一〇千三九 一〇千三九
一〇千四〇 一〇千四〇
一〇千四一 一〇千四一
一〇千四二 一〇千四二
一〇千四三 一〇千四三
一〇千四四 一〇千四四
一〇千四五 一〇千四五
一〇千四六 一〇千四六
一〇千四七 一〇千四七
一〇千四八 一〇千四八
一〇千四九 一〇千四九
一〇千五〇 一〇千五〇
一〇千五一 一〇千五一
一〇千五二 一〇千五二
一〇千五三 一〇千五三
一〇千五四 一〇千五四
一〇千五五 一〇千五五
一〇千五六 一〇千五六
一〇千五七 一〇千五七
一〇千五八 一〇千五八
一〇千五九 一〇千五九
一〇千六〇 一〇千六〇
一〇千六一 一〇千六一
一〇千六二 一〇千六二
一〇千六三 一〇千六三
一〇千六四 一〇千六四
一〇千六五 一〇千六五
一〇千六六 一〇千六六
一〇千六七 一〇千六七
一〇千六八 一〇千六八
一〇千六九 一〇千六九
一〇千七〇 一〇千七〇
一〇千七一 一〇千七一
一〇千七二 一〇千七二
一〇千七三 一〇千七三
一〇千七四 一〇千七四
一〇千七五 一〇千七五
一〇千七六 一〇千七六
一〇千七七 一〇千七七
一〇千七八 一〇千七八
一〇千七九 一〇千七九
一〇千八〇 一〇千八〇
一〇千八一 一〇千八一
一〇千八二 一〇千八二
一〇千八三 一〇千八三
一〇千八四 一〇千八四
一〇千八五 一〇千八五
一〇千八六 一〇千八六
一〇千八七 一〇千八七
一〇千八八 一〇千八八
一〇千八九 一〇千八九
一〇千九〇 一〇千九〇
一〇千九一 一〇千九一
一〇千九二 一〇千九二
一〇千九三 一〇千九三
一〇千九四 一〇千九四
一〇千九五 一〇千九五
一〇千九六 一〇千九六
一〇千九七 一〇千九七
一〇千九八 一〇千九八
一〇千九九 一〇千九九
一〇千一〇〇 一〇千一〇〇

露土戦争 (二) 戦役及和議

一 戦況 (一)露西亞の本軍はドナウを渡リシザカの

險を陥れトルコの勇將オスマン・パシアの守れるラ
レバナの要塞を圍みて屢撃退せられしも終に一八七
七年十二月之を陥れ長驅南下シアブリアノブルを

畧シコンスタンチノブルに向へリ、(二)別軍は黒海
の東を圍り小アジアに於ける土軍を破りて本軍に
應ぜり、(三)トルコ窮して調停を英國に求めしに露

國は他國の干渉を好まず急にトルコとサンステフ
ノの條約を結び多大の利権を獲得せり、

二 英墺二國の干渉 此條約の結果トルコの領土は多
く露國の配下に屬し露國は地中海に勢力を増長する
に至るべし之れ英國の堪ふる所にあらず英國即露國

に抗議し盛に戦備をなす墺國又露國のバルカンに勢
力を伸張するを以て自國の平和に害ありとし終に兩
國相合して露國に對し、事重大ならんとせし時ビス
マルクの周旋によりて列國會議を伯林に開きサンス
テフノ條約を議するに至れり

三 伯林會議 (一)出席者 英のビコンスフェルト
(ジスレリ)露のゴルヂクフ、獨のビスマルク
(議長)墺のアビドラシ、佛のギンツト、伊の
ルチ、土のカラテオトル及マホメットアリ等主なり

(三)決議要項 (1)ロマニア、セルビア、モンテ
ネグロの獨立承諾 (2)ブルガリアを自治朝貢國とす
ルナブルカリアを東ルマリアとしてトルコの直轄とす

なすこと、(4)露國はカルス、パツム1等の地を取得
すること、(5)墺國はボスニア、ヘルツェゴビナの行政
權を得ること、(6)信教の自由を許すこと、

三國對二國同盟

(一)ビスマルクの對佛政策

一 三國同盟 (一)獨墺 (2)ノ條約と墺國
同盟 (二)ビスマルクの

策 (3)伯林會議 (三)三國同盟と佛伊離間策

歐洲の對立

二 二國同盟

三 英國の孤立

四 三國同盟弛解

參考問題

- 一 三國同盟の由來を述べよ
- 二 ビスマルクの墺伊二國と同盟せん爲めに用ひし外交策を述べよ
- 三 露佛二國同盟は何故に直に結ばれざりしが
- 四 大陸の二大同盟に對する英國の態度如何

三國對二國同盟 (西洋史二八)

一 三國同盟 (一)ビスマルクの對佛策 普佛戰爭後

ビスマルクは佛國をして復讐的戰爭を起す能はざら

しむる爲め他國と同盟せんことを考へたり、

(二)獨逸同盟 さて露土戰爭の結果サンステフ

の條約結ばるるや、佛國は獨逸の利害一致せざるを憂

へリビスマルク其機に乗じて佛國に説き舊怨を捨て

ハ普國に親ましむ次で伯林會議開かる、ハリスビスマ

ルク大に露國に冷淡にして佛國の爲めに盡力す、一

八七九年に至り兩國終に同盟す、(三)次でビスマル

クはチマニス問題を以て佛伊兩國の間を離間し伊國

の佛國を怒れるに乗じ伊國を加入せしめ三國同盟を

結べり、(一八八三年)

二 二國同盟 三國同盟の成立に對し今や孤立せる露

佛兩國は各自ら安ぜず互に相接近せんことを希望せ

しが露國は極端なる草制國なれば佛國の共和政を憂

はす爲めに直に兩國の同盟を見るに至らざりき、然

るに一八九一年終に露佛の同盟成り露國公債(シビ

リア鐵道費)はパリに募集せられ、佛國艦隊はクロ

ンスタットを訪問し露帝ニコラス二世は一八九四年

パリを訪問し大統領又露都を見舞ひ兩國の親交益厚

く繼續して今日に及び、

三 英國 大陸に於ける三大同盟あるに對し英國は何

等同盟する所なく只強大なる海軍を持し商工業の繁

榮より來る國富を以てよく此等同盟に對せり英人自

ら呼びて名譽の孤立と云べり、

四 三國同盟の弛解 其後ビスマルク死し佛國は國內

多事の爲めに伊太利は財政困難の爲め一時同盟の馳

解を見しも、日露戰後又漸く固きに向へり、

(西洋史二二九)

歐米諸國人の勢力擴張 (一) アジア

(一) 印度の計畫

シニガポール (二) 其他

香港 (三) 其他

イギリス

イ北東部計畫

ハロ黒龍江地方

浦鹽建設

イ全部併呑

ロ英國との衝突

日露戰争

三 三ツライズ

四 合衆國

五 獨逸

アジアに於ける擴張の勢力列

ニロシヤ

イギリス

三ツライズ

四 合衆國

五 獨逸

參考問題

- 一 英國がアジアに有する主なる領地を擧げよ
- 二 ホルチンヌク當時清朝の國勢如何
- 三 露國のアジア計畫につきて述べよ
- 四 露國の極東侵畧を述べよ (三十三年東京高師)
- 五 中央アジアに於ける英露の争を述べよ (三十五年兵學校)

歐米人の勢力擴張 (一) アジア

一 概説 近世に至り歐洲人が歐洲に於ける争鬭の餘力を以て歐洲以外の天地に活動を試み各其勢力を擴張し又擴張せんとする事實は注目し値す、

二 アジアに於ける列強の勢力擴張

(一) イギリス (1) インドの經營は一六〇〇年東印度會社創設に始まり七年戦争の頃大に佛國と衝突せしがクライヴ等の力により佛を破り其後ヘズチンズ等歴代總督の力により一八五七年ムガル帝國を亡ぼし翌年英國の直轄とし今日に至れり、一八二四年シંગポールを購入し、一八三九年にはアゾウチ一八四二には阿片戦争の結果香港を一八八五年にはバルバを畧取せり、

(二) ロシア (1) はイバン四世の時東方侵略の端著を開きてより六十餘年にしてオホーツク海岸に至り更に南下して一六八九年清國とネルチンスク條約を結び一時南下經營中絶せしが一八五八年には黑龍江以北を一八六〇年にはウズリイ以東を同じく清國より割取し一八六二年ウラシボストクを建設し極東計營の根據とせり、

(2) 又中央アジアに於ては一八七三年ボカラを一八七五年ヒバを征して屬國とし其他中央アジアの全部を併吞せり更に南下して英國北上の勢力と衝突し將に城を開戦せんとせしが一八八七年アフガニスタンの境を定め、一八九五年パミル方面の境界を定めて漸く事なきを得たり、

(3) 後更に轉じて滿洲の計營に腐心し終に日露の大戦を惹起し今は北滿洲に退却せり。

歐米諸國の勢力擴張 (二) アジア

アジアに於ける列強

三 フランス (一) 後印度半島計營 (二) 廣州灣租借

四 ボイツ 膠州灣租借 (三) 五合衆國 菲律賓占領

一 帝國主義の流行

二 米西戦争 キッパ島反亂

三 争の原 合衆國の干渉

四 西國軍艦の暴擧

米西戦争

三 戦争

四 結果

參考問題

- 一 佛國の後印度計營につきて述べよ
- 二 フォスの位置を問ふ
- 三 獨逸の膠州灣計營につきて語れ
- 四 北米合衆國非モントロイ主義の一例を宗せ
- 五 近世に於ける歐洲諸國の東方經營を畧記せよ

歐米諸國の勢力擴張 (一) アジア

三 フランス は拿破三世の時より後印度半島の計

に從ひ一八五八年サイゴンを占領し一八六一年コシ

エンシニアを取り一八六三年にはカンボジアを保護

國とし又一八八三年には終に安南國を保護國とし翌

年トニキン地方を併せ、一八九三年シアンムイヲオ

スを奪ひ後印度半島の大部を領有するに至れり、又

日清戦後三國干渉の報として清國廣州灣を租借せり

四 ドイツ は從來アジアには一寸の領地をも有せざ

りしが三十年山東に一宣教師の殺さるゝや、直に膠

州灣を占領し之を租借地となし極東に於ける根據地

とせり、

五 合衆國 は米西戦争の結果フィリピン群島を占領

し一八九八年十二月之を合衆國領とせり、今序を以

てこゝに米西戦争の顛末を語る可し、

一 米西戦争 (一)米國はモンロー主義を持つて他國

の干渉を防ぎ自國も又敢て他に迫らざりしが歐洲各

國帝國主義の流行に従ひ合衆國もいつしか化せられ

てモンロー主義を捨て帝國主義を持つに至れり、

(二)米西戦争の原因 はキューバ島の反亂にあり、キ

ューバ島はイスパニアに屬せしが本國政府の稅政の爲

め反亂絶えず一八九七年亂又起れり、合衆國大に島

人に同情し西班牙政府に忠告する所ありしも西國開

米國終に開戦を布告せり、

(三)戦争は常に合衆國の勝利なりしが殊にダウ

ソウ将軍のマニラ港に西艦を破り、又サムソンのサ

ンチアゴに捷つに及び西軍屈して和を乞ふ(一八九

歐米諸國勢力擴張 (三)

アフリカ分割 (二)

アフリカ 一 暗黒世界

探検家 一 主なる探検家

(一)エジプト政府の財政困

難

一 エジプト計畫

(二)英佛干渉

(三)アラビヤの亂

(四)エジプト保護國となる

二 南西計畫

イギリス

参考問題

アフリカ探検家の主なる人々を擧げよ

スエズ運河の設計者は誰ぞ

如何なる事實より英國はエジプトに干渉し始しか

アラビヤ・バシヤとは如何

現今エジプトの政治的干渉を述べよ

左記のものにつき知る所を記せよ

banモントロー主義

七

六五四三二一

スエズ運河は何年何人によりて開鑿されしか其頃

埃及の内政及財政運河並に外國との關係如何

(三十八年商船校)

歐米諸國勢力擴張 (四)

アフリカ分割 (二)

(二)英國の南亞計畵 (1)南亞喜望峯地方は葡國の領

する所なりしが一六五二年以後和蘭人の植民地とな

り、其子孫たるボリア人住したりしが英國人に壓迫

せられて一八三六七年の頃北方ナタルに移れり然

るに此地も又英人に占領せられしかば更に内地に入

り、(2)一八五二年トランスバール共和國を一八五四

年にオレンジ自由國を建設し英國亦其獨立を承認せ

り、(3)然るに後トランスバールに金鐵の發見さるゝ

や英國又之を併呑せんと欲し從來杜國にあること十

四年にして與へられた市民權を五年に短縮せんこと

を要求し杜國之を聽かざるや一八九九年(我三十三

年)開戦を布告し二十萬の英兵行きて戦ふ杜國大統

領クリケット善く戦ひしも衆寡敵せず一九〇二年

全降服せり、英國は之をトランスバール植民地及オ

レンジバール植民地と稱せり、かくて英國人の唱へ

し南亞の統一なり多年渴望せしアフリカ南北縱貫鐵

道の竣功も速からざるべし、

三 フランス、フランスは一八三〇年アルゼリアを占

領し一八八一年チウニスを保護國とし一八八四年マ

ダガスカル島を占領し一八八四年にはギニア地方を

一八八〇年にはセネガル地方を占領せり、ア地方を

四 ボイツは統一大威の爲めに植民事業は英佛二國

イリ大に手後れたり、一八八四年にトゴランド及カ

メルンを一八四一―九〇年に獨逸領西南アフリカ及

東アフリカを占領せり、

五 其他諸國 伊國、西國葡國共少許の植民地を有す、

歐米諸國の勢力擴張 (五)

太平洋分割

- 一 英領 (一)オーストラ (1)探検 (2)發見
- (二)其他諸島

割 太平洋分

- 二 佛領
- 三 獨領
- 四 合衆國 (一)布哇の探検其他 (二)土人王國 (三)合衆國の併有

參考問題

キアブテンクックとは何人ぞ
 濠州發達の原因をなすものは何ぞ
 大洋洲に於ける列國所領の主なるものを問ふ
 合衆國のハワイ領有を説明せよ
 リリオカラニとは何人ぞ
 十九世紀に於ける主要事實を年代順に列擧せよ
 (三十六年海軍兵學校) 俸末年代表を參考せよ
 クトロリア女皇治世中英國の植民政策を問ふ
 (三十七年神戸高商)

歐米諸國の勢力擴張 (五)

大洋洲分制

一 英領 (一)の最も重大なるオーストラリア大陸とオーストラリアは一六〇五年イスマニア人探検せしが後一七六九一七七〇年に及びて英人キアラツク探検し始めて英領となる、初め罪人を流す所とせしが後大に自由民の移住を奨励し漸く開拓に起きぬ一八五一年マツカリ河域に金鑛の發見さるゝや南方俄に繁榮に向ひぬこれより約半世紀にして濠州の發達驚くべきものあり終に一九〇〇年憲法を立てオースマニアを合せて濠州聯邦を作れり、
 (二)其他の英領 ニウジランドは一八三九一八七五に占領し、フイジ島の諸島は一八七四年土人の要求により之を合せ、ニウギネア(パプア)は一八八八年其東半を領し一八九三年にはソロモン諸島の南半を領有せり、
 二 佛領 は新カレドニア、ロアヨイチ、ツシエラ、ブルキニア等を主なるものとす
 三 獨領 ボイツは一八五年ビスマルク群島を領し其翌年カイゼルウルヘルムラント及びソロモン諸島を領し
 四 合衆國領 (一)布哇は一五四九年オスマニア人キダムの發見せし處なり一七七八年英人クック再探検せり、(二)一七九五年土人より出てたるカヌー全島を一統せしが後女王リリオリオカラニの時に島人米人の後援によりて亂し一八九三年主を廢して共和政を建てしが米政府干渉して終に一八九八年之を合併したり、

近世の文化 (一) 文、學

一 文學の風潮の
 荷古派
 浪漫派
 寫實派

二 英國文
 詩 人
 パスコット、
 バイロン、
 テニソン、
 其他、
 小説家
 ジッゲン、
 サツカレ、

三 獨逸文
 ノヴァリス、
 ホフマン、
 ハイネ

四 佛國文
 ロマンチ、
 ヴァルチュ、
 ユイゴ、
 モーバサ、
 寫實派

五 露國文
 ツルゲネフ、
 トルストイ

近世の文化 (二) 文學

參考問題

- 一 英佛獨露の近世著名なる文學者二人づゝを擧げよ
- 二 露國文學の特色

近世の文化 (一) 文學

一 文學の風潮 フランス革命以後文學は社會の思潮と共に變遷し十八世末まで盛に行はれたる尙古派

(ギリシアローマの古文學模倣)衰へてロマンチック派の新文學之に代れり(ロマンチック派とは尙古派

の形式的なるを排し中世文學の基督的武士道的なるを喜ぶもの)しが後又寫實の風流行せり、

二 英國文學 ウォルツォース(一七七〇—一八五〇)抒情得篇あり職務の歌有名なり、スコット(一

七七一—一八三二)バイロン(一七八一—一八二四)共に英國の名族なり、前者に湖上の美人あり後者に

チャイルトハロルトあり、チニツン(一八九〇—一八九二)は詩才圓熟し詩壇の巨擘と稱せらるアイズ

イルズオグゼキンダ、インズモリアム等あり、其他詩人にはアインルト、グラウニクあり、ジッケン

スサツカレリ等は小説家とし有名なり、三 ドイツ文學 ザーテ、シルレルの後漸くロマンチ

ック派勢力を張れリノヴァリス、ホフマン等を有名とす其後の詩人にハイネあり

四 フランス文學 十八世紀末より十九世中葉にシテトイグリアン、ラマルチノ等あり佛國ロマンチック

派の祖と稱せらる後ヂウマ、ミサラブルユイゴリ

バツサニ、ゾラ等は寫實派の巨匠なりとす、モリ

五 ロシア文學 近世著名の文士多シツウキン、ツルチネフ其最たるもの、何れも政治上抑壓に反抗し

社會の惡風を改良せんとするの傾向あり、トルスト

イ又有名なり。

近世の文化 (二) 哲學及史學

一 哲學

(一) 獨逸 アイヒテ、ヘンリク、ゲルハルト、ハニョル、バハルト、ニクエ

(二) 英國 (三) 佛國

(一) 英國 カリライル、マコヒル、アロヒル

(二) 佛國 キチエール、ルチエール

(三) 獨逸 ランケ、モツゼン

有名なる 科著書 研究的

二 史學

參考問題

一 スペンサー、ミル、ヘーゲル、ユント如何なる人

二 ランケにつきて述べよ

三 モツゼン、グロート、フリーマンにつきて知る所を述べよ

近世の文化 (二) 哲學及史學

一 哲學 近世哲學は科學の隆盛に歴せられたる觀あるも然かも獨逸に於て頗る隆盛を極めたり、

(一)獨逸哲學 獨逸にてはカント以後フイヒテ、シエリツグ、ヘーゲル等輩出せり、ヘーゲル等と派な異にしてヘルバルト、シヨルペンハツエル又最近の新派としてハルトマン、ヴント等の人々あり、
(二)英國哲學 英國にはハミルトン、ベンザム、ミル、スピンサー等の學者あり、
(三)佛國哲學 佛國にてはコント最有名なり、

二 史學 (一)英國にはカライル、マコイレあり 共に評論家にして又史家なり、前者に佛國革命史後者に英國史の著あり、グロートはギリシア史を著けして著名なり、フリマン又近時の大史家なりアル
リアン征服史最も著はる、
(二)佛國 には政治家たりシキヅ、チエール二氏史家として又有名なりギヅに文明史あり、チエールにフランス革命史あり、ルナンはキリスト傳を著はし名あり、

(三)獨逸 史學の研究亦獨逸に於て最も隆盛なりキニイブルは歴史を科學的に研究し、ロミア史を著はす、ランゲは近世史家の泰斗と仰がる、ベルリッヂ大學に教授たること五十年其間ロミア史を著はして貴族に列せられ更に八十餘歳に至りて該名なる世界史を著はせり氏は筆を下すに當りて先該博なる學識と不偏の意見を以て公平なる判斷を下したり、モゼンゼン亦有名なり、其著ロミア史はグロートの著りシア史と并稱せらる。

近世の文化 (三) 科學

- (一) 勢力不滅説と進化論
- (二) 其他
 - 1. 海王星發見
 - 2. スペクトラム
 - 3. 有機物製作
 - 4. X光線

一 科學の進歩

- (一) 蒸氣
 - 蒸氣機關
 - 蒸氣船
 - 蒸氣車
- (二) 電氣
 - 電信機
 - 電話機

近世の科學

二 科學應用

參考問題
近世科學上の二大説を説明せよ
X光線の發見者
世界最古の鐵道敷設地は何處ぞ
電信機の發明者を問ふ
アレキサンデルベルとは如何なる人ぞ
(三十六年郵電校)

八七六

電氣力の應用されたる主なるものを語れ
モールの内五名とは何人ぞ
左記の内五名につき知る所を記せ
1. バスコダカマ
2. マガリアニス
3. グラナダカマ
4. オリバロニウ
5. ミラボ
6. リンカ
7. マグマホン
8. マグマホンの大發明を問ふ
(三十七年高師)

十九

汽車
汽船
世紀科學上の大發明を問ふ
(三十七年高師)

近世の文化 (三) 科學

科學の進歩 (一)近世學術中科學の進歩を第一と

す殊にマイエルの唱導せし勢力不滅説とラマルク先

づ唱へダイヴィン之を大成したる生物進化論とを最

有名とす此二論が物理學と生物學とに貢獻する所殆

と知る可からざるなり、(二)其他ルベリエ1の海王

星發見、ブレンセ等のスペクトラの發見、リビッ

ヒの化學上より有機物が製作せらるゝことを發明せ

るが如きレインツグ之氏のX光線の發見の如き著し

き科學上の事實なりとす、

二 科學の應用 としては蒸氣及電氣力の應用を最も

有名なりとす先蒸氣の應用を述べ

(一)蒸氣機關 スコットランド人ゼームスワット

七六九年蒸氣機關を發明す、

(二)蒸氣船は一八〇七年米人ロバートフルトン之を

ハドソン河に試みて成功したる時に始まる一八一九

年に始りて大西洋航海に用ゐたり、

(三)蒸氣車 は英人スチムソンが一八二五年リバ

イプサルとマンチエスタ1間に布設したるを始めと

す、次に電氣力の應用を述べ、

(一)電信機は一八三三年獨人がツス、ヴェーベルニ

氏によりて發明せられしを一八三七年に至り米人モ

リス之を完成し米國に架設せり

(二)電話機 はスコットランド人アレキサンデル

ベルの發明せしものなり、

(三)其他 電氣の應用するものは海底電信、電燈

電車無線電信無線電話等種々あり、世界の交通上軍

事上等に諸種の便益と變化とを與へつゝあり、

近古重要年代表

一五一七年	ルイターの宗教改革唱導
一五四〇	エヌイタ會の創立
一五五五	アウグスブルクの宗教會議
一五五八	一六〇三
一五七九	英國エリザベタ時代
一五八八	必勝艦隊敗る
一五九八	ナントの勅令
一六一八	一六四八
一六二五	三十年戦争
一六三三	リウツェンの戦
一六四三	一七一五
一六四九	英國共和政
一六五三	クロンウエル、ロバートナクト
一六六〇	英國王政復古
一六八二	ペテロ大帝即位
一六八八	英國名譽革命
一七〇〇	一七二一
一七〇一	北方戦争
一七〇一	一七二四
一七一三	イヌバニア王位相續戦争
一七二三	ユトレヒト條約
一七四〇	一七四八
一七五〇	一七六三
一七五五	七年戦争
一七五八	一七八三
一七五九	北美合衆國獨立戦争
一七八九	フランス大革命
一七九三	一七九四
一七九五	恐怖時代
	ポランド滅亡

一七九六年	奈翁一世の伊本利出征
一七九八年	奈翁エジプト遠征
一八〇四年	ナポレオン帝となる
一八〇八年	トラファルガル海戦
一八〇六年	奈翁一、プロシア征伐
一八二二	奈翁モスクバの敗
一八二四—一八二五	ウィーン會議
一八二五	神聖同盟
一八三二—一八三九	ギリシア獨立戦争
一八三〇	七月革命
一八三九	ベルギーの獨立
一八四〇	阿片戦争
一八四〇	ロンドン會議
一八四八年	二月革命
一八五二	奈翁三世帝となる
一八五四—一八五六	クム戦争
一八六一	アメリカ南北戦
一八六六	イタリヤ建國宣言
一八六六	普墺戦争
一八七〇—一八七一	普佛戦争
一八七〇—一八七八	露土戦争
一八七八	伯林會議
一八八三	三國同盟なる
一八九二	二國同盟なる
一九〇二	二英柱戦争

發行所

東京麹町區 富士見町 英語研究社

第一篇	初等英文の
第二篇	初等英文法の
第三篇	西洋幽霊の
第四篇	ロイヤル字の
第五篇	第二英文法の
第六篇	第二英文法の
第七篇	アラブのラム
第八篇	ロビンソンクルイ
第九篇	第三英文法の
第十篇	第三英文法の
第十一篇	後のロビンソン
第十二篇	イソップの
第十三篇	第四英文法の
第十四篇	ギリシア神話
第十五篇	發音綴字の
第十六篇	英文日記の手引

(以下續刊)

英語研究記者編輯

初等英語叢書

每册約百五十頁 價 廿五錢 郵 稅 四錢

英語初學者の爲めに未だ斯くの如く親切に斯くの如く解り易く説明したるものなし、每編好評加湧十數版を重ぬるものあるに至れり

英語研究者編輯

英語の手ほどき

第一より第三迄は第一讀本程度
第四卷より第六卷迄は第二讀本程度

初めて英語を學ぶ人、又は英語を學びつゝある人に完
美の土臺を築き又は築き直させ人が爲めに第一、第二、
讀本程度の英語を讀み方、綴字、譯讀、文法、練習の
各欄に涉りて英語研究者一流の趣味多き筆を振ひたる
もの、英語を學ぶに如斯親切なる教師あるなし。

高野一助先生譯

市隱日錄

正價金六十錢
郵税金六錢

(第四版)

本多孝一先生著

會話作文英文語記法

正價金廿五錢
郵税金二錢

東京府立第二中學校教諭荒井常一先生著

獨習用算術の話上下二卷

定價各金卅錢
郵税金各金四錢

獨習用代數の話

近刊

理想的の英語雜誌

中學上級程度英語雜誌!!!

新英語

第一卷第七號十月一日發行 毎月一回一日發行

定價一册金五錢 郵税五厘 一年分郵税共金六十錢

理想的の初等英語雜誌!!!

初等英語研究

第三卷第十號十月一日發行 毎月一回一日發行

定價一册金六錢 郵税五厘 一年分郵税共七十錢

第一讀本程度英語雜誌!!!

初歩英語

第三卷第一號十月一日發行 毎月一回一日發行

定價一册金五錢 郵税五厘 一年分郵税共六十錢

發行所

東京市麹町區富士見町六丁目十番地
英語研究社
振替口座東京一八三三六番地

『英語研究』諸者編輯

學年別 英語カード

第一學年	金卅八錢
第二學年	金卅八錢
第三學年	四十五錢
第四學年	四十五錢
第五學年	金五十錢
學年別英語カード索引	金 八 錢

英語を覺ゆるにカードを用ゆるの利便は今や大方の等しく認むる所なり、されど坊間未だ其完全なるものな發賣せざるを以て學生の中にはカードの名を聞き、其利便なるを聞くも、未だ其如何なるものなるやを熟知せざる者多く、適々之を知り之を實行するも其煩作記記入一に自ら之を爲さざるべからざるを以て、其煩作記記入大なるに辟易して完全にこれを利用する者稀なり、社交に斯道の一大憾事と云ふべし。故に編輯局同人、社交十數氏の盡力を得て、二十有餘種百有餘冊の教科書を渉獵し、若くも其中の重要な單語短知は悉くこれを收めて一枚のカードとし、文例二三を列記し、裏面に別は其譯語を示し、且つ動詞形容詞等の不規則的變化は區別して之を併記し、中學一年程度より五年程度迄五箇に區別して、別に使用説明書を添附せるもの、されば初歩より高等に至るまで在ゆる階級の英學生は各自に適する種類を購求せば即日刻よりカード式暗誦の便多く、其功大なる新法を實行し得べく其ザオカビュラリ増し、其カレシヤを堅實ならしむる事を得べし。

英語研究社
振替口座東京二八三六番

東京市麹町區富士見町六丁目十番地

中等教科書 卡片式參考書目錄

- | | |
|-----------|-----------|
| ▲日本史 全三級 | ▲國文法 全三級 |
| ▲東洋史 全二級 | ▲漢文故事 全二級 |
| ▲西洋史 全三級 | ▲漢文難語 全二級 |
| ▲西文法 全二級 | ▲英文法 全二級 |
| ▲日本地理 全三級 | ▲算術 全三級 |
| ▲外國地理 全三級 | ▲代數 全三級 |
| ▲地文學 全二級 | ▲幾何學 全三級 |
| ▲礦物學 全二級 | ▲三角法 全二級 |
| ▲動物學 全二級 | ▲物理學 全二級 |
| ▲植物學 全二級 | ▲化學 全二級 |
| ▲生理學 全二級 | |
- 正價各金拾六錢 ●郵稅各二錢宛

記入用 白カード紙 百枚綴定價 金拾錢
野式 綴入用 白カード紙 五十枚綴布表紙金十五錢
參考書の補充別綴に便也

明治四十四年二月二十二日印刷
明治四十四年二月二十五日發行
東京市麹町區富士見町六丁目十番地

總發售處 小酒井五一郎

東京市牛込區櫻町七番地

別所 東京市牛込區櫻町七番地

日清印刷株式會社

東京市麹町區富士見町六丁目十番地

三三六(東京)英語研究社

264
813

